

寺内焼窯跡

— 寺内小学校建設に伴う近世陶磁器・瓦・煉瓦窯跡の発掘調査 —



1991・3

秋田市教育委員会・秋田城跡発掘調査事務所

題字 小松天嶺
表紙 秋田市立千秋美術館蔵『秋田街道絵巻』
（荻津勝孝筆）

序 文

本報告書は、寺内小学校敷地内で発見された、江戸時代末期から明治時代のはじめ頃まで操業された寺内焼窯跡の発掘調査報告書です。

寺内小学校が新設された高清水の丘は、国指定史跡の秋田城跡をはじめ名所、旧跡が散在し、古くから歴史探訪の地として多くの市民から親しまれている公園です。

この度発掘調査された寺内焼窯跡は、城や久保田藩内で日用雑器として使用された陶磁器、瓦などを中心に焼かれており、その陶工は、東北各地の窯場とも広く往来していたことが知られています。また学校敷地東端の一画には、発掘されたそのままの瓦窯が、生きた教材として活用できるよう覆屋をかけた展示施設として保存されています。

本書は、これらの調査成果をまとめたもので、今後の近世考古学、美術、工芸史解明の一助となれば幸いです。

最後に、報告書の刊行にあたってご指導、ご助言をいただいた関係各機関、それに工事作業中にもかかわらず、なにかと調査にご協力いただいた栗原組、三勝工務店に対し心から感謝申しあげます。

平成3年3月30日

秋田市教育委員会

教育長 長門伸一

例　　言

1. 本報告書は、秋田市立寺内小学校建設に伴って、平成元年4月から平成2年8月まで断続的に実施した寺内焼窯跡の発掘調査報告書である。

2. 調査体制

調査主体　秋田市教育委員会

調査担当　秋田城跡調査事務所

事務局　秋田市教育委員会・庶務課

3. 本報告書の執筆、編集は小松正夫、日野久があたり、遺物の実測、遺構、遺物のトレースは、松下秀博、西谷隆の他、補助員の石塚信子、斎藤尚子、桑原愛子、土田ミエ、富樫キヨ子、古城レツ子、鈴木朝子があたった。

4. 遺物写真は小松が担当した。

5. 報告書掲載の遺物写真、実測図は原則として1／3としたが、都合により縮尺を変えた場合は、遺物横に縮尺を示した。

6. 遺構実測図については、1／40を原則とした。

7. 出土遺物については、佐賀県立九州陶磁文化館・大橋康二、東北陶磁文化館・本田泰貴氏、福井県立博物館・久保智康、南外村秋田檜岡焼窯元・小松哲郎、秋田市寺内焼古四王窯・斎藤卓志、秋田市保戸窯・平野庫太郎、宮城県教育委員会・手塚均、秋田県立図書館の諸氏から懇切丁寧なご指導、ご助言を頂いたが、文中の技法、文様等の表現で誤記があれば筆者の責任である。

(敬称省略)

8. 上記の他に、

藤原弘、佐々木善三郎、菅原忠、利部修、横山伸司、福島彬人、池田憲和、石原琢也、伊賀貴志、鷺谷良一、升屋ハツエ諸氏からご指導、ご助言並びに遺物、史料の借用等のご協力を頂いた。記して感謝したい。(敬称省略)

9. 発掘作業員は次の方々である。

池田重兵衛、田村忠一、桑原平昌、桑原一寿、長沢年尾、桑原金作、長沢善悦、伊藤勲、長沢勝男、長沢ミエ、伊藤和子、土田節子、桑原利江、田村ヤエ。

なお寺内焼窯跡の発掘調査はもちろん、秋田城跡発掘調査開始当初から作業員の先頭になって調査を支えてくださった古城市太郎氏が、この報告書の完成を見ずに平成3年2月に急逝した。心からご冥福をお祈りします。

目 次

序

例 言

I. 調査に至る経過	1
II. 調査経過	3
III. 検出遺構	4
(1) 1号陶器窯跡	4
(2) 瓦窯	9
(3) 煉瓦窯	19
(4) 窯前広場	19
(5) 陶器・磁器物原	22
IV. 出土遺物	23
(1) 表面採集遺物	23
(2) 磁器物原(トレント内)出土遺物	27
(3) 1号窯前庭部包含層出土遺物	30
(4) 1号窯前庭部下層出土遺物	31
(5) 陶器物原層出土遺物	32
(6) SA006土留め板組東包含層出土遺物	34
(7) SD005溝跡出土遺物	35
(8) 3号煉瓦窯跡出土遺物	35
(9) 2号瓦窯跡出土遺物	35
(10) 4号瓦窯跡出土遺物	35
(11) 4号瓦窯跡下瓦層	36
(12) 磁器物原トレント東側包含層出土瓦	36
(13) 表面採集瓦	36
(14) 1号窯前庭部下層作業場施設出土木製品	36
(15) 窯道具	37
V. 考察	119
(1) 寺内焼窯跡の沿革について	119
(2) 磁器生産の創始と終焉年代について	121
(3) 陶工「道三」について	124
(4) 物原出土の磁器について	128
(5) 瓦窯及び出土瓦について	131

I 調査に至る経過

寺内焼跡が所在する高清水丘陵は、秋田市街地と土崎との中間に位置し、標高は約50m、丘陵の西側直下には、秋田運河(旧唐物川)、さらに約2kmで日本海に至る。古代には東北最北に位置する国指定史跡秋田城跡があり、中世から近世にかけては安東氏のゆかりの寺で湊三ヶ寺と言われる大悲寺、光明寺、妙覺寺、光明寺のあつた地としても知られている。また、幕政時代は城下町と土崎を結ぶ街道が、丘陵の真中を東南から北西方向に通る交通の要衝でもある。

本窯跡は、寛政年間(1789~1800)に萩津勝孝によって描かれたと言われる「秋田街道絵巻き」に



第1図 道路の位置

も、街道端の瀬戸物屋の出店と共に窯から立ち上る煙が描かれており、その存在と所在地については古くから知られていた。

地元では、「瀬戸山」、「瀬戸座」と通称され、陶磁器片が採集される場所として知られていた。その遺物については、研究者によって幾つか発表された他、また焼物愛好家によって採集或いは盗掘が繰り返されてきた。

遺跡は、丘陵の東南部で標高7m～14mの緩い起伏のある東斜面である。沢部は水田、尾根および斜面は畠等の耕作が行なわれていたが、おびただしい量の陶磁器片や窯道具を排除しながらの耕作は大変な作業だったようである。古者の話によれば、窯の所在は凸凹により識別できたとのことである。

昭和39年、秋田県企業局による宅地造成のため重機による大規模な開発が行なわれ、発掘調査することなく遺跡の大部分が削平等により破壊された。その後数軒の住宅が建築されたが、造成地の大部分は荒れ地として今日まで放置されていた。

平成元年、秋田市教育委員会では八橋小学校の児童増加に対処するため近接地に小学校の建設を計画し、その予定地を本窯跡の所在地に選定した。しかし、前述の宅地造成により遺跡の大部分が削平されているものとの考えから事前調査という形を取らず、工事の進行に伴って遺構あるいは包含層が確認された時点で調査を行なうこととした。

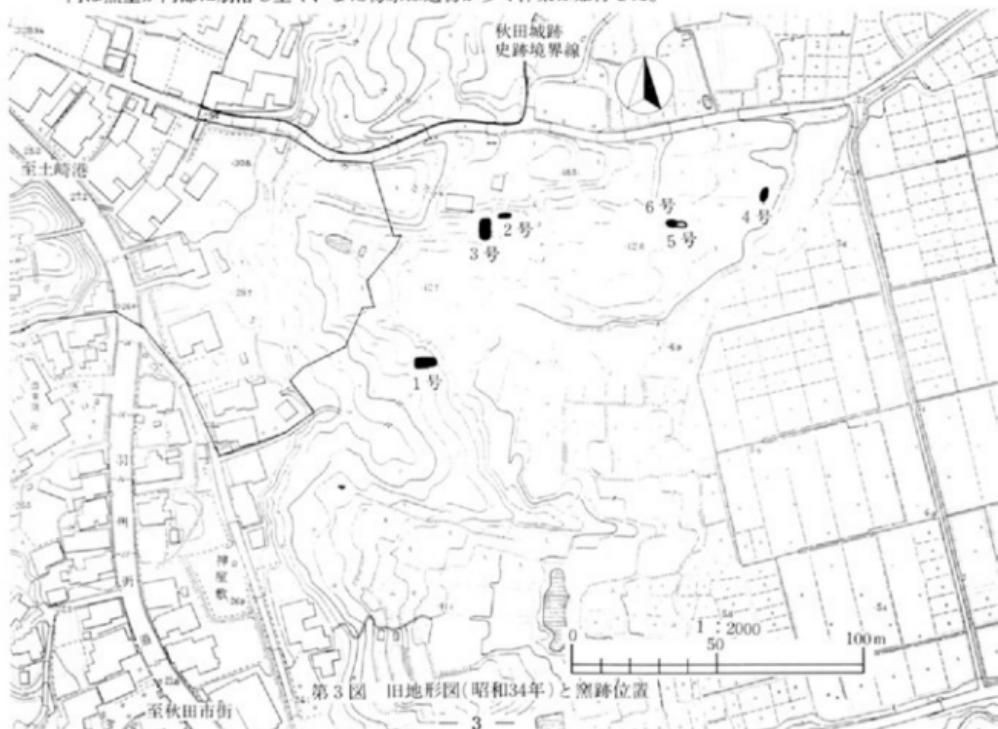
その結果4月27日、建設予定地の南端で重機が掘削を開始したところ、多量の瓦層が検出されたため急速発掘調査を実施することとなった。



II 調 査 経 過

4月27日に多量の瓦層が発見されたため、周辺の表土層を除去したところ長楕円形の瓦窯跡(4号)が検出された。プランを確認し掘り下げを開始した。また他の地区でも遺構の存在が考えられるところから建設予定地の削平される部分についてトレンチ調査を実施し、遺構の有無を確認することとした。ロストルを伴う4号瓦窯跡を完掘した(5月2日)。トレンチは、建設予定地の高所を重点的に10本設定し実施した。その結果、Dトレンチで窯壁と考えられる焼土が検出されたため、周辺を拡張し精査したところ、平坦面に構築された煉瓦と瓦からなる窯壁を有する瓦窯跡(2号)、それに斜面に構築された煉瓦窯跡(3号)が検出された。両者は同時に掘り下げていったが、窯内にはほとんど遺物ではなく作業は比較的順調に進んだ(5月22日)。

5月16日に建設予定地の西部で検出されていた窯の断面と考えられる焼土、包含層を精査した。その結果、燃焼室(胴木間)と3室の焼成室を伴う連房式の登窯(1号)であることが判明した。またその前方部は陶磁器片が多く認められることから、窯に伴う物原と考えられた。この日、窯の覆土から「秋田道三」銘の磁器蓋が出土した(5月22日)。窯内と物原の掘り下げを同時に実施したが、窯内は窯壁が内部に崩落し堅く、また物原は遺物が多く作業は難行した。



この頃から所謂焼物愛好家が遺跡見学に訪れ、調査地周辺で焼物探しを始めたのには閉口した。調査地北側で工事中の重機が、多量の磁器層にあたったため工事を中止し精査したところ、磁器の物原であることが確認された。物原の中央部に幅1mの南北方向2本のトレンチを設定し、層を確認しながら物原を掘り下げていった(5月24日)。トレンチ内の遺物取り上げは、地区的には北、中、南で、また上下については上層、下層で行なったが、結果的には遺物が極めて多い上に基本となる間層が不明確なため、明確な分類は出来なかった。東トレンチの中央部から「尾形道三」銘の磁器碗が出土し、関係者一同歓喜した(5月28日)。

5月27・28日の両日は、秋田市制100周年記念事業の一つとして「発掘体験学習」を行ない、60名余りの親子連れが学習と共に古のロマンを満喫した。

1号窯跡の前庭部を掘り下げたところ、土留めの杭列や板壁の溝跡に付随すると考えられる構造遺構などが検出され、窯に伴う作業場的施設が明らかとなった。しかし、これらの施設は層位的に1号窯跡より下層であることから、1号窯跡以前の窯に伴うものと考えられた(6月5日)。

6月1日は、来跡した南外村榎岡焼窯元の小松哲朗氏、秋田市寺内の古四王窯の齊藤卓志氏から種々ご指導をいただいた。

1号窯跡前庭部の掘立柱建物跡の南側柱列を追求するため掘り下げたところ「道三錦焼用」と具須書きされた乳棒が出土した。しかし、南に延びる柱は検出されず建物の規模については確認出来なかった(6月9日)。

1号窯跡及び物原と周辺の遺構群は、精査が終了したため平面図、杭列の側面図等の実測を行ない調査を終了した(6月8~10日)。なお、工事によって散逸した遺物の収集と一部補足調査を実施した(6月12~14日)。

陶器の物原と考えられる包含層は、グラウンド予定地内に工事用道路として最後まで残ったためその造成を待って行なうこととしていたが、平成2年8月6日に工事に入ったため、約3日間調査を実施した。その結果、上層部は昭和30年代の宅地造成時にかなり攪乱されていたようであるが、下層部については物原が遺存しており、摺鉢を中心とする陶器が大量に出土した。

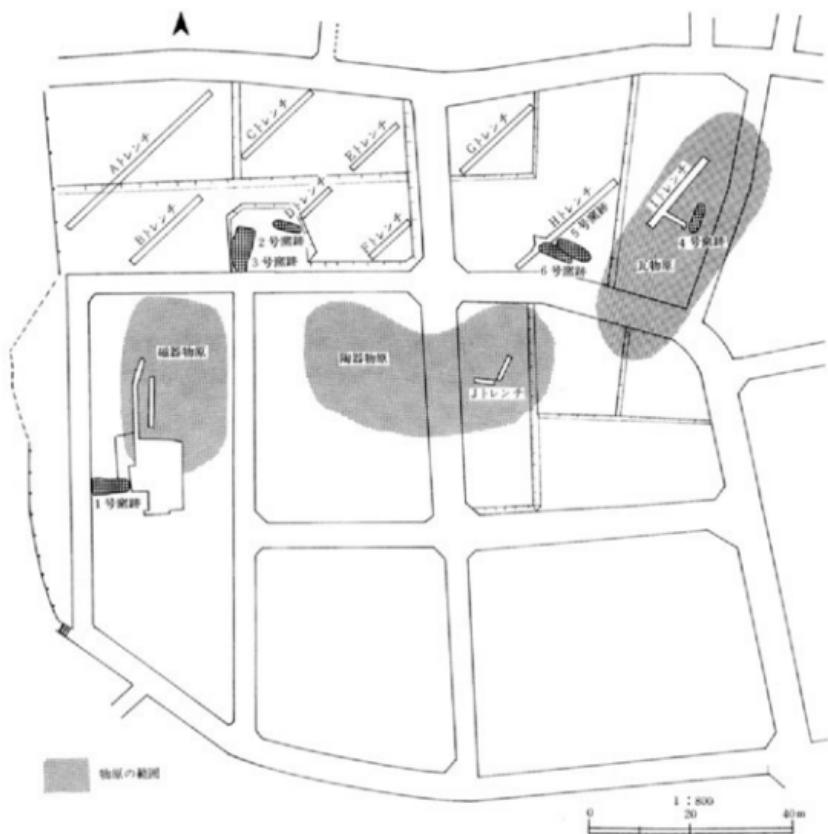
なお、学校敷地内の東端で検出された4号窯跡については、遺存状況が良好だったこと、校舎はほとんどかからないことから、覆屋をかけ保存処理した上で現状で保存することにした。その工事は、平成2年12月に完成した。

III 検出遺構

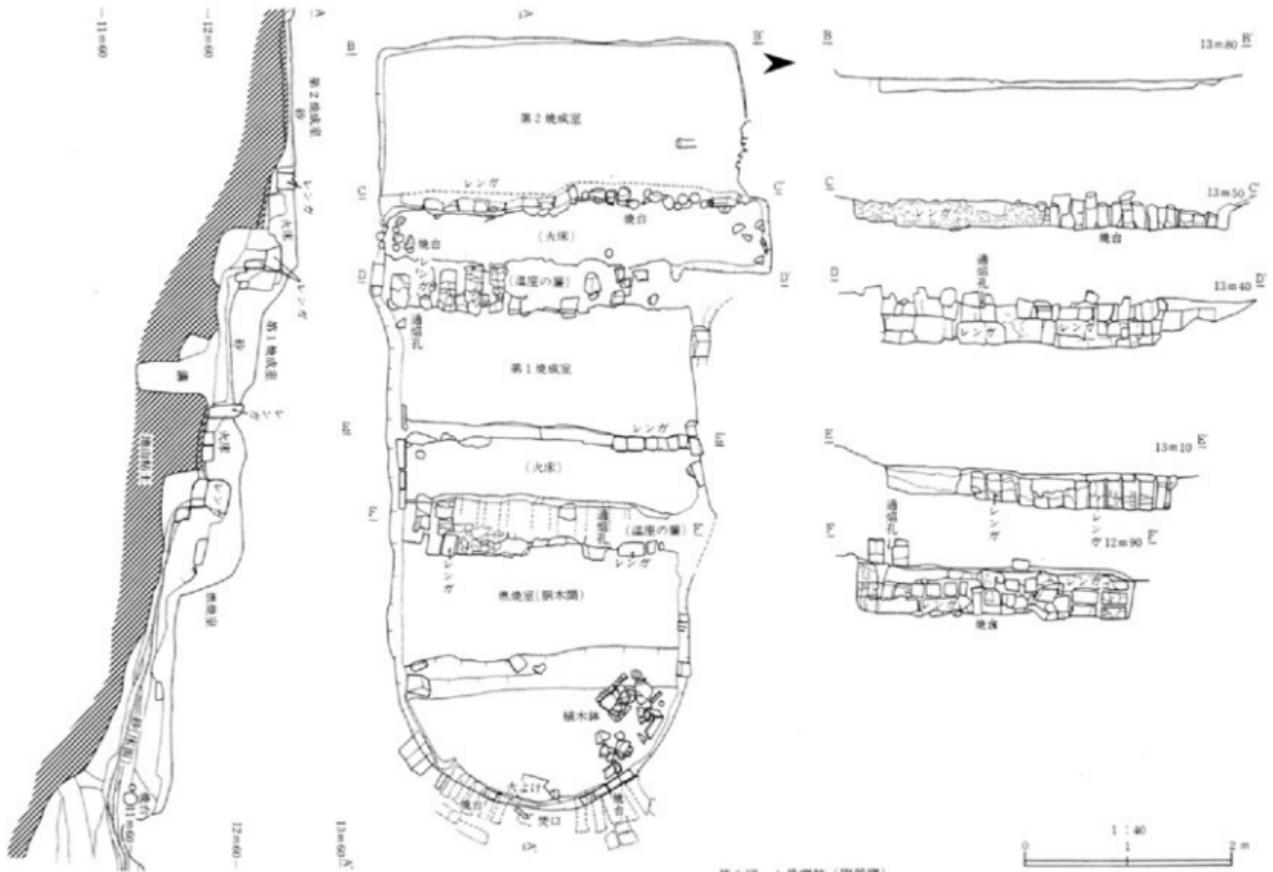
(1) 陶器窯

○1号窯跡(第5、12図、図版2~7)

東斜面の標高11.6~13.6mの範囲で検出した階段状連房式登り窯である。窯は斜面の傾斜に沿って構築されており、東側で焚口から「胴木間」と呼ばれている燃焼室、さらに西側に連続して焼成室



第4図 調査地と周辺の地形および物差の範囲



第5圖 1号窯跡(陶器窯)

2室が確認された。これより上部は削平を受けており、全体で焼成室2室であったのか、まだ焼成室が続いているのか不明である。確認全長は水平距離で約7.5m、最大幅は第2焼成室で約3.8m、第1焼成室では約3mとなっている。構造としては上部の焼成室が面積的に大きく、しかも北に張出した状態になっている。この張出し部分が焼成室の出入口であり、また窯の稼動時には追い焚きの薪の投入口になるものと考えられる。焚口は幅約0.6m、焚口から燃焼室の奥壁まで約2.5m、燃焼室の平面形は半円形で第1焼成室側に向かって弧状に開いている。燃焼室と第1焼成室の間には「火格子」、「温座の簾」と呼ばれる通焰孔のある障壁が付いている。焼成室の床面からこの通焰孔までの高さは約50cm、通焰孔の幅は約10cmで遺存状態の良いところでは高さ30cmを測る。通焰孔の数は12程度と推定される。各焼成室の前面には「火床」と呼ばれる奥行き約70cmの溝状の落ち込みがあり、その奥壁は20~30cmの高さにレンガや円柱形の焼台で構築され、畳状の高まりとなっている。その上面は灰が融着してガラス状の光沢を帯びている。窯壁は $15 \times 15 \times 30$ cmのレンガを主体に $20 \times 20 \times 40$ cmのやや大型のレンガや円柱状の焼き台を使用して構築している。特に燃焼室の焚口付近の窯壁は基礎に直径10cm、長さ30~35cmの円柱形の焼台を10本放射状に並べ、そのうえにレンガをおいている。障壁についても同様のレンガを主体とした構築がなされているが燃焼室と第1焼成室の障壁の前、南側にはレンガと円柱形の焼台が高さ約30cmに積み上げられている。これがどのような機能をもつものかは不明である。焚口付近の床面と第2焼成室の床面の比高差は約2m、各焼成室の床面は平坦になっているが燃焼室では10~15度の傾斜がある。燃焼室、焼成室、焼成室前面の落ち込み(火床)の床面にはいずれも厚さ5~10cmの砂が敷かれている。

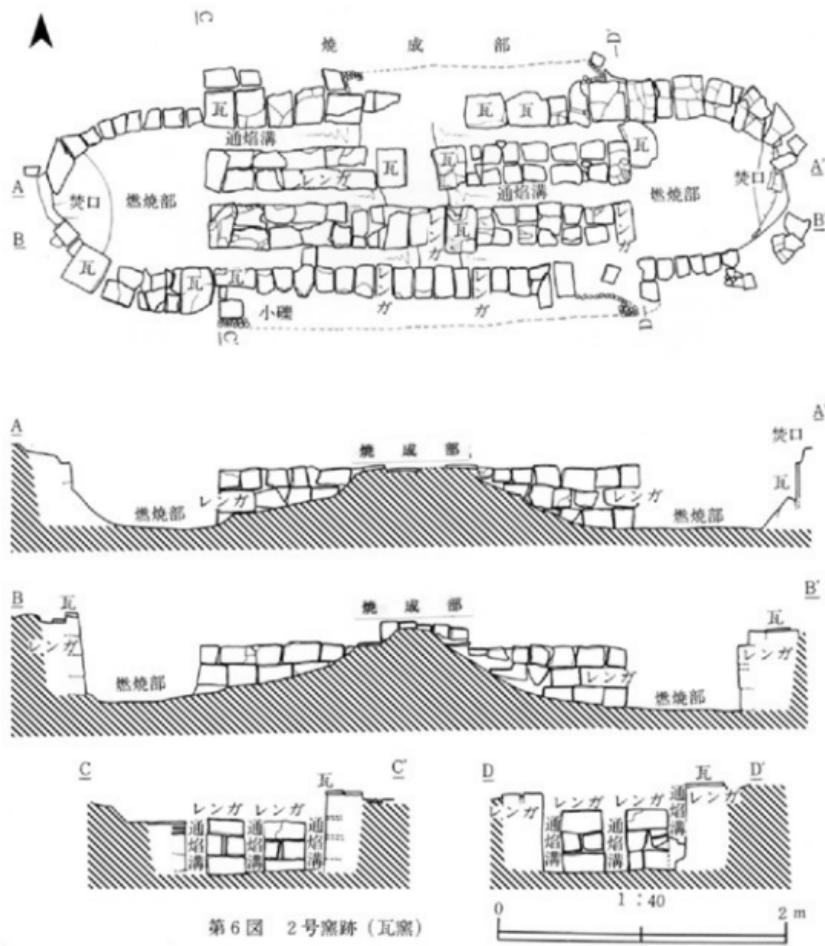
遺物としては陶磁器類では焚口付近で生焼けの角形植木鉢が、また焼成室から皿形の小形の焼台が出土しているだけである。

(2) 瓦窯

○2号窯(第6図、図版9、10)

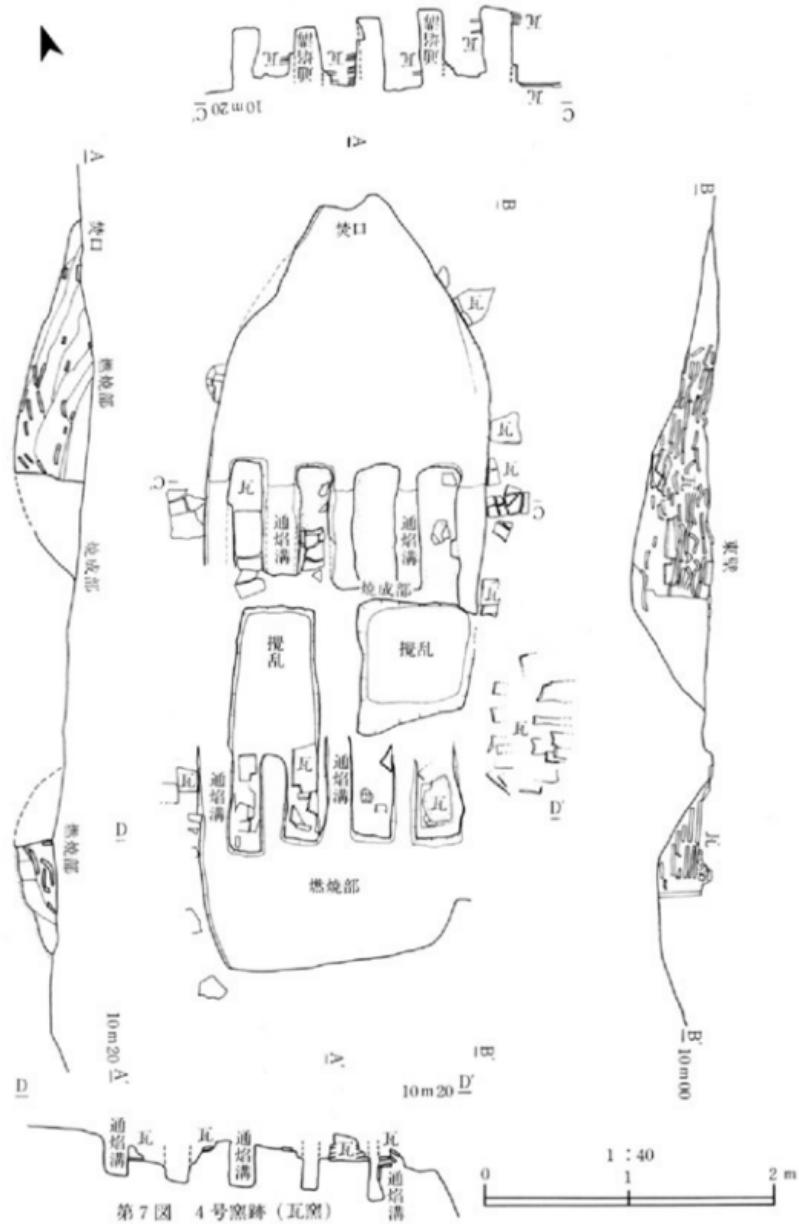
南斜面の比較的平坦な標高14.5mの地点で検出している。窯は斜面に直行する方向で構築されており、中央にロストル式の焼成部、東西に焼成部に向かって開く燃焼部が付く構造となっている。窯体は内法で東西約5.3m、南北約1.5mで、平面形は東西に長い長椭円形になっている。燃焼部の両端部には幅40cmの焚口(火入口)が設けられている。焼成部は長さ約3m、窯壁を含めた幅は約1.8mの方形で窯壁の基礎部分は直径2~3cmの小礫を敷き固めている。ロストル部分はレンガと瓦で構築されており、通焰溝は3本、長さ約3m、幅10~15cmを測る。燃焼部は焚口からの奥行きが約1m、最大幅約1m、深さ50cmとなっている。窯壁は $15 \times 15 \times 25$ cmのレンガを3~4段積み上げて構築されているが部分的に上段に瓦を使用している個所もある。焼成部は地表部に構築されたものと考えられるが基礎部分が遺存しているだけである。焼成部の窯壁の北側が南側より一段低くなっているこの部分が出入口と推定される。

遺物としては燃焼部内、ロストル近くから完形の棧瓦が出土している。



○4号窯（第7図、図版11～13）

丘陵の東端部、東斜面の標高10mの地点で検出している。窯は斜面に直行した方向に構築されており南北に長い舟形の平面形で2号窯に比較して幅の広い形態となっている。構造的には2号窯と同様で、中央にロストル式の焼成部があり、その南北に焼成部に向かって開く燃焼部が連続している。窯体は南側の焚口付近が消失しているため全体は不明であるが、遺存全長は内法で約5.3m、幅約1.9mを測る。焼成部のロストル部分は瓦を積み上げて構築されており、長さ約2.7m、幅15～20cmの通焰溝が5本認められる。燃焼部は遺存している北側では奥行きが約1.8m、胴張りの逆三角形の平面形で現地表からの深さは最深部で約50cm、床面は固く焼き締まっている。窯壁は瓦で構





第8図 SB001掘立柱建物跡

築されており、表面にはスサ入りの粘土を塗っている。

窯は古い時期の瓦窯の物原の上に構築されており窯底の下層にも多量の瓦、素焼きの鉢類などの厚い堆積層が認められる。また、この物原の下層でSB001とした掘立柱建物跡の柱を3本検出した（第8図、図版13）。柱は材が遺存しており、直径約25cmの丸柱で1.8m間隔、南北2間分であり全体の規模等については不明である。

したがってこの地区はまず、掘立柱建物跡が建てられ、その後、古い時期の窯の物原となり、最終的に本瓦窯が構築されたものと理解された。

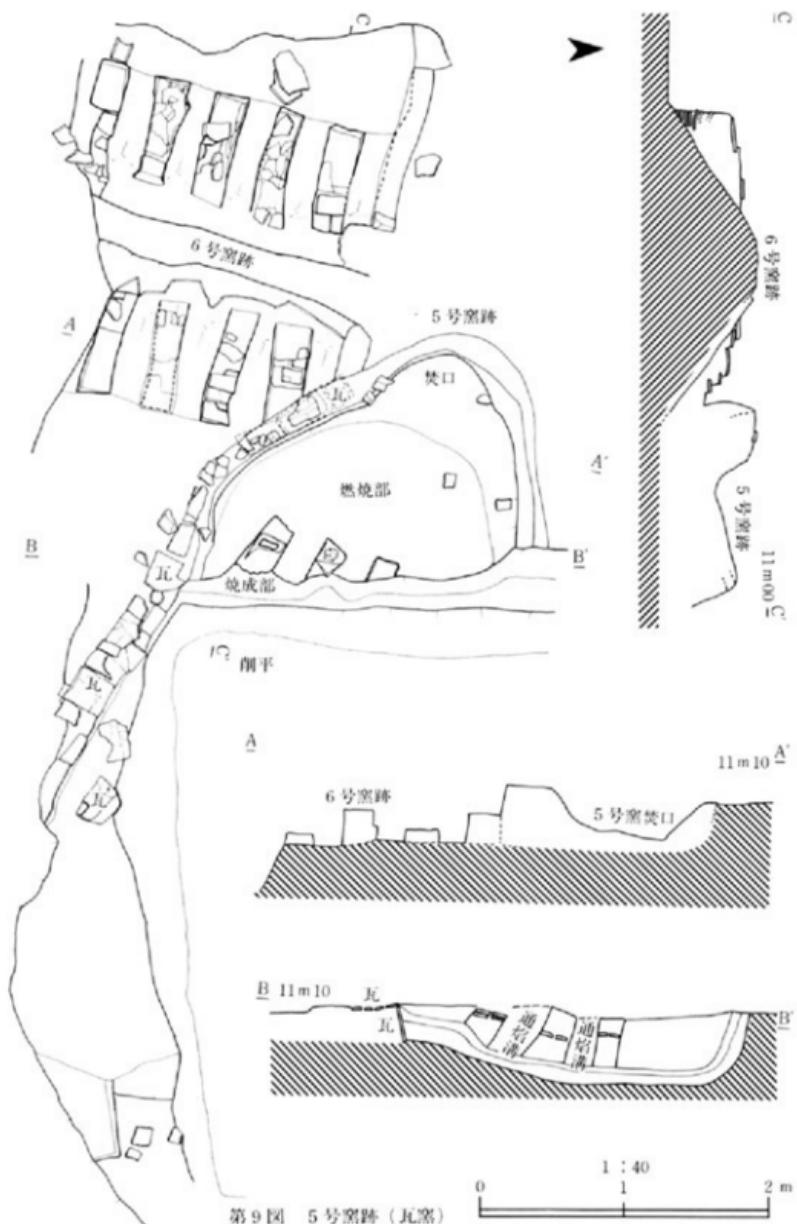
○5号窯（第9図、図版14、15）

4号窯の西、約25m、南斜面の標高約11mの地点で検出した。後述の6号窯と重複しており、これより新しいものである。造成工事のため西側の燃焼部と焼成部の一部を除いて削平を受けており、全体の規模等については不明であるが遺存全長約4.2m、推定内法幅約2.1mとなっている。平面形、構造はほぼ4号窯と同様なものでロストル式の焼成部とその東西に焼成部に向かって開く胴張りの三角形の平面形をなす燃焼部が付いている。燃焼部は奥行き約1.5m、最大幅約2m、深さは最深部で約50cm、焼成部ロストル部分の通焰溝は幅約20cm、5本程度と推定される。

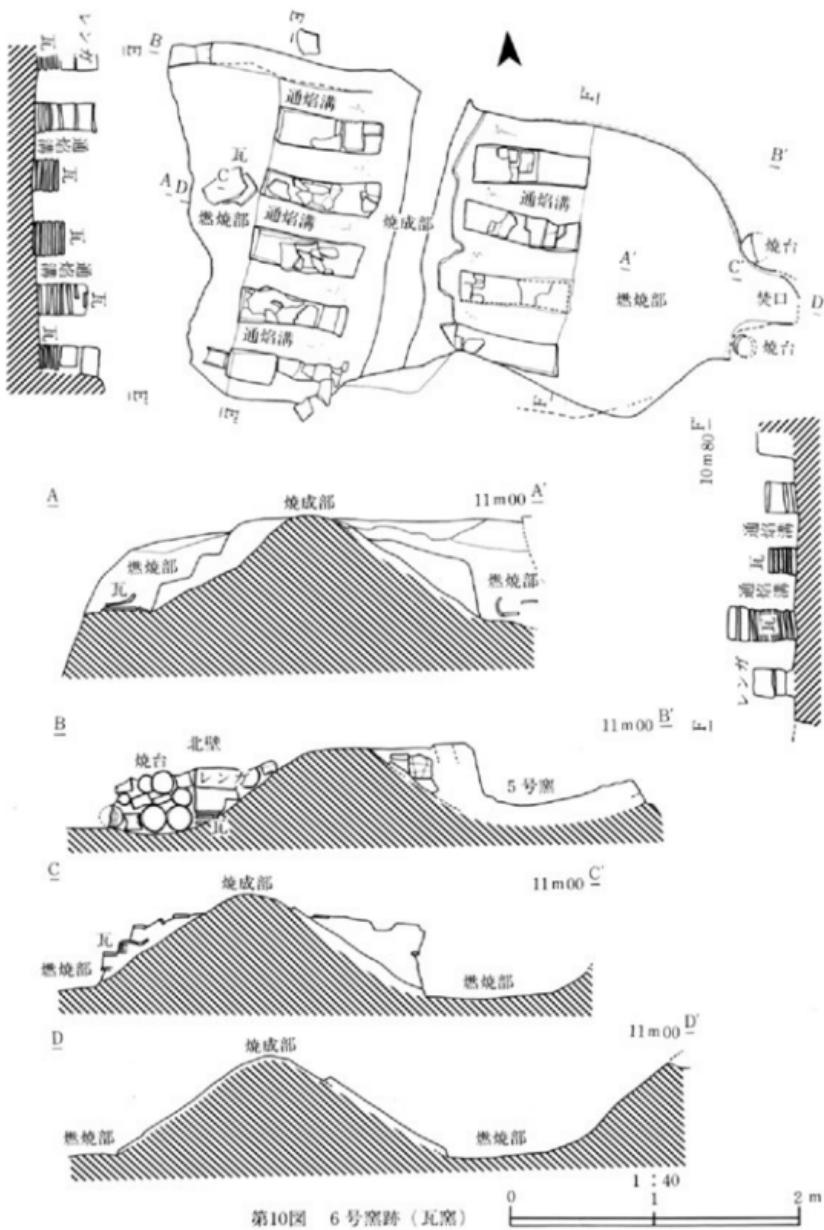
窯壁、ロストルともに瓦を積み上げ、スサ入り粘土で固めている。床面は断面観察の結果、最低でも2枚認められ、窯の造り替えがあったものと判断された。

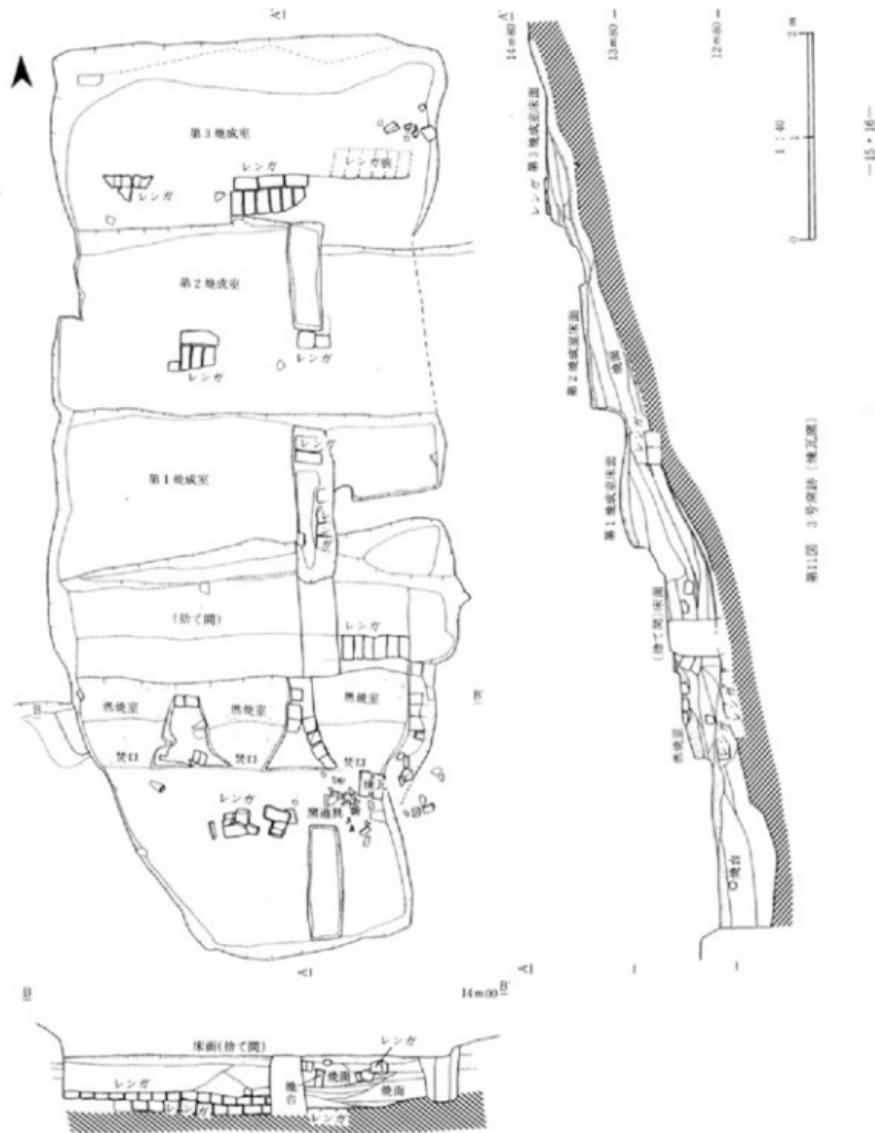
○6号窯（第10図、図版14、15）

5号窯と重複しこれより古い窯で5号窯の下、約50cmの位置で検出した。遺存全長約4.3m、最大幅は内法で約1.9m、窯壁厚を加えると約2.4mと推定される。西側の燃焼部が造成工事で削平されているが、平面形、構造は4、5号窯と同様の舟形の平面形、中央にロストル式の焼成部をもつものである。遺存している東燃焼部は奥行きが約1.2m、最大幅が約2m、焼成部に向かって開く半円形となっており、深さは最深部で約50cm、焚口幅は約50cmで両脇に円柱状の焼台を使用している。焼成部は幅約20cmの通焰溝が5本認められる。ロストル部分と窯壁は瓦を主体に構築されているが上面ではレンガを積んでいる。西の焼成部付近の北壁では円柱状の焼台をつみあげ、スサ入り粘土で固めているのが確認された。床面の下層でさらにもう1枚の固い焼け面を検出しており、本窯も造り替えが行われているものと判断された。



第9図 5号窑跡（瓦窯）





第11図 3号窯跡 (地元調)



第12図 1号施設および廻路前平地出土遺構

(3) 煉瓦窯

○3号窯（第11図、図版16、17）

2号窯の西、同じ南斜面の標高13～15mの範囲で検出している。窯は斜面の傾斜に沿って構築されており、確認全長は水平距離で約7.2m、最大幅約3.7mの階段状連房式登り窯である。削平のため窯底がわずかに遺存しているだけあり、上部も削平を受けているため窯の全体の規模については不明である。燃焼室と奥行き約1.6mの焼成室3室を確認しているが、燃焼室と第1焼成室の間には奥行きが約1mの狭いもう一室が確認されている。愛知県、市左衛門窯、東窯の例をみるとこの部分は「捨て間」と呼ばれ焼成室とは区別されており、むしろ燃焼に関連する部分と考えられる（「登窯ニ関スル調査報告書」昭和11年、商工省陶磁器試験所）。燃焼室は撥形のレンガ組の2個の仕切りによって奥行き約1m、幅約90cm、半円形の3小室に分かれている。ここから「捨て間」までは約40度の急傾斜となっており床面は固く、灰青色に焼きしまっている。撥形の仕切りは幅約70cm、長さ約90cmで焚口方向、南側が広くなっている。焚口は幅約50cm、焚口前には閉塞用と考えられる窯を構築しているものとは異質の煉瓦が認められる。各焼成室は約40cmの段差で上部へと連続しているが、間に障壁があったか、また「火床」と呼ばれている追い焼きの施設があったか不明である。焼成室床面は固く焼き締まっており、幅15cm、長さ25cmのレンガを敷き並べた痕跡が認められる。床面の下を断ち割り調査したところ、さらに下層でも敷き並べられたレンガと焼け面が2枚確認されたことから窯の造り替えのあったことが判明した。

遺物としては東側撥形の仕切り部分の南で「T」字形の煉瓦焼成用の窯道具と「カ」の刻印のある本窯で焼成されたと考えられる煉瓦が出土している。

(4) 窯前平場（第12図、図版2、18）

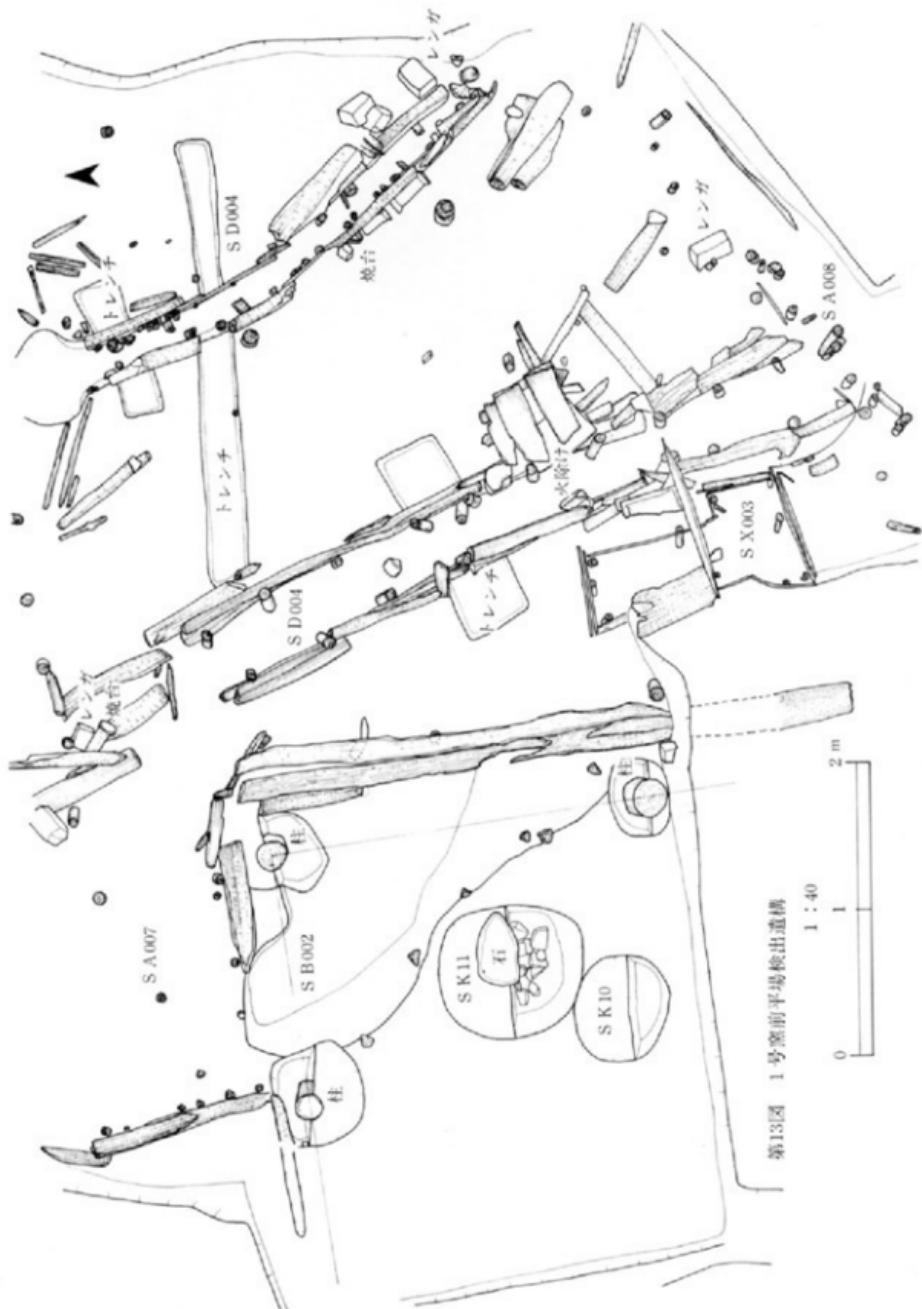
1号窯の東の地区でスクモ層の堆積する平坦面を中心に掘立柱建物跡、板組の貯水槽（樹組遺構）、排水溝、土留めの板組、土留めの杭列などの遺構を検出した。遺構の検出面は1号窯の焚口から約1.4m低い位置で1号窯の構築に伴う整地土の下層となっており、1号窯以前の遺構と考えられた。

1号窯に伴う遺構としてはSK10、11土壤があるが、この時期における遺構はこれだけであり、窯の焚口前は約5度の緩い傾斜面となっており、東側ではほぼ平坦になっていたものと考えられる。この面には1号窯から掻きだされたと考えられる焼土や炭化物、白色陶土の混じりあった土層の堆積が認められる。

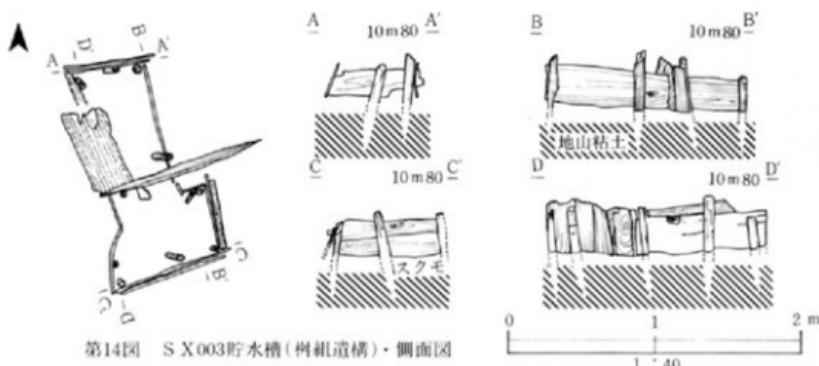
○SB002掘立柱建物跡（第12、13図、図版8）

東西2間、南北1間を検出しているが全体の規模は不明である。1号窯の軸線に一致する方向であることから当初、これに付随する覆い屋とも考えられたが1号窯構築に伴う整地土の下層で柱の掘り方を検出しており、これより古い建物跡と判断した。

東西は1.8m、南北は2.7mの柱間隔で、そのうち3本は材が遺存しており直径25～30cmの丸柱である。柱掘り方は60～70cmの方形あるいは円形で深さは約50～70cmであり、掘り方底面が地山粘土



第13図 1号窯前平場検出造構



第14図 SX003貯水槽(樹組造構)・側面図

の東西方向の傾斜に沿って西側で高くなることから屋根も傾斜に沿うような状態であったものと考えられる。

○SX003貯水槽(樹組造構) (第12~14図、図版18、19)

長方形の板組の箱を2つ組合せた状態の「L」字形の板組造構である。最長部で南北1.5m、東西80cmで幅15cm、厚さ1cmの横板を2段に組み、内側を直径7cmの打ち込み杭で押さえている。西側だけ横板の内側に縦板を立て並べている。

○SD004排水溝 (第12、13図、図版18、19)

幅約30~50cm、深さ約40cm、側壁に丸太材や角材を並べ、打ち込み杭で押された木組の溝である。磁北にたいして北で約30度西に振れる方位で、長さ約5mにわたって検出している。溝底面は北から南に向かって低くなっていると水は南に流れたものと考えられる。溝の側壁に使用されたものと考えられる丸太材や角材が壊れた状態でSA006土留め板組付近まで認められることから、溝はここまで伸びていたものと判断された。このことから溝はSA006土留め板組によって造りだされた高位部の平場からの排水のために構築され、その後SA007土留め杭列に伴う盛土の際に北側の一部が壊されたものと考えられる。溝は南側はSA008杭列付近で消失している。埋土はサラサラした灰白色砂である。

○SD005排水溝 (第12、13図、図版18)

SD004排水溝の西で検出した全長約3.5m、幅約20cm、深さ約30cmの木組の溝である。側壁の丸太材、角材を打ち込み杭で押されたもので部分的に木組の外側に円柱状の焼台やレンガを使用している。北側はSA007土留め杭列付近、南側はSA008杭列付近で消失している。溝の底面は北で高く南で低くなっていると水は南に流れているので、SA007土留め杭列によって造成された方形の平場からの排水のために構築されたものと考えられる。したがって、本排水溝はSD004より新しいものと判断された。埋土はSD004と同様にサラサラした灰白色砂である。

○SA006土留め板組 (第12図、図版18、20)

1号窯の北東部、南北約8mにわたって検出した。幅約30cm、厚さ約2cm、長さ約2.5mの横板を3段から4段組み上げ、打ち込み杭で押さえた土留めの施設である。打ち込み杭は遺存全長が約1.2m、直径約10cm、約70cmが地下に埋まり込んでいる。この板組によってその西側には平場が形成され、東側は湿地の状態であったと考えられる。この東側の湿地は磁器の物原として利用されている。

○SA007土留め杭列（第12図、図版18、20）

1号窯の北東部で検出した「コ」の字形の打ち込み杭列である。北辺が約5m、東辺が約6m、南辺が約6.5m、北辺はSA006土留め板組で、南辺は湿地から地山粘土が西に次第に高くなっていく標高11.3m付近で止まっている。杭で固まれた方形の範囲には厚い灰褐色粘土の堆積が認められた。この粘土が平場を造るための盛土で杭列はその土留めのための施設と考えられた。杭は直径約7cm、遺存全長が0.7~1mで、約50~60cmが地下に埋まり込んでいる。北辺と東辺では杭が50~60cm等間に規則正しく配置されているが南辺では間隔にバラつきがあったり、2~3本密接して打ち込まれたりしている。

時期的にはSA006土留め板組より新しくて、1号窯よりは古いもので、盛土の高さは少なくとも1m以上はあったものと考えられる。

○SA008杭列（第12図、図版18、19）

窯前平場の南、東西方向約5mにわたって検出した打ち込み杭列である。直径約5~10cmの杭を使用しており、部分的に2~3列になっている。本杭列でSD003、004排水溝が消失していることから、湿地面に盛土をし、平場を造成した際の土留めの杭列で、盛土の厚さは排水溝の側壁の高さから約30cm以上はあったものと推測される。

○SA009杭列（第12図、図版2）

SA006土留め板組の北端から北東方向に伸びる直径5~10cmの打ち込み杭列である。杭は不規則なまばらな配置となっており、SA006の板組部分が消失したものとも考えられるが明確でない。

（5）陶器・磁器物原

○陶器物原（第4図、図版1）

2・3号窯の南東地区で壺鉢や瓦、窯道具（大小の焼台、匣鉢）、陶器類などが多く出土した。出土量は膨大なもので全遺物を収集することはできなかったが土瓶、壺鉢、燈明具類などがまとまって出土している。物原の厚さは1.5~2mと厚いもので、旧地形から判断すると南斜面の高位部にあった陶器窯から廃棄されたものと考えられるが該当すると考えられる窯は検出されなかった。ただ、本物原の北側で窯壁状の焼土塊がまとまって検出された場所があり、窯は既に削平され消失していることが考えられる。

○磁器物原（第4、12図、図版8）

SA006土留め板組の東側、SA007土留め杭列の北側で染め付けを主体とする磁器類が集中して出

土した。ほとんどが焼きゆがみ、ひびわれ、へたりがあつたり、焼台に融着したり、半焼成だったりする不良品である。磁器類はこの物原の比較的上層部で出土しており、下層では素焼きの鉢や壺類が多い。物原は湿地部分に形成されており、西側の土留め板組で造りだされた平場から廃棄されたものと考えられる。

IV 出 土 遺 物

遺物の大部分は、宅地造成時の攪乱と工事によって散逸した採集遺物、陶・磁器の物原それに各遺構から出土したものである。

ここでは、表面採集遺物、磁器物原(トレンチ出土)、1号窯跡前庭部包含層、1号窯跡前庭部下層、陶器物原、SA006東側包含層、SD005溝跡、3号煉瓦窯跡、2号瓦窯跡、4号瓦窯跡下瓦層、磁器物原トレンチ東側包含層出土瓦、表面採集瓦、1号窯跡前庭部下層作業場施設出土木製品、窯道具の順で述べていきたい。

(1) 表面採集遺物

〔磁器〕

丸皿(小)(第15~18図・図版21~23) 1~13は菖蒲文、14、15は鳥に鳩籠、16~18は井桁菱に梅花文、19~21は山水文、22~27、33、34は草花文、34の外面は蝶文である。25の高台に「本七」の呉須書きがある。28は蔓草文、29は花鳥文、30、31は格子目文で見込みは蛇ノ目釉ハギである。35~41は口縁部が小波状を呈する。35~39は山水文で35、37~39は民家型、36は樓閣型である。35は口縁部に墨弾きで波千鳥文を描く。40、41は花鳥文である。

見込みに残っている目跡は、いずれも3個である。10、17、19には3足で磁器質の焼台が熔着している。32は胎土、呉須共に寺内焼とは異なると考えられる。

輪花皿(小)(第18~20図・図版24、25) 42~50、58、59、61、63は山水文である。42~44、50、59は民家型、45~47は樓閣型、49は東屋型である。61は干網か。58は口唇部に鉄釉の口紅が施されている。51は水裂地に梅花文、見込みに「福」字を呉須書きしている。52は重ね旗に桐文、53は牡丹文、54は見込みの丸文に菊花文、57は芭蕉文であろうか。60は周囲に雪輪、見込みに腰雀、62は見込み共に松竹梅文、口唇部には鉄釉で口紅、高台部に「成化年製」の呉須書きがある。64はコバルトの型紙摺りである。

58、61~63は寺内焼とは異なると考えられ、62は肥前の可能性がある。

菊花皿(小)(第19図・図版24) 55は草葉文、外面に双千鳥、56は白磁である。

丸皿(中)(第21~26図・図版25~27、29) 68~70は亀甲つなぎに梅花文、68、70は外面にそれぞれ「角用」、「詣館」の呉須書きがある。この2個体は、同文様であり半分以上欠損していることから、本来は1個体に「角館詣用」と書かれていたものと考えられる。76、77、90~92、94は山水文で76、

77は東屋型に瓢箪つなぎ文、外面は松葉および折松葉文である。76は「御役屋」の呉須書きがある。90、92は民家型である。94は細密な筆で描かれている。外面は唐草文で台部には「秋田□三製」の呉須書きがあり、「道三」と考えられる。79は雲龍文に宝文、外面は唐草文、高台部に「道三」の呉須書きがある。87、89は見込みにコンニャク印判による五弁花文、88の見込みにはネジメ花文があり、焼き継ぎが認められる。87、89は肥前の可能性がある。93は波に千鳥と魚が描かれている。

70、76、77、90~92の底部には焼台が熔着している。

輪花皿(中)(第21図・図版25) 65、67は山水文、65は東屋型である。

輪花大皿(第28図・図版32) 103は花唐草(蓮か)に蝶文の大皿である。外面は唐草を配し、口縁部近くに茶碗(縦縞に鶴文)が熔着している。高台には「寺内□□」が呉須書きされ、寺内の次は「萩」と判読でき陶工名と考えられる。後述する第53図の393には「大白方萩田東吉」銘があり、また花唐草文が酷似することから同一人の可能性もある。

玉縁皿(中)(第22~25図・図版26~28) 71、72、74は雪持笹文で71の外面は千鳥文である。73は笹文で見込みに山水文を配し、高台部に朱書きの2文字が認められる。75は楓文に多重線である。78は宝相花文と考えられるが、焼成不良である。80~84は花文である。82は内面の花文の間に蝶、外面は千鳥を配す。85は宝文、見込みは松竹梅文か。外面は唐草文で焼き継ぎが認められ、肥前の可能性がある。86は目の覚めるような青色の花文で、コバルトと考えられる。

71、75、82の見込みには3足の焼台が、80、81、90~92には底部に焼台が、72、74には焼台の足が熔着し、また78、83には3個の、84には4個の目跡が認められる。

丸皿(大)(第26~28図・図版30、31) 95~98は山水文である。95、97は民家型、98は詩句である。95の口縁部は墨彈きで渦文を描いている。99はやや深い高台が付き鉢に近い。軍配を持った人物と鹿が描かれている。100は薄黄色の化粧土にコバルトの花文である。101、102は焼き継ぎが認められ、肥前の可能性がある。

茶碗(第29~33図・図版33~37) 104、105、107は水製地に亀文、106は亀文、108~110は楓文に折松葉を配している。111~114は草花文である。114は井桁菱に梅花文の丸皿と熔着している。117、118は蔓草文、見込みに松葉文を配す。117は菖蒲文の丸皿と熔着している。122、123は笹文である。124~127は山水文である。128~130は草花文で、130は松文と見込みに磯島を配した飯茶碗と熔着している。132~134は扇面文、135は鳥、136、137は田園風景文で、137の見込みには千鳥が配されている。138は梅樹文、139は草花文、140、141、144は牡丹文である。143、147、149は草花文で、147と148高台には「石川」と呉須書きされている。145は立桶草花文、146は流水花文である。151は外面と見込みに蝶文を配す。153は高台と見込みに源氏香を配し、外面に「□役□」が呉須書きされており、「御役屋」と考えられる。156、159は丸文で、後者は「寿福」が呉須書きされている。160は山水文、見込みに磯島、161は井桁菱、見込みに「寿」字が呉須書きされている。

156、159は寺内焼とはやや胎土が異なる。107には平な焼台が熔着している。

飯茶碗(第29～32、37図・図版33～36、41) 115、116、119は蔓草つなぎ文で、見込みには谷川文を配す。119は高台に「石川」と呉須書き、さらにその横に「寺瀬」と朱書きされている。120、121は笹文と多重線、見込みには笹文を配す。131は笹文と多重線、見込みに磯島を配す。142は葦か薄文、150はつなぎ葉文、152は菊花文、154はよろけ鶴文、見込みはよろけ鶴に草葉文を配す。155は柳文、高台に「太□」が呉須書きされているが判読不能である。157は外面の口縁部と腰部にリンボウ文、主文は窓絵に龍文か。158は格子目文に3階竹で、高台に朱書きが認められるが判読不能である。215、216は格子目文で見込みに井桁菱を配す。217は唐草文、218は見込みに「賢道」の呉須書きがある。219は草花文で外面に蝶文を配す。220はコバルト、型紙摺りで窓絵に唐児文、内面口縁部にリンボウ文を配す。

155、157は寺内焼とはやや胎土が異なり、157は肥前の可能性がある。

盃(第33図・図版37) 盃およびぐい呑みである。162は口唇部に鉄釉の口紅を施す。163、165、172は山水文、166、168は人物、167は鳥、169、170は渦文に詩句、173は人物に詩句で「仁義堂 道□」とある。174は蝶文に詩句である。175は「姥川原・男鹿」高台に「二」字の呉須書きがある。176は雷文、見込みに呉須で「利」字を配す。177は素焼きで外面に「寺内」と墨書きされている。163～168、172は茶碗の可能性がある。164、165、172はそれぞれに高台に「道三」が呉須書きされているが、この他の166～171など細やかな筆運びは道三の手によるものと考えられる。

蓋(第34～36図・図版38～40) 179、180は笹文に多重線、内面に笹文である。181は山水文、182、183は扇面文、184は区画内に山水文、内面に帆掛け船を配す。185は外面共に扇面文、上面に「朱」字銘がある。186は菊花文、187は波に宝珠文、188は縦縞に梅花文、内面に草花文、189は牡丹唐草文、内面に草花文、190は松文、内面に蝙蝠文、191は蔓草つなぎ文、内面は谷川文か。192は花蝶文、193は山水文、194は水裂文か、195は胡蝶唐草文、内面は松竹梅文で外面に「富貴長春」の呉須書きがある。以上は飯茶碗の蓋である。

197、199、210は蓋物の蓋で、身受け部分は露胎である。197は格子目文に笹文、199は窓絵で焼き継ぎがある。210は菊花文である。198は牡丹文に多重線、200はコバルトで草花文を描く。

201～208は急須・茶入の蓋である。いずれも極めて薄手で、細やかな筆運びと細工は際立っている。201は「秋田道三」、202は「道三」が呉須書きされている。207は亀甲細工である。208は細い棒状のつまみで千鳥文を配す。209は軍配型を呈する。211は白磁でネジリ状のつまみを付す。

185、187、195、199は肥前の可能性がある。188は瀬戸・美濃系か。

蓋物(第36図・図版40) 212は亀甲つなぎに梅花文で、焼き継ぎがある。213は山水文、214は蛸唐草文で3点共口唇部は露胎である。213、214は段重の可能性がある。

鉢(第37～39図・図版41～43) 221、223は区画内に山水文、千鳥文を配し、見込みは宝文である。224、225は区画内、見込みに草花文、225外面は十字菱である。224は焼台に熔着している。226は縦縞文である。以上は八角鉢である。

227は山水文・民家型の輪花鉢である。228は見込みに鷺文を配し、焼台が熔着。徳利(第39図・国版43) 229～235、237は燭徳利である。230は蛸唐草文、231は山水文、232は岩に亀、234は「秋田」の呉須書きが見られる。235は雀、237はコバルトで型紙摺りである。

236は笹文の御神酒徳利である。

仏花瓶(第40図・国版44) 239は菖蒲文、240は山水文である。

香炉(第40図・国版46) 241は牡丹唐草文である。

土瓶・急須(第40図・国版44) 243は急須であるが、他は土瓶の可能性もある。245、250、251は比較的厚手であるが、他は極めて薄手である。242、246、247は山水文である。244は「寿楽軒」、250は「□康亭」の呉須書きがあり、「長康亭」と考えられる。245は亀の絵が描かれている。

火入(第40図・国版44、45) 252は口縁部が雲形文、胴の主文は山水文、254は雷文である。259は中に御神酒徳利が熔着している。火入は花鳥文、御神酒徳利は若松文である

植木鉢(第40図・国版44) 253は外面に雷文を配している。

特殊皿(第40図・国版44) 255は扇型を呈し、草花文、256は白磁四面区画皿である。

乳棒(第40図・国版44) 257、258は磁器製でいずれも使用痕が認められる。

焼台型(第41図・国版45) 4足、素焼きである。

色繪(第41図・国版45) 261は牡丹文の丸皿(小)で葉は緑、花は赤で絵付け、口縁部は小波状を呈する。262、263は茶碗、262は焼成不良で高台に「道三」の呉須書きがある。263は赤絵で梅樹文と箱の中に「道三」銘がある。267は大黒絵、外面に十字菱である。268は焼成不良の山水文風水差しと考えられるが、素焼の可能性もある。269はわずかに赤絵が残る程度である。

〔陶器〕

蓋(第42図・国版46、47) 270～297は土瓶・急須の蓋である。277、291、294は簡描の草文等を描いている。他は、化粧掛けの後に呉須、鉄釉、銅釉等で山水文、草花文、蝶文、葦文等を絵付けし、透明釉を掛け仕上げている。280は裏に呉須か、鉄釉状のもので「□□□□キ」の文字が見える。299は灰釉掛けで駿肌状を呈し、粗状のつまみを有する。300は化粧掛けの上に呉須で水裂文と梅花文を描き、透明釉掛けした蓋物の蓋である。301は簡描で外面に双蝶文、内面に野菊文を描く。

飯茶碗(第43図・国版47) 302は薄い緑色を呈する青磁風の碗である。309は人物の戲画で素焼きである。

茶碗(第43図・国版47) 303は高台に「道三」銘、304は外面に「花乃よ」の横方行の文字が呉須書きされている。

盃(第43図・国版47) 305は無文で焼成不良で、磁器の可能性もある。

餌入(第43図・国版47) 306は鉄釉、307は灰釉である。

土瓶・急須(第44図・国版48) 310、312は注口である。310、311は「道三」、312は「土焼製」、313は

「長康亭道三」銘があり、磁器の可能性がある。314～320は胴部等である。316、317は鳥文である。
鉢(第44図・図版48) 321、322は化粧掛けの上に筒描、灰釉掛けで仕上げている。

丸皿(第44、45図・図版48、49) 323、324は化粧掛け後に、鉄釉、銅釉、筒描で山水文を、325は筒描で菊花文を描いている。

水滴(第45図・図版49) 326は菊花文の型作りで素焼きである。

徳利(第45図・図版49) 327は爛徳利で熊手に松葉文を描き、熊手頭に銅釉の吹墨である。

土瓶(第45図・図版49) 328は化粧掛けの後に銅、鉄釉で山水文風を絵付けしている。内面はうすい化粧掛け。

土瓶釣手(第45図・図版49) 329は銅製である。

御衛黒壺(第45図・図版49) 330は上方部は灰釉。

油壺(第45図・図版49) 331は鉄釉の後に上半部に灰釉。

仏花瓶(第45図・図版49) 332は鉄釉の上に上方部は灰釉。

すず徳利(第46図・図版49) 333、334は鉄釉の上に上方部は灰釉。

水盤(第46図・図版49) 335は海鼠釉。

甕(第46図・図版50) 336は灰釉の上に上方部は海鼠釉。

燈明具(第46図・図版50) 338～340は鉄釉で、下半部は露胎である。

削り台(第47図・図版50) 素焼きで、胴中央部に一穴。

型(第47図・図版50) すべて素焼きである。342は用途不明。343は4足の焼台、344は紅皿、345は鳶型水滴、346は土瓶の耳、347、348は輪花皿、碗、349は八角鉢の型である。

鉢(第48図・図版51) 350は内面にのみ釉掛けした半磁器質深鉢である。

手焙(第48図・図版51) 351は素焼きである。

戸車(第48図・図版51) 352、353は磁器製である。

摺鉢(第48図・図版51) 354は大型の摺鉢で素焼きであるが、見込み周辺に使用痕が認められる。

条線は約8本一単位と考えられる。

(2) 磁器物原(トレンチ内)出土遺物

〔磁器〕

輪花皿(第49図・図版52) 355は山水文・楼閣型、356は山水文・東屋型、358は重ね旗に桐文、焼成不良である。359は網目文、見込みに銘。360は山水文・干し網、361は山水文・楼閣型で両者共口唇部に鉄釉の口紅がある。

359～361は肥前の可能性がある。

丸皿(小)(第49図・図版52) 357は瓢箪文。

紅皿(第49図・図版52) 362、363は型物である。

茶碗(第49・50図・図版52、53) 364は立桶草花文。367は蔓草文の茶碗、草花文の茶碗、山水文・民家型の丸皿(中)、文様不明の丸皿(小)が焼台と共に熔着している。368は蔓草文、見込みに「小澤」の呉須書きがある。369は田園風景文で見込みに千鳥文を配す。370、371は草花文。372は朝顔文で374と同一個体である。374の見込みには「絵師」の呉須書きがある。373は草花文の茶碗と山水文の丸皿(小)が窯壁、焼台と共に熔着し、焼台は3足の磁器製である。375は見込みに「尾形道三」、外面に「□保十三□暮冬□形□三製」の呉須書きがあるが、次ぎのように復元できる「天保十三年 尾形道三製」。378はコバルトで民家を描き、高台に朱か鉛書きの文字「赤」が一字在り、焼き継ぎがなされている。

飯茶碗(第49～51図・図版53、54) 365、366は3階松文で見込みに蝙蝠文を配す。366は内面に窯壁が熔着している。376は草か薄文、見込みに蝶文。377は山水文。379は草花文、高台に朱か鉛で「ニキ」、380は葵文に唐草で焼き継ぎあり、高台に「ヘニ」がカタカナ書きされている。381、382は格子目文で見込みは井桁菱である。380は瀬戸・美濃系と考えられる。

輪花皿(第51～54図・図版54～57) 383は山水文。390は山水文・多重民家型。392は樹花文に蝶文である。395は山水文、外面は蛸唐草風、高台に「寺内村 絵師 永八 寺内村 細工 □□」の呉須書きがある。396は牡丹唐草文の口縁部片で前者の395と同一個体と考えられる。

九皿(第51～53図・図版54～56) 384は見込みは松竹梅文で周辺文様は墨彈きがなされ、高台にハリ跡がある。386は柳文。387は山水文・多重民家型、387、389、391は山水文で縁部は墨彈きで千鳥、雲形文を描いている。391は鉢に近い。394は鯉文である。

菊花皿(第52図・図版55) 388は白磁で菊花文を配した型物。

火鉢(第53図・図版56) 393は口唇部が隆帯の雷文、体部が花唐草文である。高台の外側に接して渦巻状の足が3個付されている。外面には「天保 子ノ年 大白方 秋田 東吉」の呉須書きがある。

蓋(第54、55図・図版57、58) 397は流水花文、外面に「長」、内面に「角長」の呉須書きがある。398は内外面共波千鳥である。399はよろけ鶴文、外面に「寿」銘がある。400は蛸唐草文、内面は松竹梅文で外面に「七イ 寿」の朱書き文字があり、肥前の可能性がある。401は内外面共宝尽くし文、外面に「秋田製」の呉須書きがある。以上が飯茶碗の蓋である。

492、493は蓋物の蓋で区画の中に柳文を配す。両者同文様と考えられるが、402が焼成不良のため文様が明確でない。

404は鳥と帆掛け船、中央部が貫通しておりつまみを有しない。陶器の可能性がある。405はつまみが芭形を呈する。

仏花瓶(第55図・図版58) 406は菖蒲文である。

香炉(第55図・図版58) 407は蓮華文、408は牡丹唐草文である。

仏茶碗(第55図・図版58) 409は笹文、410は唐草文である。

灰吹(第55図・図版58) 411は口縁部雷文、主文が山水文である。

レンゲ(第55図・図版58) 412は山水文。

土瓶・急須(第56図・図版59) 中には半磁器性も含まれる。413は牡丹文、蓋は蝶文、414は蛸唐草文で両者共焼台が熔着し、激しく歪んでいる。415は山水文である。416、417は菊花文で同一個体と考えられる。419は山水文か。

徳利(第56、57図・図版59、60) 423は瓢箪型で上半部は鉢軸、下半部は灰釉の紋肌である。424は色絵丸文、425は老夫婦の呉須絵燐徳利である。426はすず徳利である。

盃(第57図・図版60) 427は草花文、428は双蝶文で外面に「□製」の呉須書きがある。429は茄子文、430は笹文、431は高台に「寺内」の呉須書きがある。432は松文、433は唐船か。434は窓絵に動物を描いている。

〔陶器〕

土瓶(第57図・図版60、61) 435は化粧掛けの上に鉄軸で草花文を絵付け、鉄砲口。使用痕跡が著しい。436は化粧掛けの上に銅軸、呉須で山水文を絵付け。使用痕跡が著しい。437は化粧掛けの上に筒描、未使用。438、439は鉄分の多い灰釉、鉄砲口。両者共使用痕跡が著しい。

土瓶の内面はすべて、やや薄い鉄軸掛けである。

蓋(第58図・図版61) 440は土鍋蓋で内外面鉄軸。441は行平蓋と考えられる。筒描で焼成不良。

鍋(第58図・図版61) 442、443は土鍋。442は下半部は露胎、上半部は灰釉、使用痕跡がある。見込に目跡5個。443は下半部は露胎、上半部は鉄軸、未使用である。444は行平、外面は鉄軸掛けの後に飛鉗仕上げ。

丸皿(小)(第58図・図版61) 445、446は化粧土の欠き落して蛸唐草文を描き、厚い化粧土で花文を描く。447は鉄軸(草)と厚い化粧土(花)で草花文を描く。

花瓶(第59図・図版62) 448は鉄軸。

徳利(第59図・図版62) 449は燐徳利で化粧掛けの後に上半部は鉄、銅軸で草花文、後に透明釉掛け。下半部は紋肌を呈する。450、451はすず徳利で450は鉄軸、上半部は海鼠軸である。451は筒描で梅樹文。

調入(第59図・図版62) 452は灰釉。

燈明具(第59図・図版62) 453は鉄軸、下半部は露胎。

油壺(第59図・図版62) 454~456は鉄軸掛けの後に灰釉。

攪鉢(第59、60図・図版62、63) 457、459は内外鉄軸。457は条線は12本前後が一単位で、片口の有無は不明。459は片口。460は内外鉄軸で条線はないが、口縁部近くまでツルツルの使用痕跡が認められる。

甕(第59図・図版62) 内外鉄軸。

片口鉢(第60図・図版63) 461、462は素焼きで使用痕跡がない。463は鉄軸の上に外面口縁部から

内面全面に海鼠軸、見込みに目跡5個。割高台である。

切立(第61図・図版64) 464は外面鉄軸、内面灰軸である。(縮尺6分の1)

鉢(第61図・図版64) 465は内外面灰軸、やや焼きがあまい。

小壺(第61図・図版64) 466は灰軸。

乳棒(第61図・図版64) 467は使用痕跡が著しい。磁器製か。

型(第61図・図版64) 468は素焼きの八角鉢型である。

手焙(第61図・図版64) 469は草花文か。

(3) 1号窯跡前庭部包含層

〔磁器〕

丸皿(小)(第62図・図版65) 470～472は菖蒲文である。すべて目跡は3個である。473は重ね旗に桐文、474は亀文、475は草花文に鳥である。

角皿(手塙皿)(第62図・図版65) 476は白磁、菊花文の型作りである。

丸皿(第62図・図版65) 477は見込みにコソニャク印判の五弁花文、外面は唐草文、高台には「福」銘がある。480は雨雲文である。477は肥前波佐見窯、480は肥前系の可能性がある。481は波に鰐文、外面は唐草文である。

輪花皿(第62図・図版65) 478は素焼きに山水文であるが、墨書きの戯画と考えられる。

輪花鉢(第62図・図版65) 479は見込みに葦か薄に鳥の丸文、底部には笹文、多重線の飯茶碗蓋が熔着している。

茶碗(第63図・図版66) 482は山水文、483は草花文、484は草花文、高台に「石川」の呉須書きがあり、窯壁が熔着している。485は双亀文。486は色絵で葉を描く、487は草葉文で、口縁部片は図示しなかったが墨揮きである。488は群人文で口唇部が鉄軸の口紅である。493は多重線で、焼成不良である。494は雲形文。

飯茶椀(第63図・図版66) 490は雲龍文、見込みは宝樹文。491は割筆による格子目文で、肥前系の西日本窯の可能性がある。492は見込みに蝶文、高台に朱書きで新、旧2回の書き込みがある。

蓋(第64図・図版67) 495は飯茶碗の蓋で、外面は草花文に「寿」字に亀文、箱内に「道三」銘がある。内面は雷文に蝙蝠、鹿、松を描く。496は蓋物の蓋で、笹文に多重線。497、498は土瓶・急須の蓋である。498は口縁部周辺に渦文、内面には「道」の呉須書きがあり、「道三」と考えられる。

土瓶・急須(第64図・図版67) 499は野菜物を描き、注口の裏側に「道三」銘がある。500は山水文で半磁器質である。501は急須か。

徳利(第64図・図版67) 502は爛徳利である。

蓋洗(第64図・図版67) 506は山水文・多重民家型。

乳棒(第65図・図版68) 509は「道三錦焼用」の呉須書きがある。焼成不良、未使用である。510は上

部が六角を呈し、下部は欠損している。

〔陶器〕

蓋(第64図・図版67) 503は上鍋蓋で内外面鉄軸掛け、504は青土瓶、505は筒描である。

蒸器(第64図・図版67) 507は多孔で灰軸。

削り台(第65図・図版68) 508は素焼きである。

植木鉢(第65図・図版68) 511は1号窯跡燃焼部炊き口床で出土、無軸で焼きゆがみが激しい。

(4) 1号窯跡前庭部下層出土遺物

〔磁器〕

丸皿(小)(第66図・図版69) 512は草花文に鳥で、口縁部は小波状を呈す。513は草花文である。

丸皿(第66、67図・図版69、70) 517は雲龍文、外面は唐草文で、焼台に熔着している。518は見込みにコニャク印判で五弁花文、外面は唐草文、口唇部には鉄軸の口紅、高台に「大明年製」の呉須書きがあり、肥前と考えられる。

輪花皿(第66図・図版69) 514は花文を散らし、見込みには「御役屋」の呉須書きがあり、焼成不良である。515は牡丹文に蝶文。

鉢(第66図・図版69) 516は外面は葦文か。内面は区画内に桐文、口縁部は墨弾きである。

蓋(第67図・図版70) 519は頬文を配した飯茶碗の蓋である。520は合子か蓋物の蓋で山水文。

茶碗(第67図・図版70) 521は呉須の吹墨である。高台は「白」の呉須書きである。

飯茶碗(第67図・図版70) 522は牡丹唐草、525は山水文か。器肉、釉が厚くむらがあり、楽焼風で高台に「道三」の呉須書きがある。この文様とまったく同じモチーフの土風呂が伝世品として花岡泰雲氏が所蔵している。

盃(第67図・図版70) 523は松鶴文、外面に「寺内製」の呉須書きがある。526は笹文、527は内外面網目文、高台に呉須書きの銘と朱書きで「あら」の文字がみられる。

茶入(第67図・図版70) 524は山水文。

盃洗(第67、68図・図版70、71) 528は見込みに草花文。529は荒磯に千鳥。

徳利(第68図・図版71) 530は色絵で恵比寿、超薄手の爛徳利である。

水滴(第68図・図版71) 531は菊花文。半磁器質。

小物立(第68図・図版71) 532は水滴の形態であるが、上部が開いている。この欠損部が寺内古四王窯の斎藤卓志氏が所蔵しており、文様が天神に梅樹であることが後日判明した。

仏花瓶(第68図・図版71) 533は菖蒲文。

香炉(第68図・図版71) 535、536は松文。536には520の蓋の破片が熔着している。

〔陶器〕

仏花瓶(第68図・図版71) 534は鉄釉の上に灰釉掛け。

鉢入(第68図・図版71) 537は灰釉。

徳利(第68図・図版71) 538は化粧土の上に透明釉掛け。一輪挿か。

油壺(第68図・図版71) 539は素焼き。

湯通(第68図・図版71) 540は素焼き。

土瓶・急須(第69図・図版72) 541～549は半磁器質である。541、542、543、546は山水文、544は「□楽軒」であり、「寿楽軒」と思われる。545、549は鳥である。547は亀、548は草花文である。550～553は土瓶で、外面下部は露胎、内面は薄い鉄釉である。550は化粧掛け後鋼、鉄釉で山水文を繪付け、透明釉掛け。551は化粧掛け後、銅釉と筒描で草文を描く。两者共仕様痕跡が著しい。552、553はソロバン玉を呈し、鉄分の多い灰釉。後者は仕様痕跡が著しい。554は注口裏に「□樂軒道三」とあり、「寿楽軒道三」と考えられる。555は同じく「道三」銘の呉須書きがある。

片口(第70図・図版73) 556は、鉄釉掛けであるが、窯変で部分的に白色化している。

土風炉(第70図・図版73) 557は素焼き。

土人形(第70図・図版73) 558は素焼きである。顔が欠損している。

深鉢(第70、71図・図版73、74) 559は外面が露胎、内面のみ釉掛け。半磁器質である。561～563は素焼きで、底部は糸切りが認められる。561は内面に厚く白土が付着しており、釉等、原料の合せ鉢と考えられる。

擂鉢(第70図・図版73) 560は素焼きで片口、条線は9～10本が一単位である。見込み部に使用痕跡がある。

型(第72図・図版74) 564は八角鉢、565は3足の焼台、566は馬型の水滴ですべて素焼きである。

(5) 陶器物原層出土遺物

〔磁器〕

九皿(小)(第73図・図版75) 567、568は鳥に鶴籠、568には楓文に松葉文の茶碗が熔着している。569は井桁蓋に梅花文の皿に、草花文に松葉文の茶碗が熔着している。いずれの茶碗も見込みに「御役屋」の呉須書きがある。

輪花皿(第73図・図版75) 570は山水文(帆掛け船文)。571は白化粧土に梅樹文を呉須書きしたもので、陶器質である。

飯茶碗(第73図・図版75) 572は亀甲つなぎに鶴文。574は区画の中に「寺内□姥□」の呉須書きがあるが、解説不能である。

茶碗(第73図・図版75) 573、576は山水文で後者は肥前の可能性がある。575は見込みに「夏又」の呉須書き。

鉢(第74図・図版76) 577は瓢箪文、外面は唐草文。

盃(第74図・図版76) 578は草花文、579は福面に豆。

盃洗(第74図・図版76) 580は帆掛け船と五重塔を描いた山水文で口縁部は、小波状を呈す。

蓋(第74図・図版76) 581は合子の蓋で草花文。

火入(第74図・図版76) 582は菊花文である。

〔陶器〕

蓋(第75、76図・図版77、78) 583~618は土瓶・急須の蓋である。583~586、589、592、593、599、602、603、607は山蓋で、化粧土の上に筒描である。611は青土瓶、612は飛鉢、613~616は平蓋で鉄釉掛け、617は灰釉、618は極めて薄手に千鳥文。他は、化粧土の上に鋼、鉄釉で革文や線、文字などを描いている。

土瓶(第76図・図版78) 619はソロバン玉型で、鉄分の多い灰釉掛け、未使用である。622は化粧土に鉄釉で山水文を描く。623は人物の座像で、半磁器質。

徳利(第76図・図版78) 620、621は爛徳利で、化粧土に筒描、透明釉掛け。

急須(第76図・図版78) 624は万古焼き風で「月寒」の籠書きがある。

土人形(第76図・図版78) 625は素焼きの獅子頭の一部と考えられる。

窯道具(第76図・図版78) 626は白土がわずかに付着している。ハリと同じ用途か。

燈明具(第77図・図版79) 627 630は皿型、631 633は器台型でいずれも過半部は露胎、上半部は鉄釉である。634、635は半磁器質である。

仏花瓶(第77図・図版79) 636、638は鉄釉の上に海鼠釉、639は鉄釉の上に鉄分の多い灰釉。637は半磁器質であるが焼成不良。

小臺(第77図・図版79) 640は体部に一穴のある蛸唐草文である。

甕(第77図・図版79) 641は火入か。642、643は内外面鉄釉。644は灰吹きか。

油壺(第77図・図版79) 645は鉄釉に上半部は白の化粧土仕上げ。646は鉄釉に透明釉。

花器(第77図・図版79) 筒描で梅樹文、灰釉掛けで還元焰焼成。

すず徳利(第78図・図版80) 648、649は鉄釉に上半部は、鉄分を含んだ灰釉。

鉢(第78図・図版80) 650は素焼き。655は口縁部が輪花風、海鼠釉であるが焼成不良で、くすんだ緑色を呈す。656は素焼きで、口縁部が小波状を呈する。

片口(第78図・図版80) 651は内外面海鼠釉。652は外面が鉄釉に透明釉、内面は灰釉で見込みに5個の目跡がある。653、654は外面鉄釉、内面は鉄分の多い灰釉。654は見込みに目跡が5個。

摺鉢(第79図・図版81) 657は内外面鉄釉、条線は12~13本が一単位と考えられる。内外に窓詰め時の粘土塊が熔着している。658は内外鉄釉。

土風炉(第79図・図版81) 659は素焼きである。

切立(第79図・図版81) 660は内外面鉄釉。

銅紐壺(第80図・図版82) 661、662は内外鉄釉で、同一個体と考えられる。

サヤ鉢(第80図・図版82) 663は口唇部に切り込みが認められる。664は内面底部に土瓶が熔着している。

皿(第80図・図版82) 665は化粧掛けの上に鉄釉で「大木」、さらに透明釉。「大木」は「大木屋」か。

脚(第80図・図版82) 666は御膳等の脚部で素焼き、上部に「金」が籠書きされている。

型(第80図・図版82) 667は南瓜型の水滴。

アテ具(第80図・図版82) 668は大型陶器製作時のアテ具と考えられる。

(6) SA006土留め板組東包含層出土遺物

磁器物原及びその下層も含むが、明確な層位は不明である。

〔磁器〕

丸皿(小)(第81図・図版83) 669、670は山水文・民家型で、669は口唇部が小波状を呈し、口縁部は墨弾きで千鳥文を配す。焼き継ぎがある。

輪花皿(第81図・図版83) 671は山水文・樓閣型。

玉縁皿(第81図・図版83) 672は楓か笹文で見込みに3足の焼台と山水文・東屋型の丸皿が熔着している。

茶碗(第81、82図・図版83、84) 674、675は山水文、677、678は蔓草文で見込みに「小澤」、「三牧」が呉須書きされている。680は流水花文、見込みに蝶文。

飯茶碗(第81、82図・図版83、84) 676は菊花文で見込みと高台に源氏香、679は宝珠・龍文、見込みは宝珠文である。681は松文で見込みに磯島。

蓋(第82図・図版84) 682は焼台に熔着し、笹文に多重線、683は山水文で両者共飯茶碗の蓋である。684は蓋物の蓋で、龍文とグラデーション帶を二重に巡らしている。685は山水文で合子の蓋である。

合子(第82図・図版84) 686は合子の身である。

燭徳利(第82図・図版84) 687は民家。

灰吹(第82図・図版84) 688は雪輪に菊花文。

〔陶器〕

蓋(第82図・図版84) 689は土瓶蓋で化粧掛けの上に銅、灰釉で絵付け。

香炉(第82図・図版84) 690は半磁器質で松文。

鉢(第82図・図版84) 691は輪花風で海鼠釉であるが、内面は海鼠釉色、外面は黒青色を呈する。下端は露胎。

土瓶(第83図・図版85) 692、694は半磁器質で、692は亀文、694は青土瓶である。

色見(第83図・図版85) 693は白土が付着している。あるいは窯道具、ハリの一種か。

上絵付用風炉(第83図・図版85) 695は多孔壁を有する上絵付用の炉(金炭窯)と考えられる。素焼きで使用痕跡は認められない。

(7) SD005溝跡出土遺物

〔磁器〕

丸皿(小)(第84図・図版85) 696は山水文・民家型で口縁部は小波状を呈する。

茶碗(第84図・図版85) 697は区画内に人物、山水文を配す。

蓋(第84図・図版85) 698は飯茶碗の蓋で牡丹唐草文である。

〔陶器〕

蓋(第84図・図版86) 699は素焼きで土瓶の蓋、700は土瓶の蓋で鉢軸。

片口(第84図・図版86) 701は素焼きの片口鉢である。

(8) 3号煉瓦窯跡出土遺物

〔陶器〕

燈明具(第84図・図版86) 702は下端が露胎、上半部が鉄軸である。

窯道具(第84図・図版86) 703~707は煉瓦の窯詰め道具である。

特殊遺物(第84図・図版86) 708は、中心部に貫通する穴が穿たれた砲弾型を呈するもので、用途は不明である。

煉瓦(第84図・図版86) 709は「カ」の刻印の煉瓦である。

(9) 2号瓦窯跡出土遺物

袖瓦(第85図・図版87) 710は赤瓦で、釘穴が一個である。窯跡北壁材として使用。

熨斗瓦(第85図・図版87) 711、712は赤瓦である。711は、4個の穴のうち両側の2個のみ貫通している。712は窯跡南壁材として使用。

隅切瓦(第85図・図版87) 713はいぶし瓦で扁平、窯跡北壁材として使用。714は赤瓦の棟瓦の一端を切り取ったものでかなりゆがみが顕著である。上面に「十七△」の寛書きがある。

(10) 4号瓦窯跡出土遺物

軒樋瓦(第86図・図版88) 715~717は赤瓦で異范の唐草文である。717は733と同范。

丸瓦(第86図・図版88) 718は赤瓦で玉縁部は短く、内面は模骨と布目痕跡が認められる。中央や左寄りに釘穴が一個認められる。

道具瓦(第86図・図版88) 719、720はいずれも赤瓦である。

鬼瓦(第86図・図版88) 721は赤瓦で上部、側面が欠損している。

(11) 4号瓦窯跡下瓦層

4号瓦窯跡より古い瓦窯の物原と考えられる。

軒棧瓦(第87図・図版89) 722、723はいぶし瓦で同范の波文である。728、729は赤瓦で前者は三巴文と唐草文、後者は三巴文と波文の組合せである。

棧瓦(第87図・図版89) 724はいぶし瓦、725は赤瓦である。

道具瓦(第87図・図版89) 726、731はいぶし瓦。

袖瓦(第87図・図版89) 727はいぶし瓦で三巴文である。

(12) 磁器物原トレンチ東側包含層出土瓦

軒棧瓦(第87図・図版90) 732は赤瓦で三巴文と唐草文の組合せ、728、737の唐草文は同范である。733は赤瓦で唐草文、717と同范である。

(13) 表面採集瓦

軒棧瓦(第88図・図版90) 734は赤瓦で三巴文(縮尺1/3)、739は赤瓦で唐草文と釘抜き紋の組合せである。740はいぶし瓦で無文。736は赤瓦で「金」字文、737は赤瓦で唐草文と「松」字文の組み合わせで唐草文は728、732が同范である。

軒丸瓦(第88図・図版90) 735は赤瓦で連珠と三巴であるが、自然軸のため部分的に霜降り状の光沢のある白色に変色している。

道具瓦(第88図・図版90) 738はいぶし瓦で瓦頭は軒棧瓦より大きく無文、本体は円形を呈したことから下り棟等に葺かれるものと考えられる。

(14) 1号窯前部下層作業場施設出土木製品

下駄(第89図・図版91) 差歯下駄で表面は黒漆塗りである。鼻緒親指右側の磨滅が顯著であることから左足用と考えられる。

特殊木製品(第89図・図版91) 742は形状は下駄と類似するが、底面に竹釘痕跡が4~6本程見られ、また底面に磨滅痕跡も認められることから完成品と考えられるが、用途は不明である。

板材(第89、90図・図版91、92) 744は加工板材である。750、751の形状は完形であるが、用途は不明である。

漆椀(第89図・図版91) 745、746は内外黒漆、747は内面が赤漆、外側が黒漆塗りである。

底板(第90図・図版92) 748、749、752、753は曲物等の底板と考えられる。748は板2枚を竹釘で

接合している。752は曲物の側がわずかに遺存している。754は用途不明である。

(15) 窯道具

窯道具は多量に出土したが、遺構に伴うものはきわめて少ない。

ここでは、遺構、出土層位と無関係に形状、大きさ、機能面で次のように分類し図示した。

A 類=十字型を呈し、型造りで所謂「テンピン」等で呼ばれるものである。全面に布目痕跡が認められる。

B I 類=円棒状を呈し、上下が平坦に広がる所謂「トチン」等で呼ばれるもので、30cm以上のもの。

II 類=同上で20~30cmのもの。

III 類=同上で10~20cmのもの。

IV 類=同上で10cm以下のもの。

C I 類=器台(鉢)状のもので、平面が円形のもの。

II 類=同上で、平面形が方形のもの。

D I 類=断面が逆台形、平面が円形の所謂「ハマ」等で呼ばれるもので、直径10cm以上のもの。

II 類=同上で直径10cm以下のもの。

III 類=同上で上面が二段を呈するもの。

E I 類=扁平な円盤状を呈するもの。

II 類=同上で上面にさらに一段の円があるもの。

F I 類=扁平な円盤に足のついた「足付きハマ」で3足のもの。

II 類=同上で4足のもの。

III 類=同上で5足のもの。

G 類=棒状の支柱。

【A類】(第91図・図版93) 755~758はすべて表採である。755はE I 類の痕跡が認められる。756は磁器質のE I 類、757はD II 類が熔着している。758は磁器質のE I 類に、見込みに蝶文の茶碗が熔着している。

【B類】(第92図・図版94) 図中の断面は、上面を図示したものである。765~768はI 類、769はII 類、773~775はIII 類、776、777はIV 類である。770~772の全長は不明であるが、それぞれ側面に磁器片が熔着している。

766、768、769は1号窯跡炊口部の壁材として転用されたもので、それ以外はすべて表採である。

【C類】(第91、92図・図版93、94) 764、778~780、811はI 類で764、778、779は上面が平坦である。763はII 類で上面は長方形で中央部に凹みがある。

【D類】(第91、94図・図版93、96) 789~791はI 類、792~796はII 類で792、796は磁器である。

760、761はIII類である。792、796は1号窯跡前庭部包含層出土で、他は表採である。

【E類】(第94図・図版96) 782、797~801はI類、802はII類である。782は大型のもので器を乗せた痕跡はなく同類に入れたが、サヤ鉢の蓋の可能性もある。797、798は1号窯跡前庭部包含層出土で、他は表採である。

【F類】(第94図・図版96) 803はIII類、804はII類、805~810はI類である。806は足に離れ土としての白土が塗られている。807、809は中心部に小穴がある。809、810は磁器質である。805、808は1号窯跡前庭部包含層出土で他は表採である。

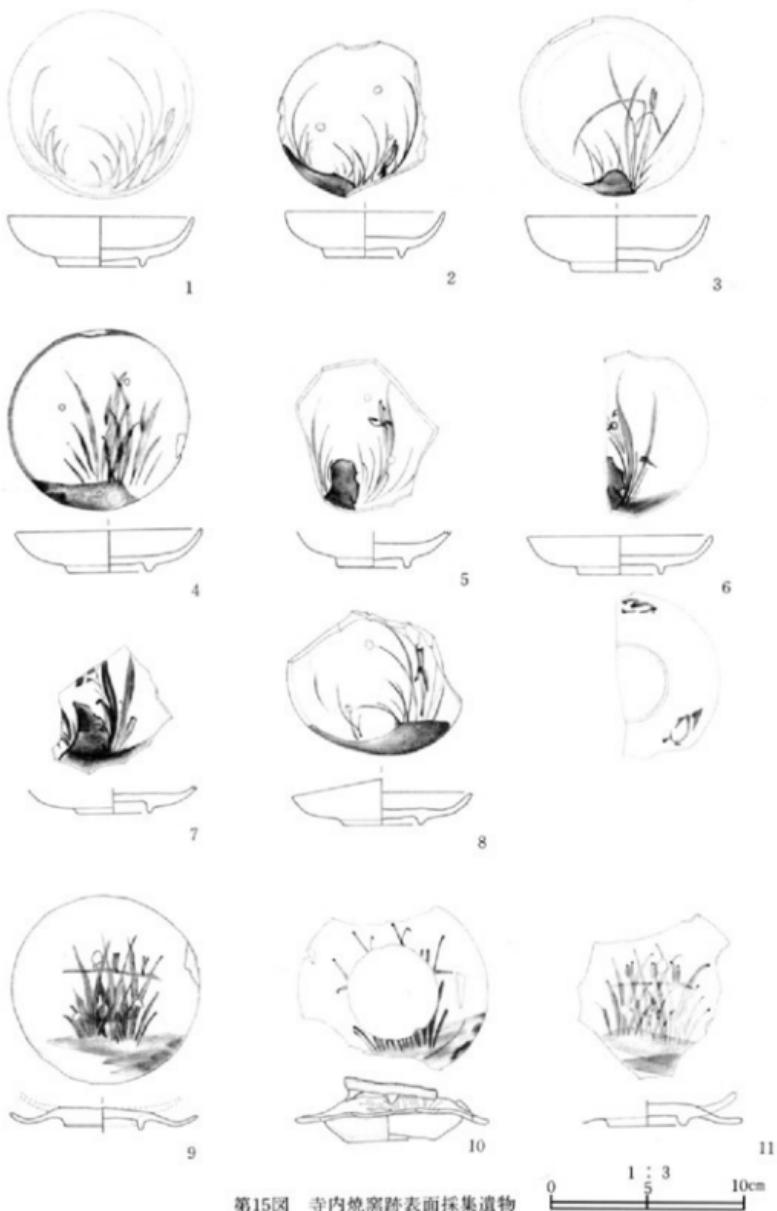
【G類】(第94図・図版96) 812は断面が方形、長さ約18cmで陶質であるが焼縮まっている。

その他の窯道具

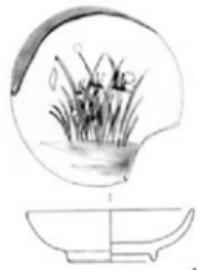
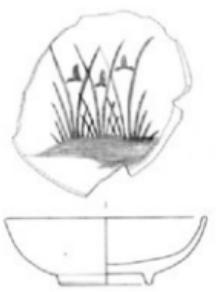
火除け(第93図・図版95) 783は窯内でヘタれたもので、網目文の瓶茶碗が熔着している。784は上部に焼台の痕跡がわずかに認められる。両者共窯内では、基部が10cm前後埋まっていた痕跡が認められる。

窯盤塊(第93図・図版95) 表面が1cmの厚さで乳白色の自然釉化しており、楓・松文の茶碗が熔着している。

色見穴の蓋(第93図・図版95) 786~788は陶質で緩い円錐状を呈し、先端の半分がガラス質化している。平坦部には、棒を差し込むための深さ5cm前後の穴が穿たれている。



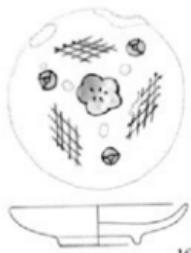
第15図 寺内焼窯跡表面採集遺物



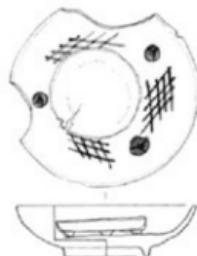
12



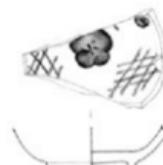
14



16



17



18



19



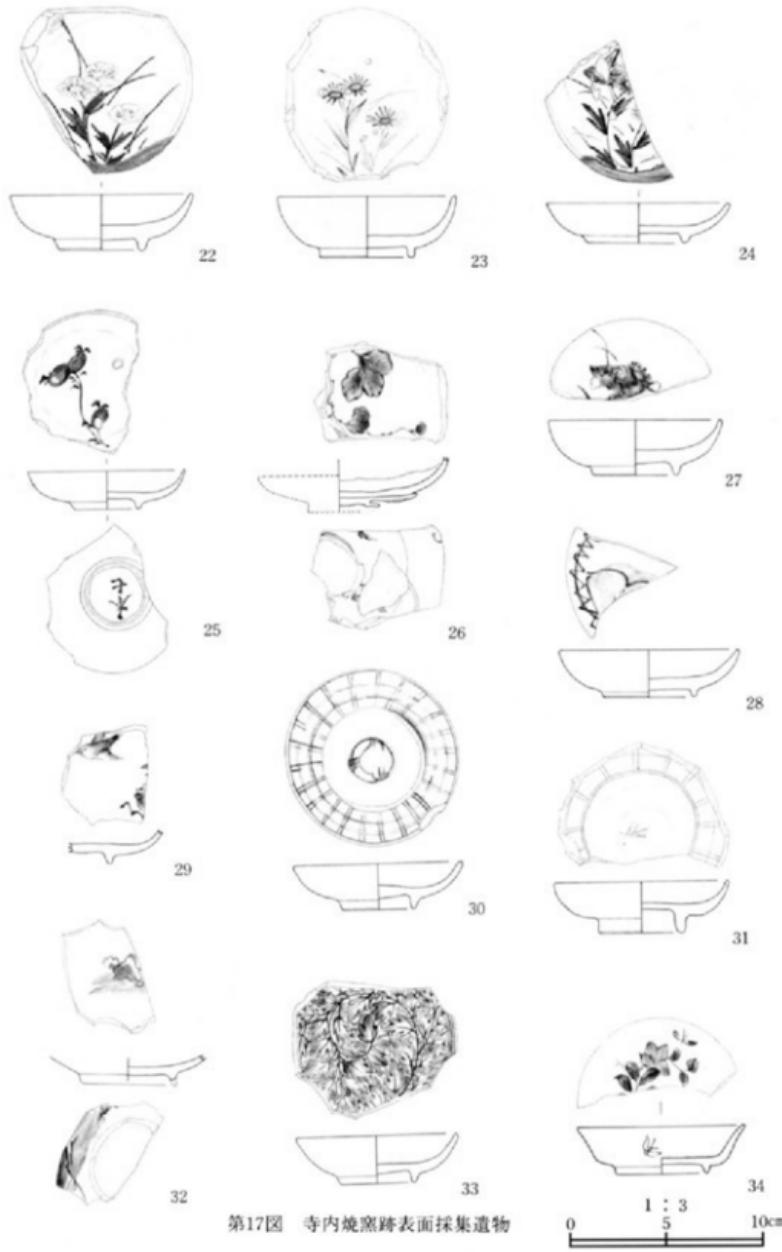
20



21

第16図 寺内焼窯跡表面採集遺物

0 1 : 3
5 10cm



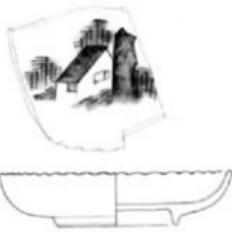
第17図 寺内焼窯跡表面採集遺物



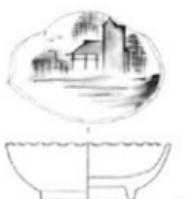
35



36



37



38



39



40



41



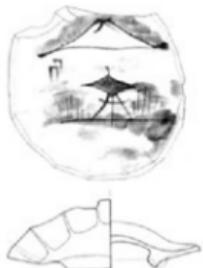
42



43



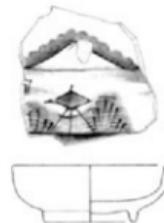
44



45

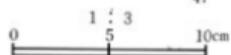


46



47

第18図 寺内焼窯跡表面採集遺物





48



49



50



51



52



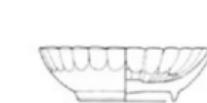
53



54



55



56



57



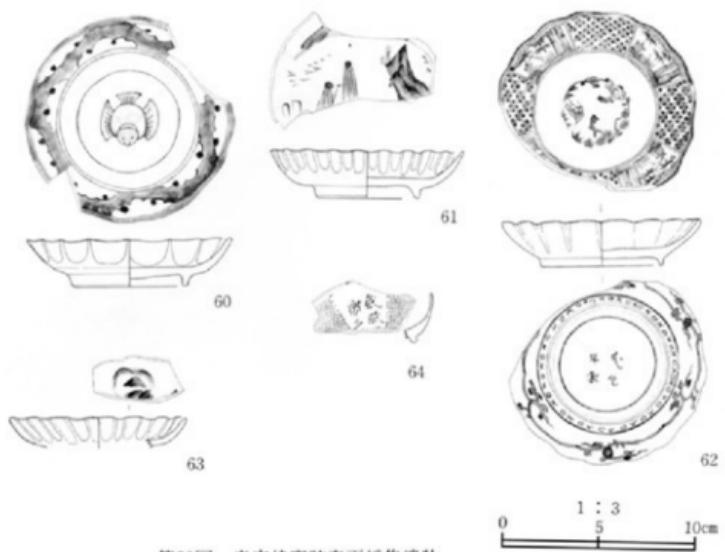
58



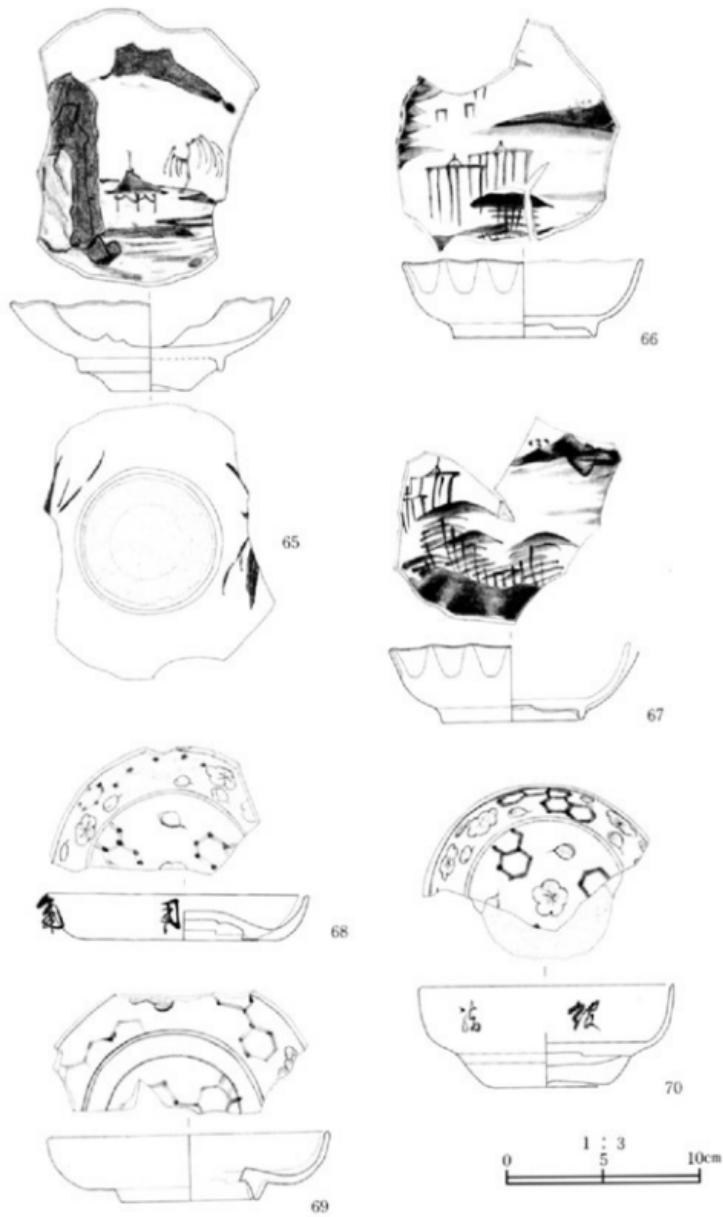
59

第19図 寺内焼窯跡表面採集遺物

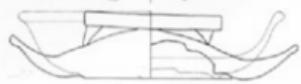




第20図 寺内焼窯跡表面採集遺物



第21図 寺内焼窯跡表面採集遺物



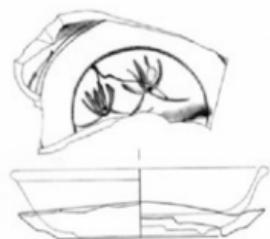
71



72



73

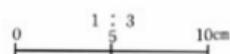


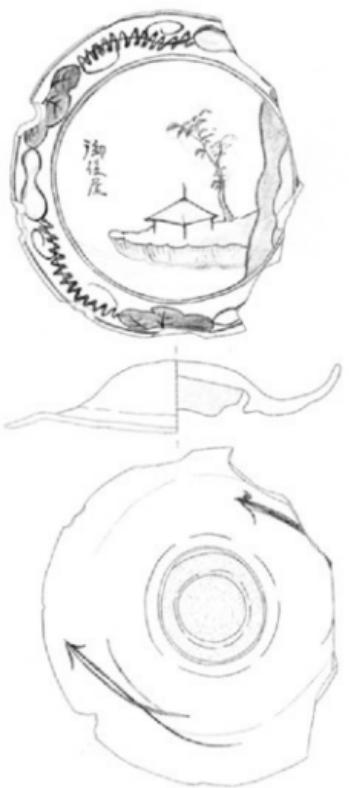
74



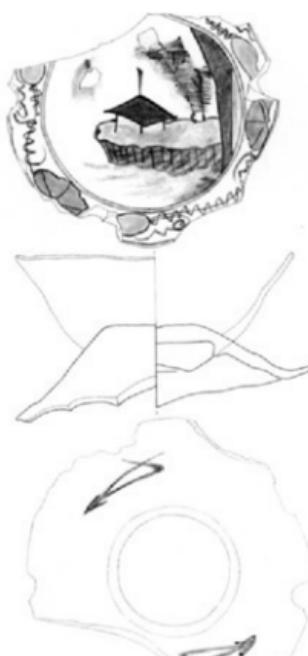
75

第22図 寺内焼跡表面採集遺物





76



77



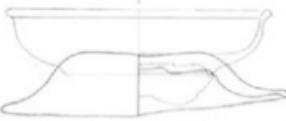
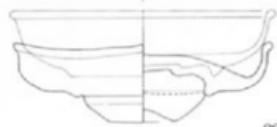
78



79

第23図 寺内焼跡表面採集遺物

0 1 : 3 5 10cm



80

81



82

83

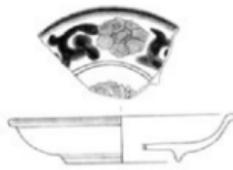


84

85

0 1 : 3
5 10cm

第24図 寺内焼窯跡表面採集遺物



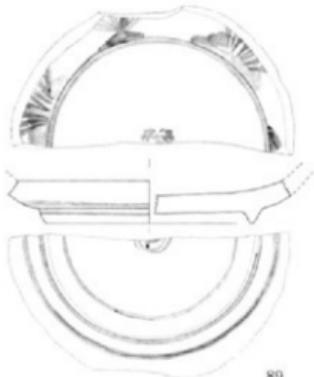
86



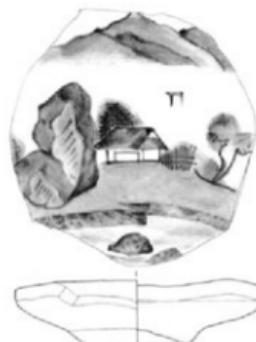
87



88



89



90



91



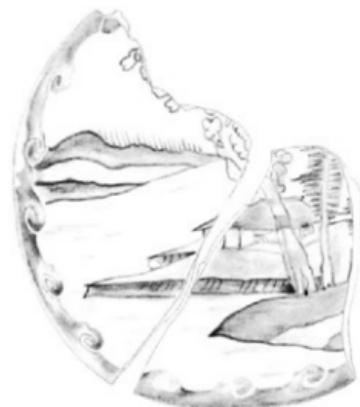
92

第25図 寺内焼窯跡表面採集遺物

0 1 : 3 5 10cm



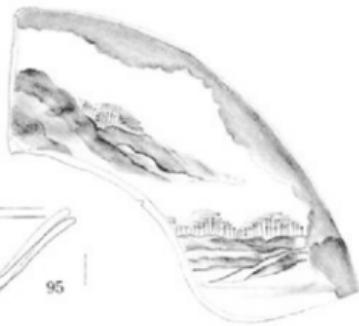
93



94



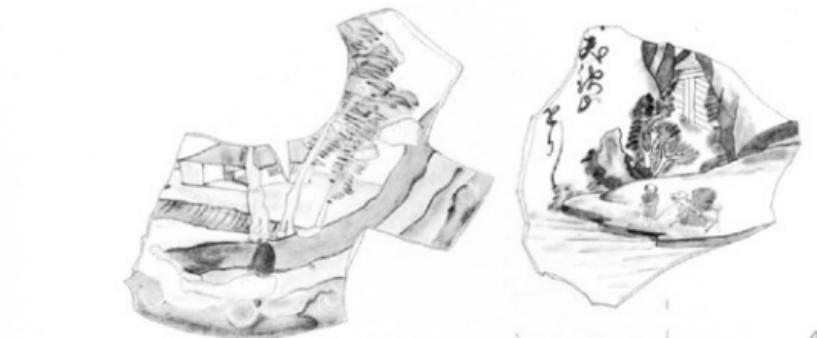
95



96

第26図 寺内焼窯跡表面採集遺物

0 1 : 3
5 10cm



97



98



99



100



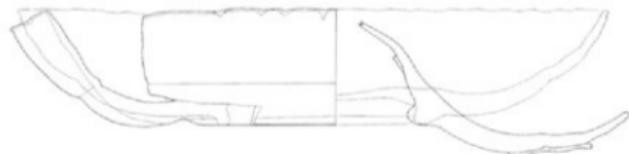
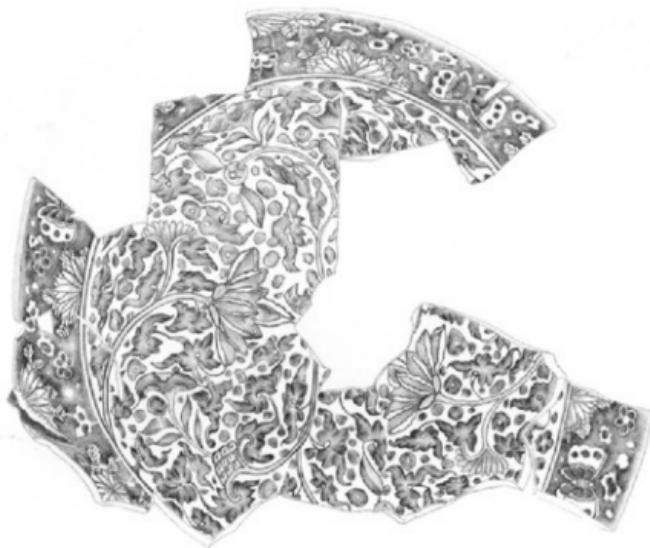
101



102

第27図 寺内焼窯跡表面採集遺物

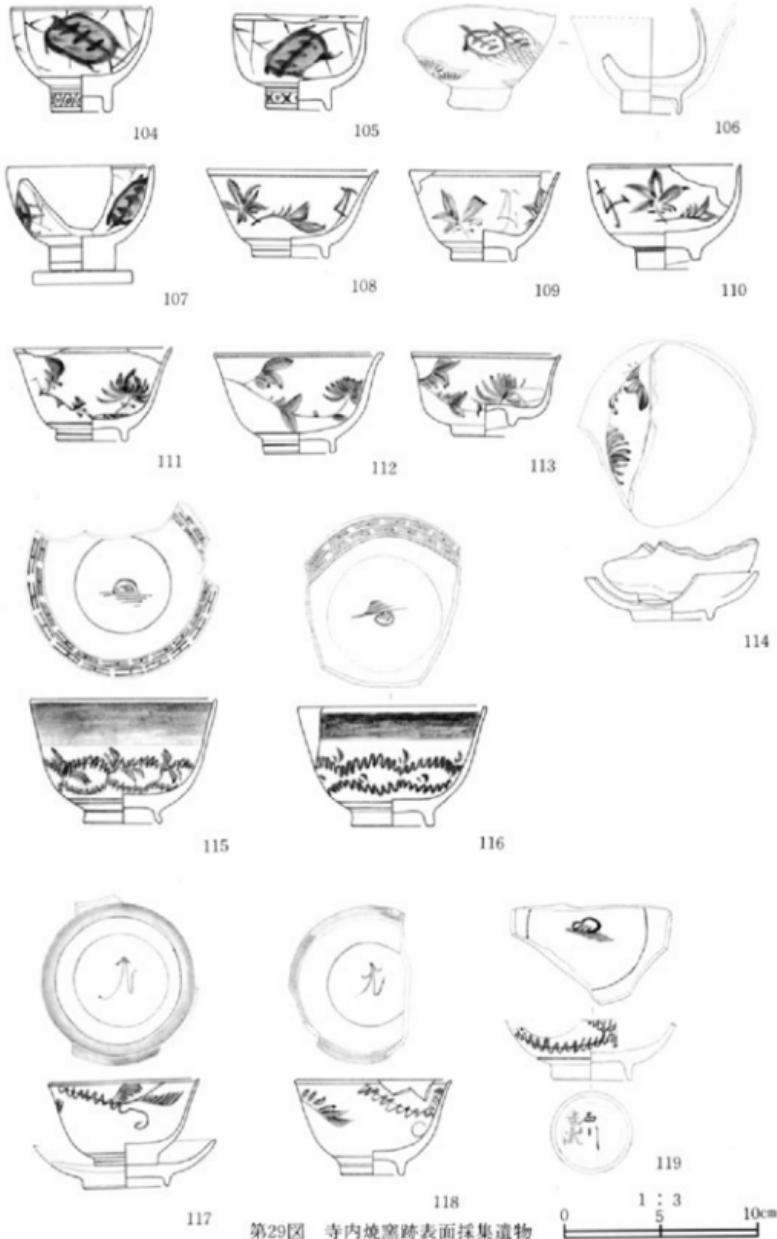
0 1 : 3 5 10cm

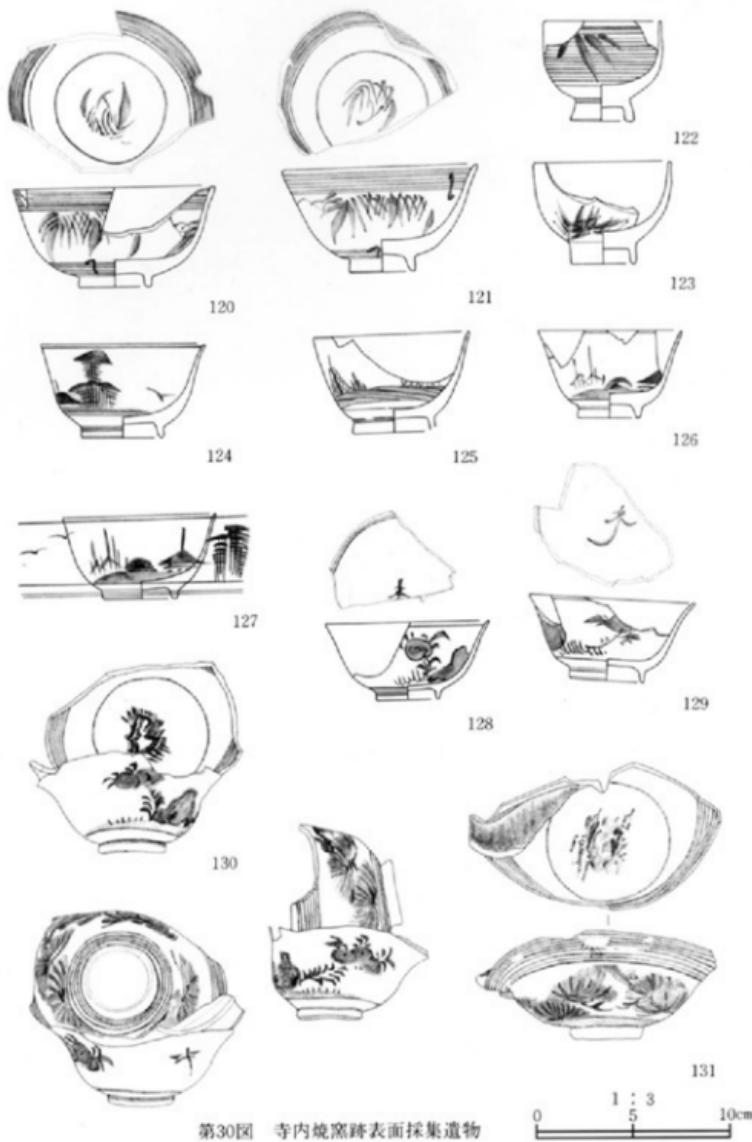


103

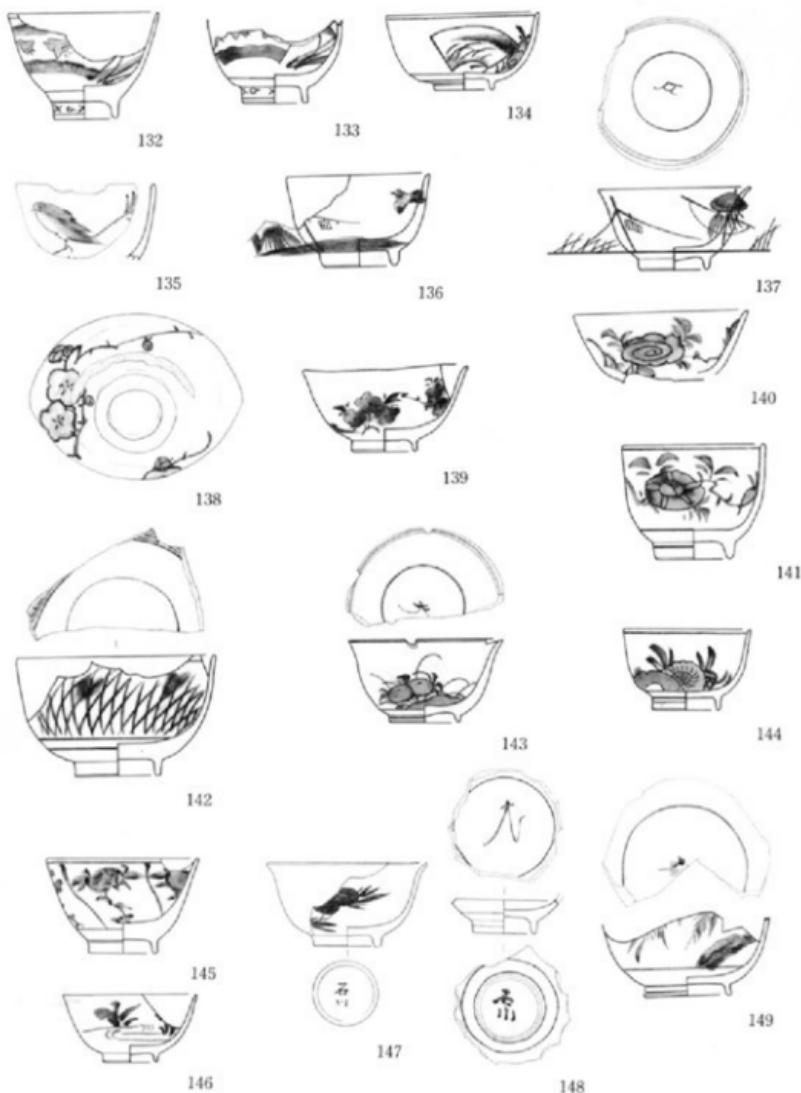
0 1 : 3
5 10cm

第28図 寺内焼窯跡表面採集遺物



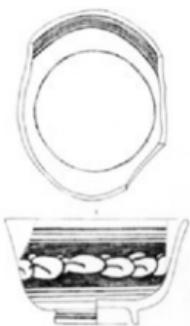


第30図 寺内焼窯跡表面採集遺物



第31図 寺内焼窯跡表面採集遺物

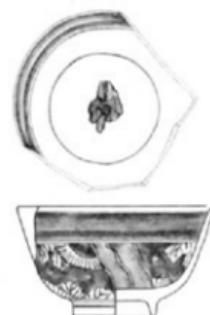
0 1 : 3
5 10cm



150



151



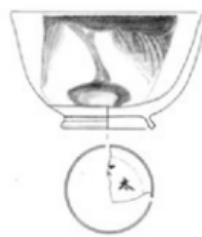
152



153



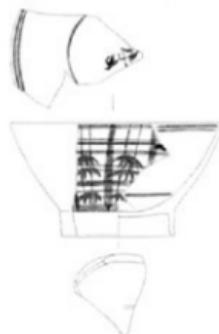
154



155



157



158



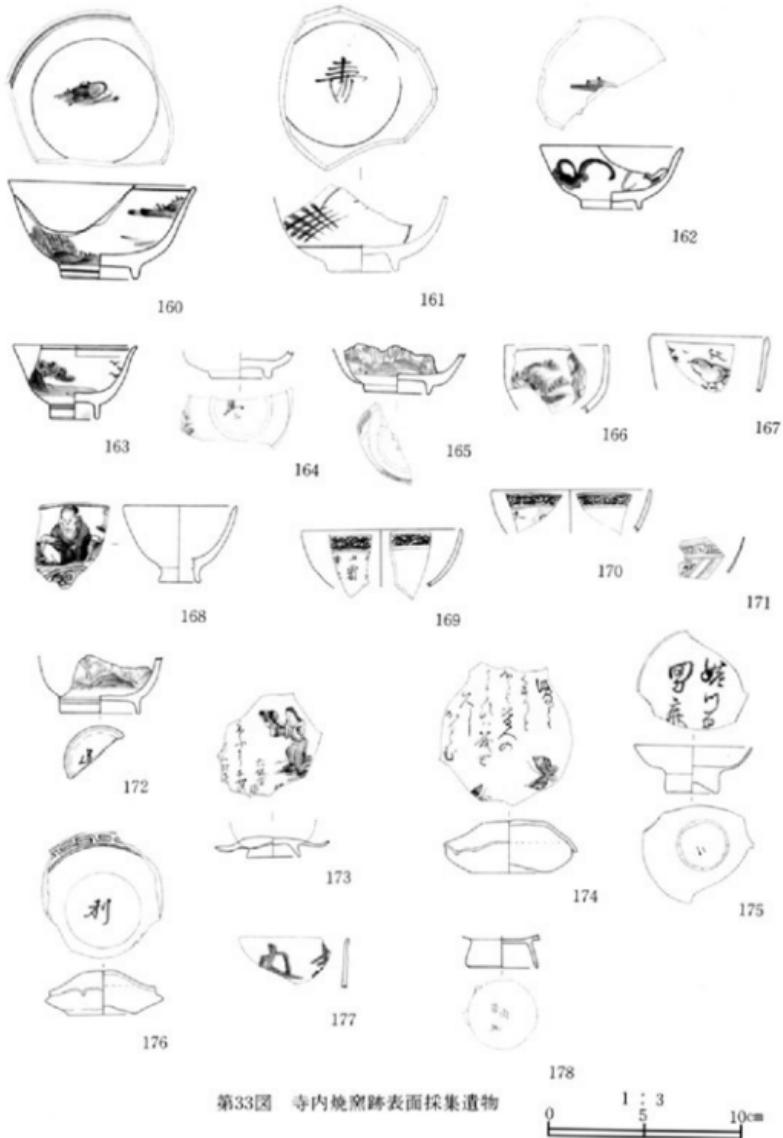
156



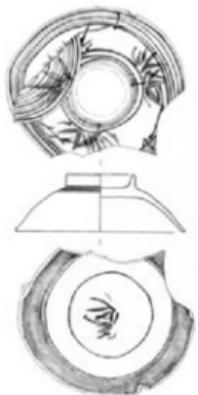
159

0 1 : 3 10cm

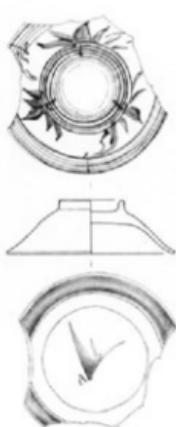
第32図 寺内焼窯跡表面採集遺物



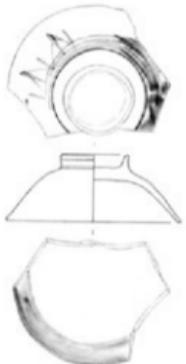
第33図 寺内焼窯跡表面採集遺物



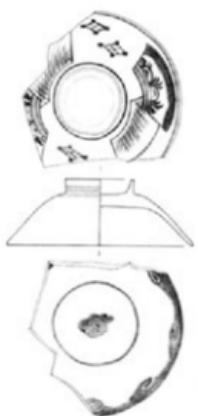
179



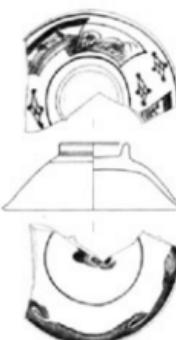
180



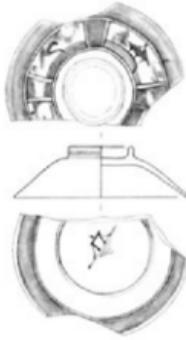
181



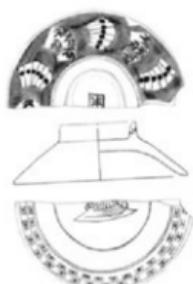
182



183



184



185



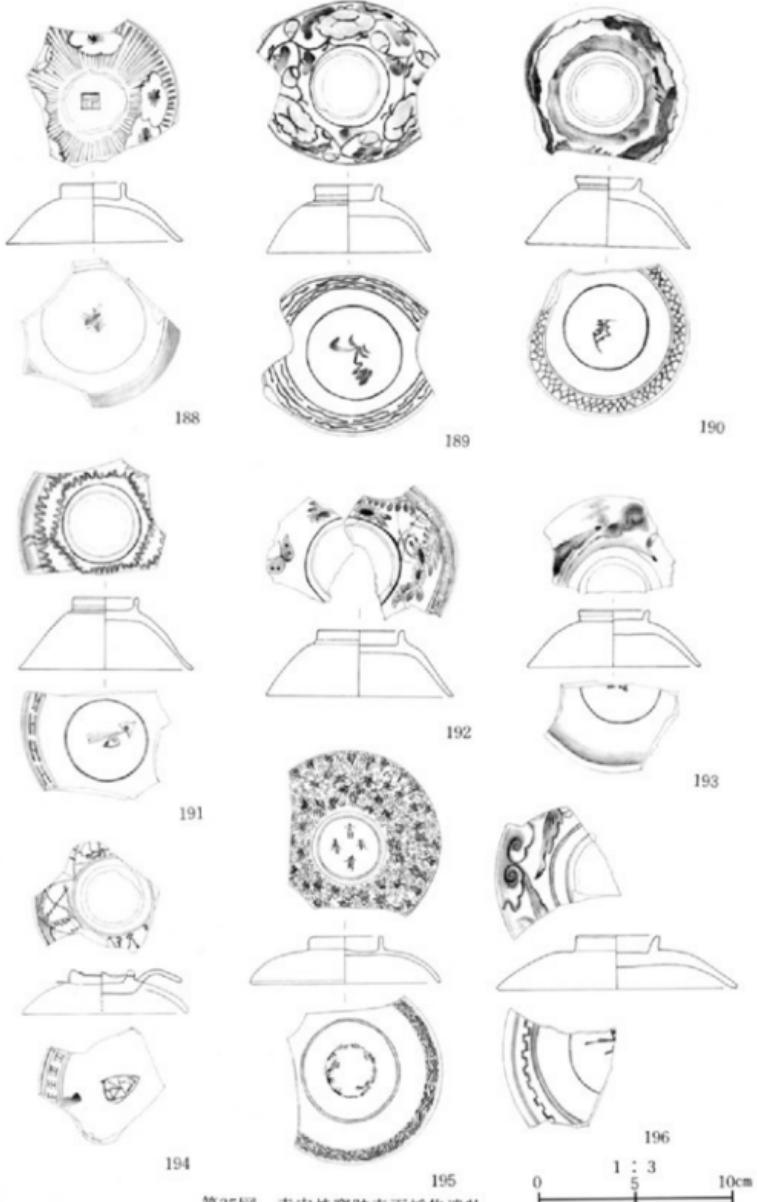
186



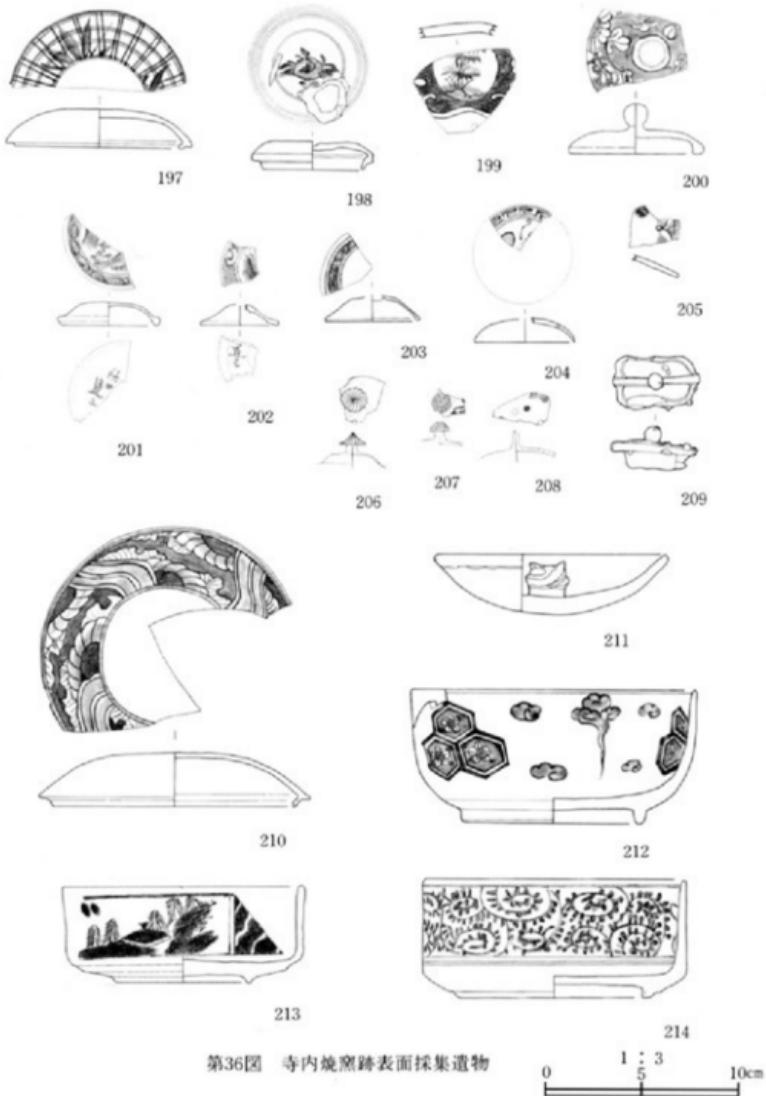
187

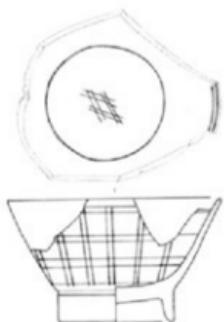
0 1 : 3 5 10cm

第34図 寺内焼窯跡表面採集遺物

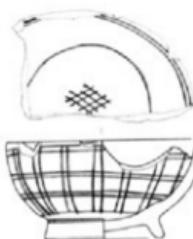


第35図 寺内焼窯跡表面採集遺物

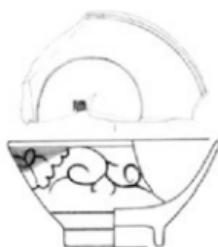




215



216



217



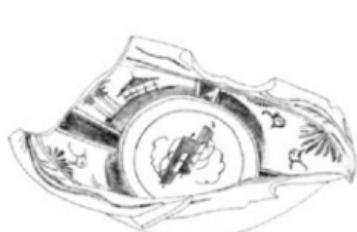
218



219



220



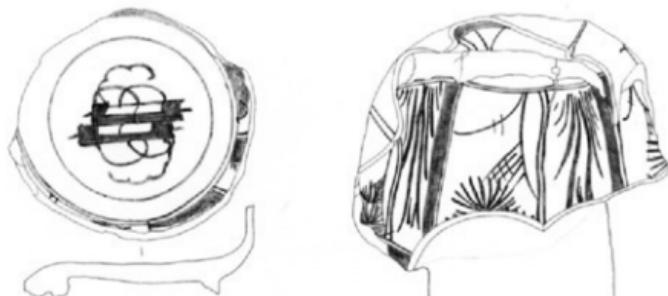
221



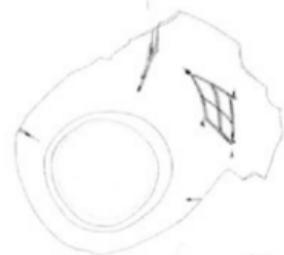
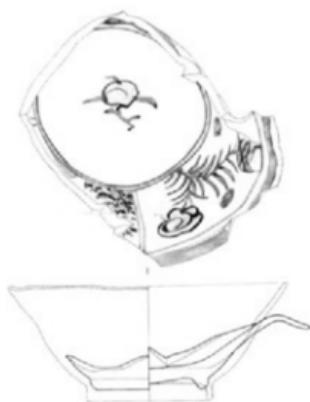
222

0 1 : 3
5 10cm

第37図 寺内焼窯跡表面採集遺物



223



225



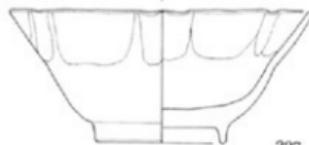
224

0 1 : 3 5 10cm

第38図 寺内焼窯跡表面採集遺物



226



227



228



229



230



231



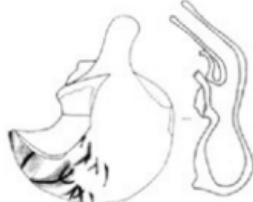
232



233



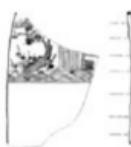
235



236



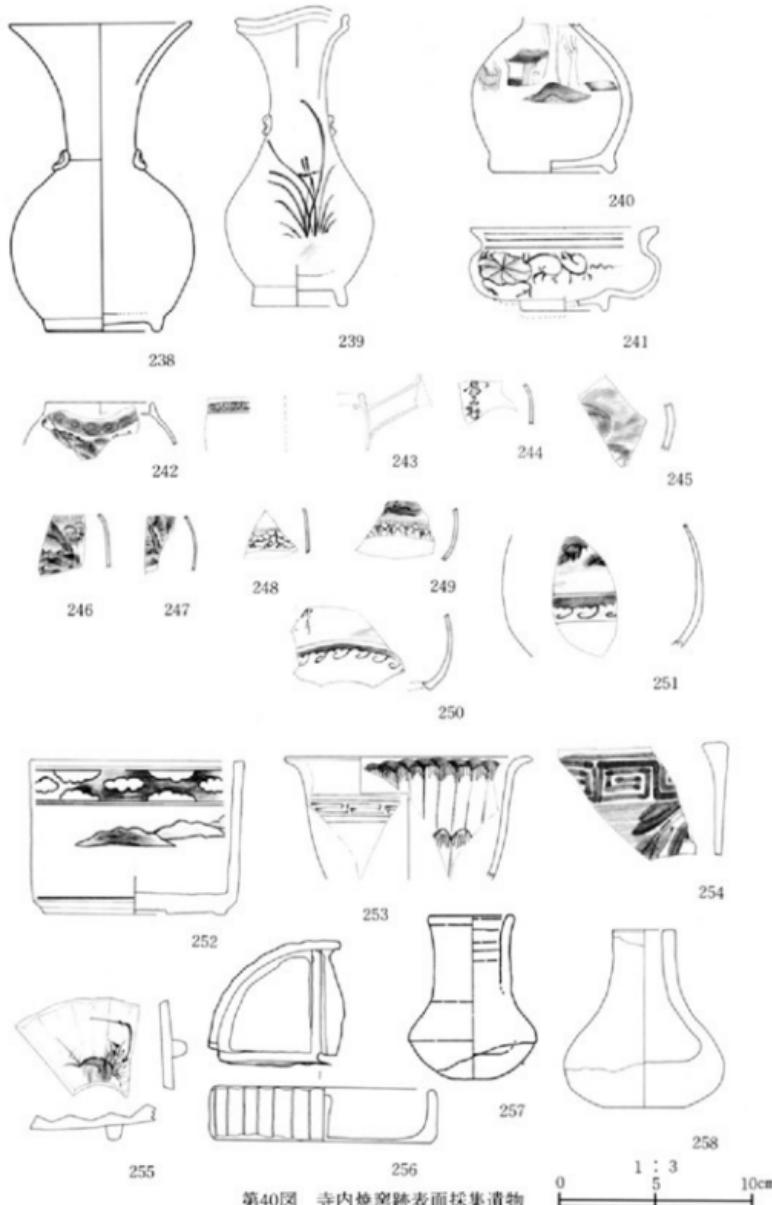
234

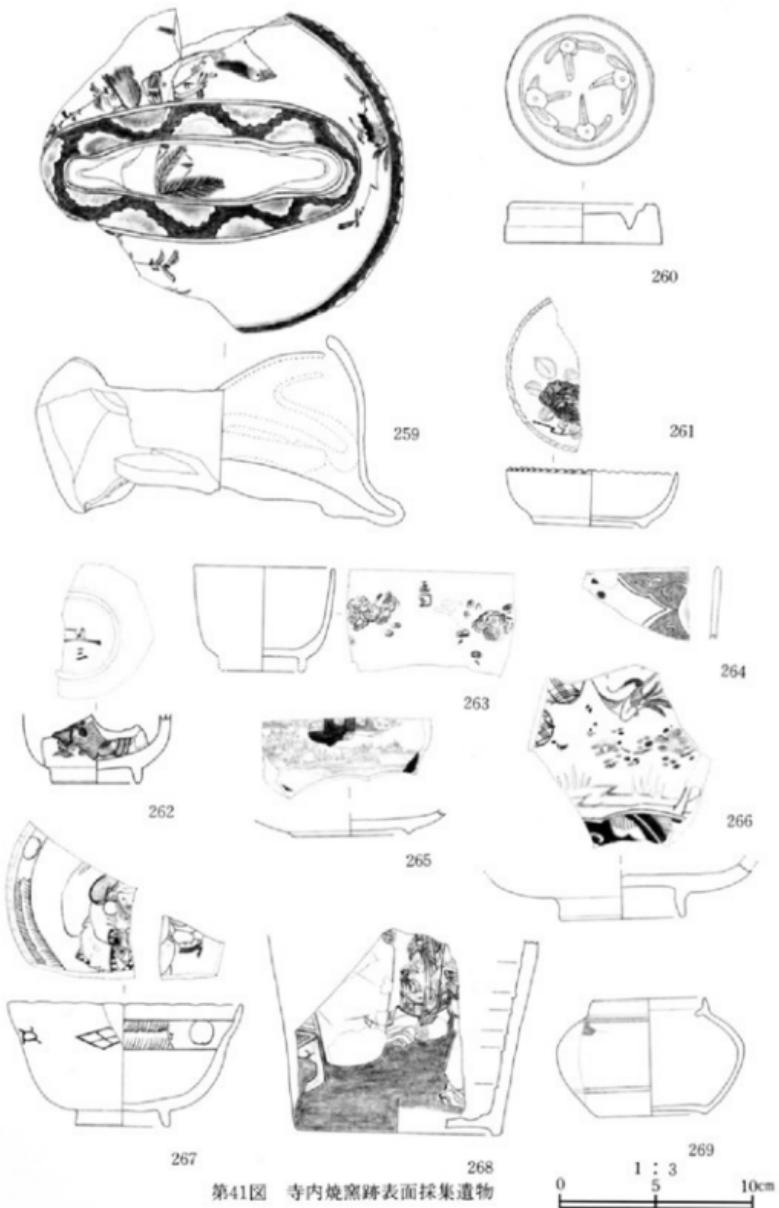


237

第39図 寺内焼窯跡表面採集遺物

0 1 : 3 5 10cm



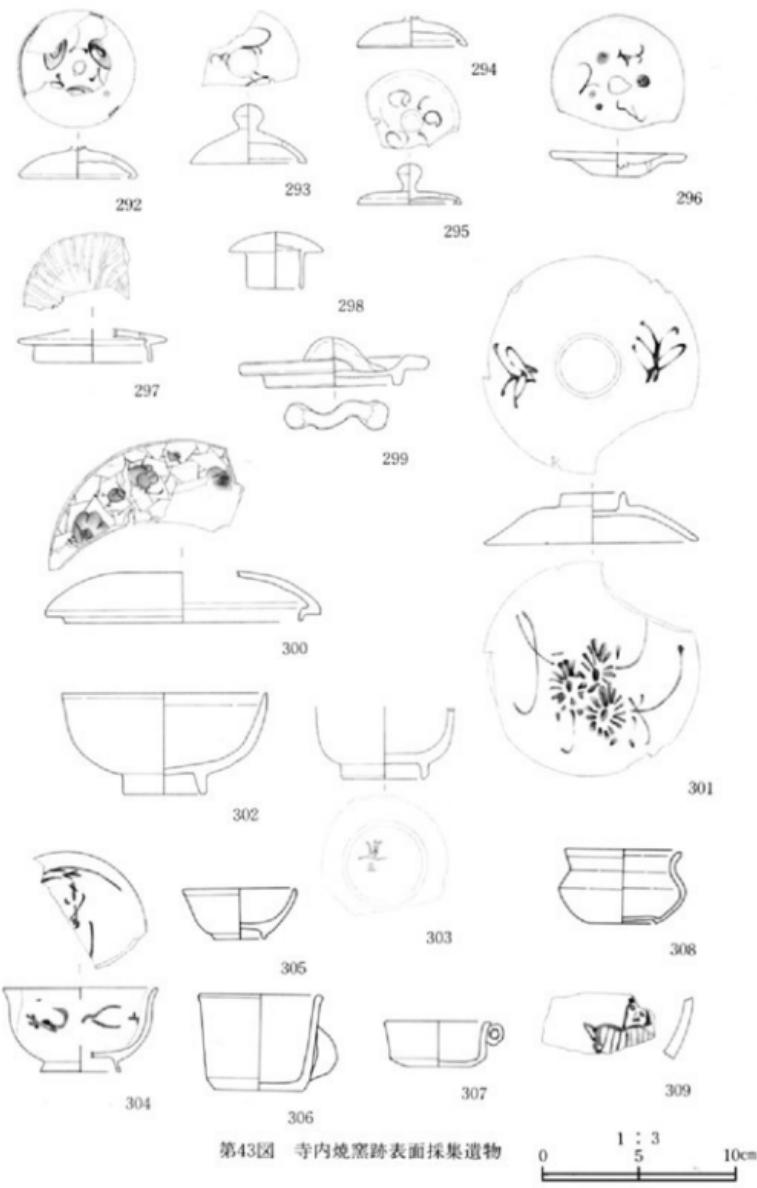


第41図 寺内焼窯跡表面採集遺物



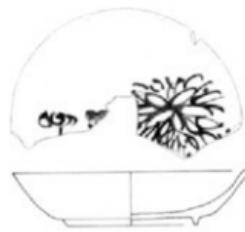
第42図 寺内焼窯跡表面採集遺物

0 1 : 3 5 10cm

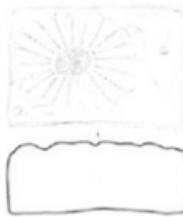




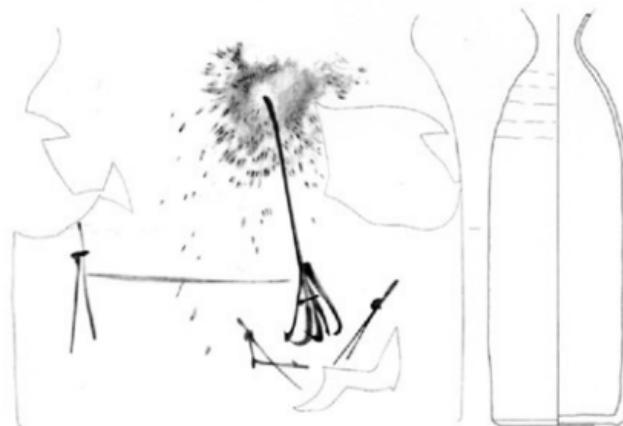
第44図 寺内焼窯跡表面採集遺物



325



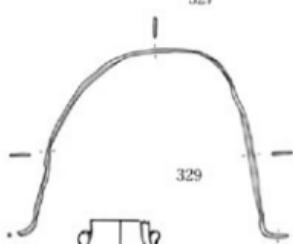
326



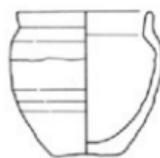
327



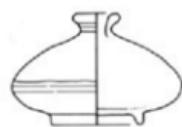
328



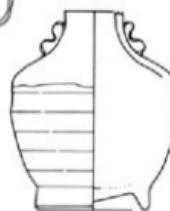
329



330

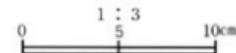


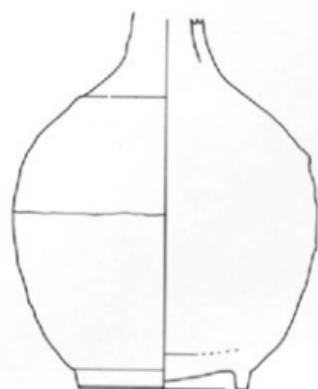
331



332

第45図 寺内焼窯跡表面採集遺物

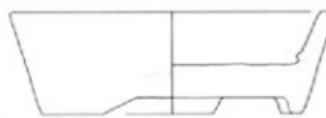




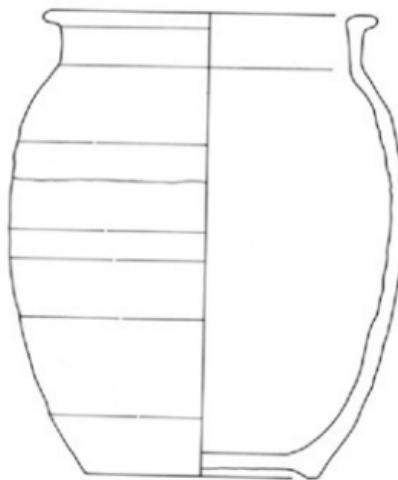
333



334



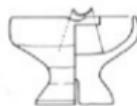
335



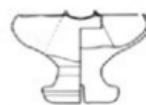
336



337



338

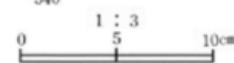


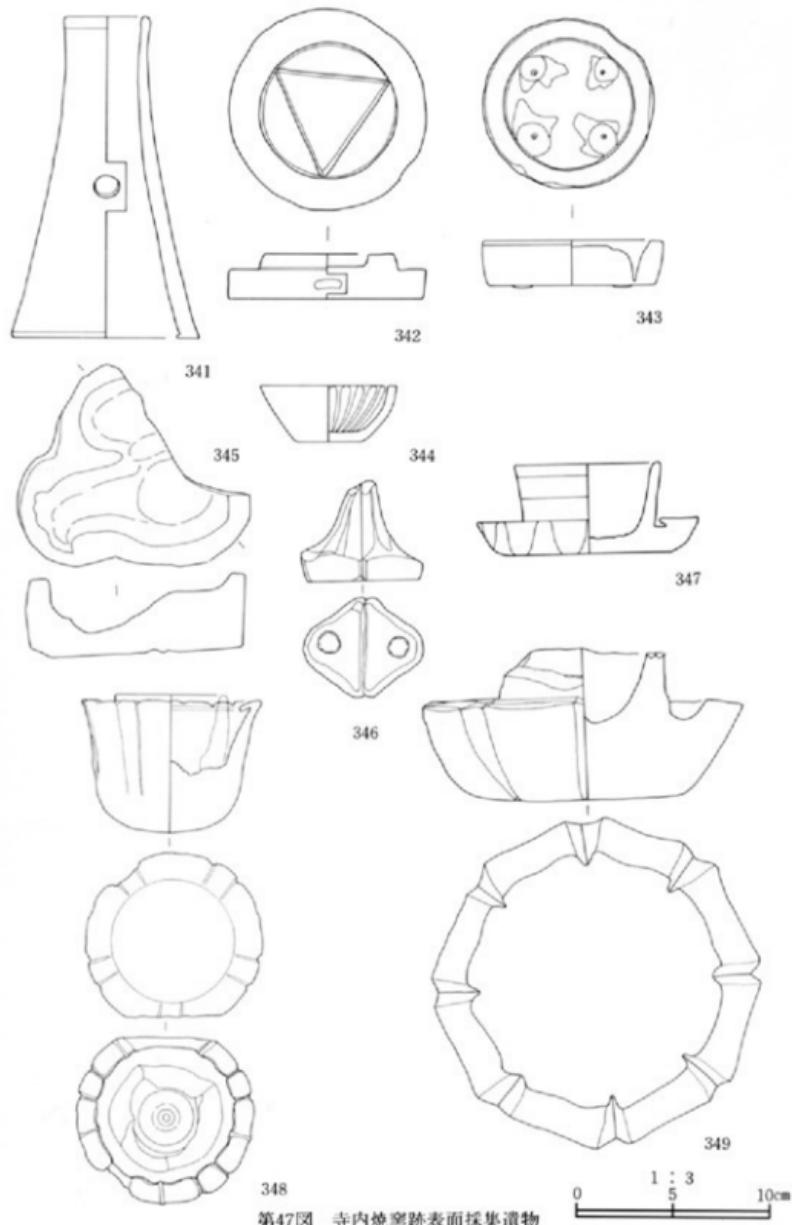
339



340

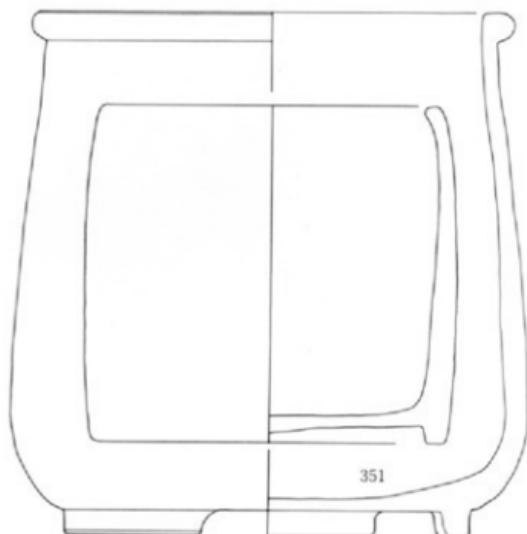
第46図 寺内焼跡表面採集遺物



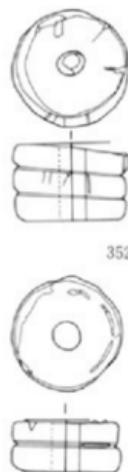


第47図 寺内焼窯跡表面採集遺物

0 1 : 3
5 10cm

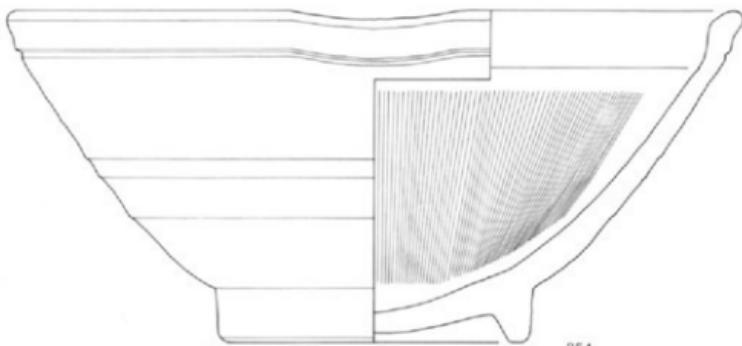


350

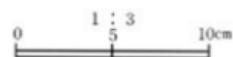


352

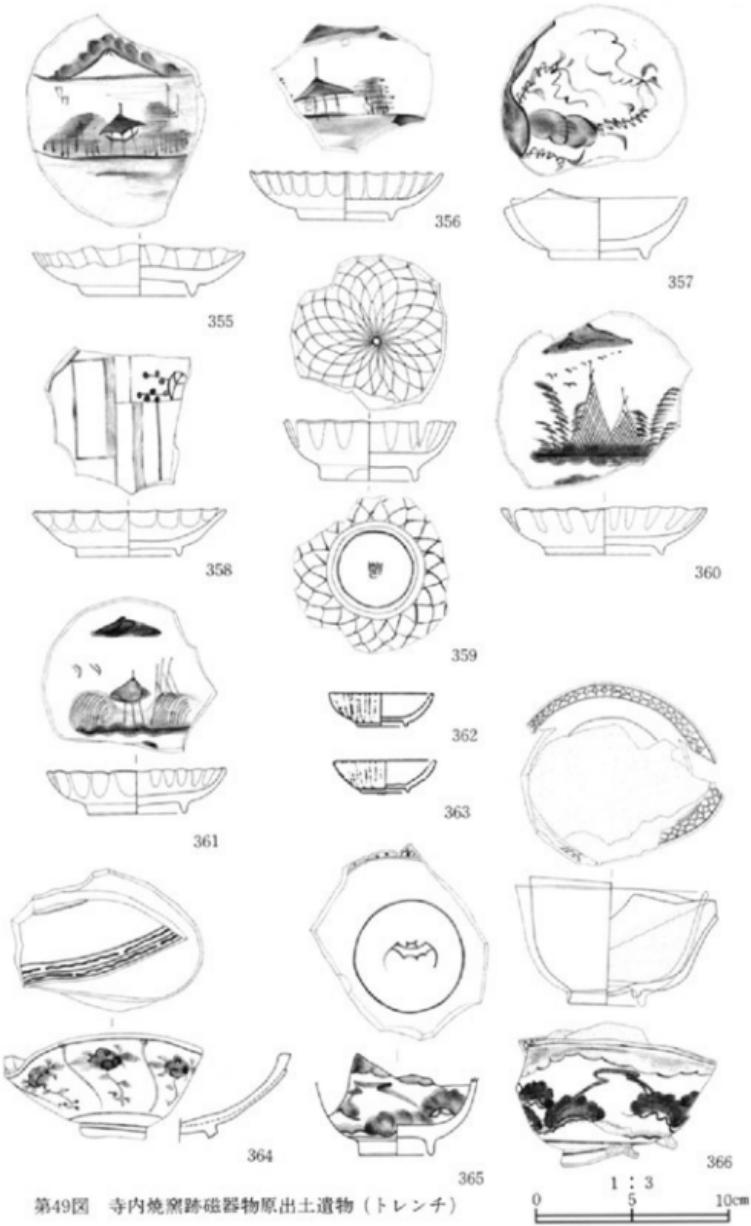
353



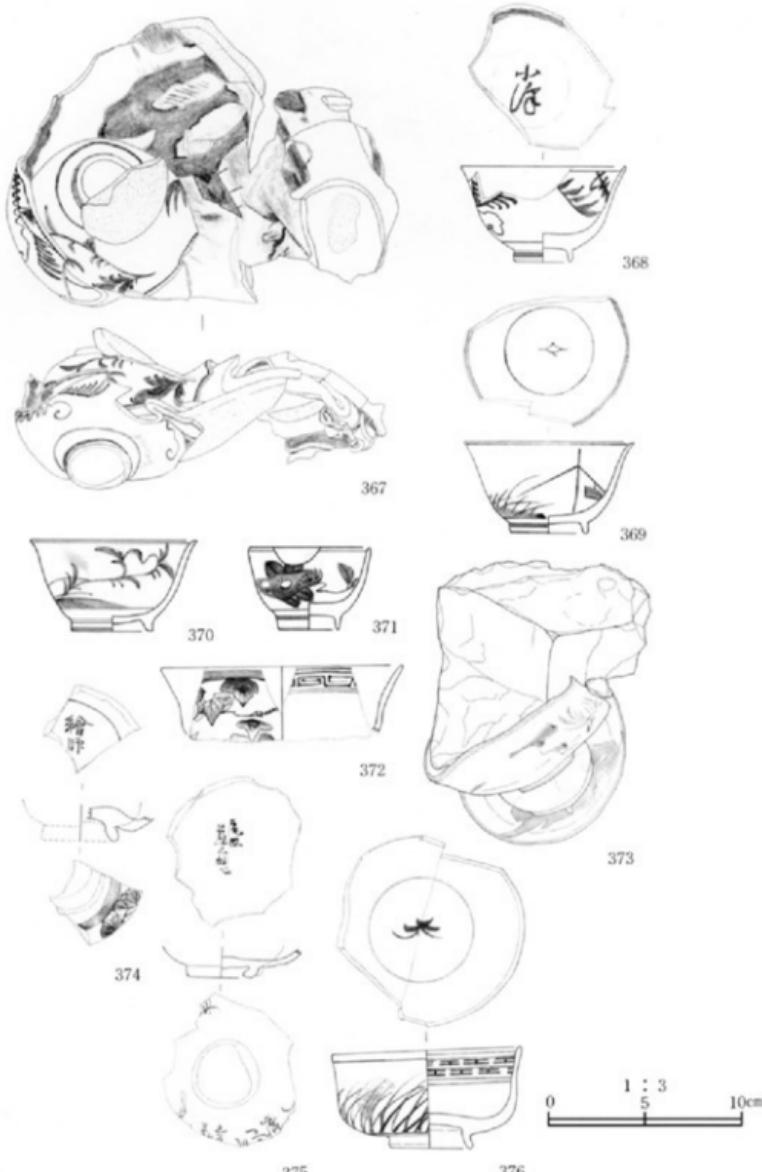
354



第48図 寺内焼窯跡表面採集遺物



第49図 寺内焼窯跡磁器物原出土遺物（トレンチ）



第50図 寺内焼窯跡磁器物原出土遺物（トレンチ）



第51図 寺内焼窯跡磁器物原出土遺物（トレンチ）



388



387



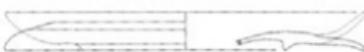
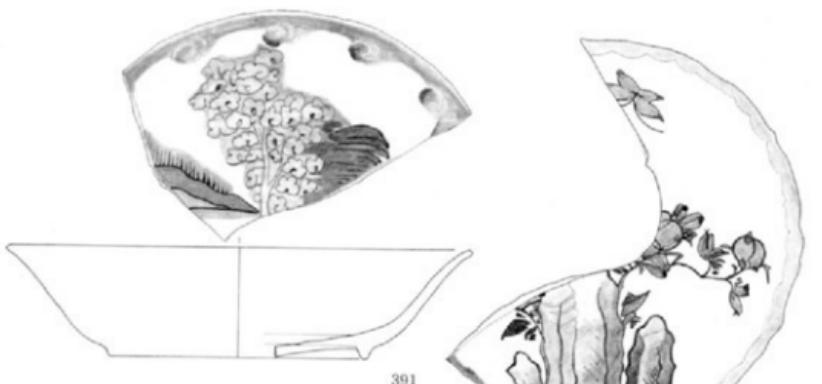
390



389

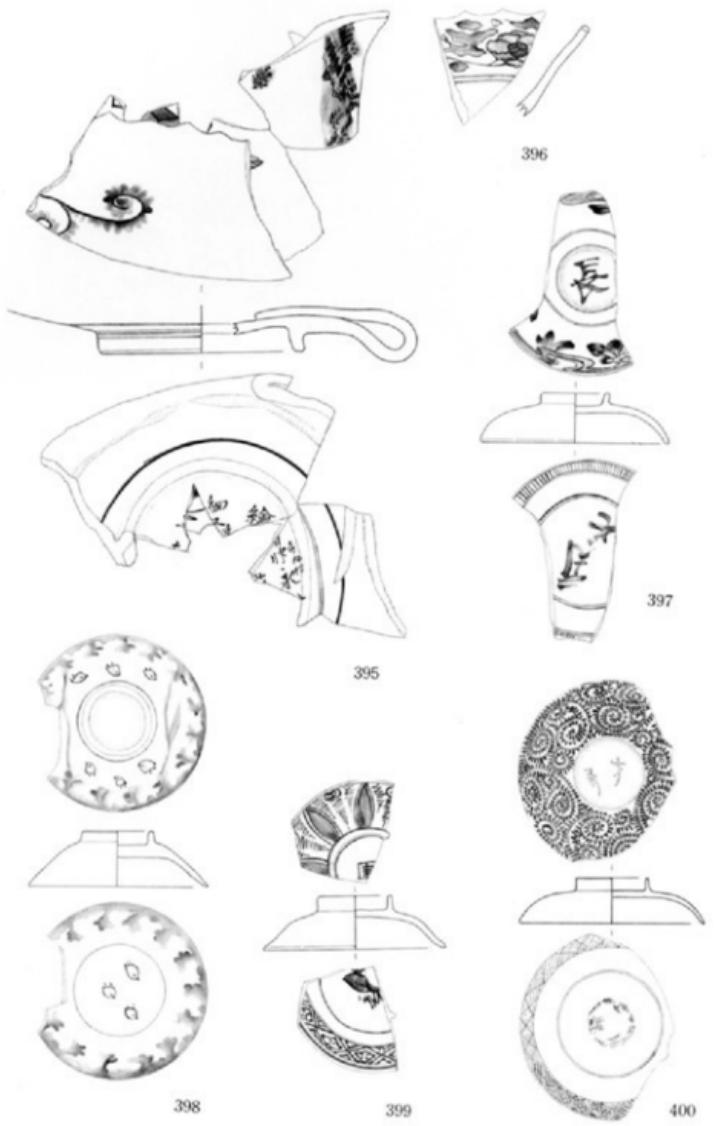
0 1 : 3
5 10cm

第52図 寺内焼窯跡磁器物原出土遺物（トレンチ）



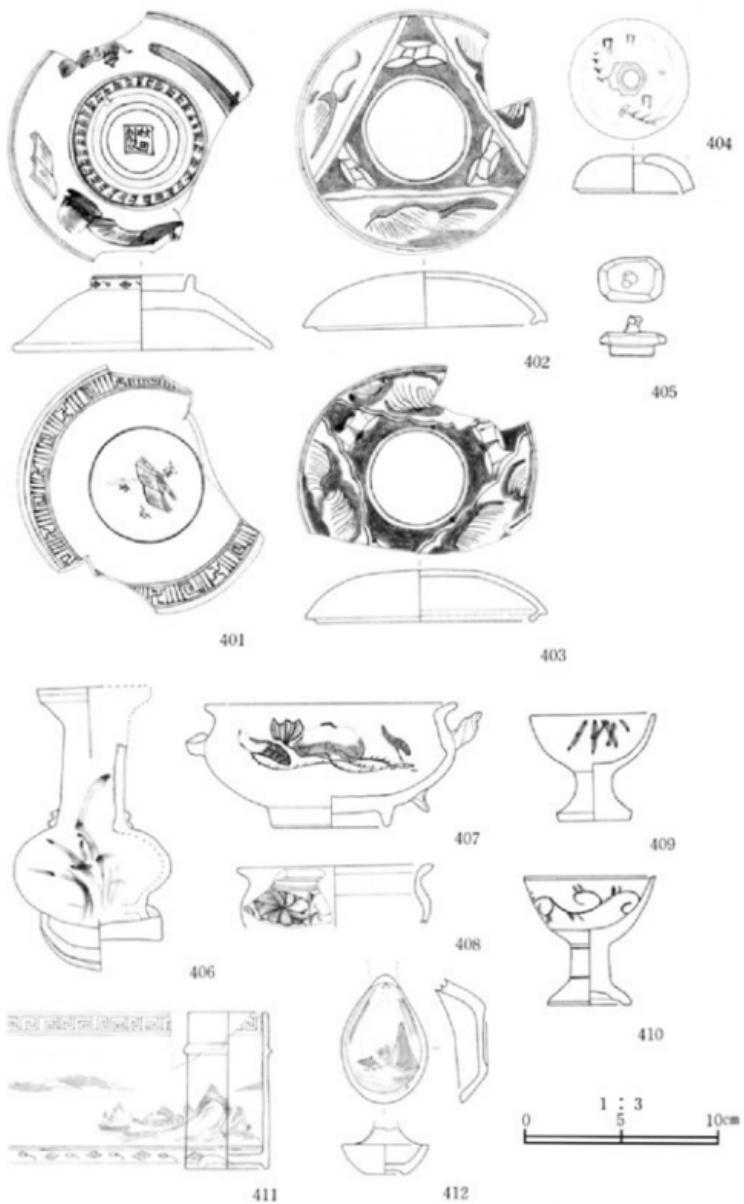
0 1 : 3 10cm

第53図 寺内焼窯跡磁器物原出土遺物（トレンチ）

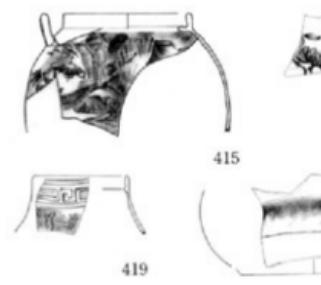
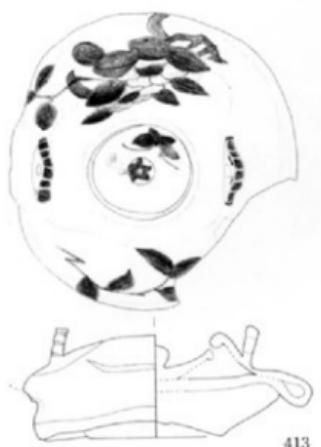


第54図 寺内焼窯跡磁器物原出土遺物（トレンチ）

0 1 : 3 5 10cm



第55図 寺内焼窯跡磁器物原出土遺物（トレンチ）



413

414

416

417

418

415

419



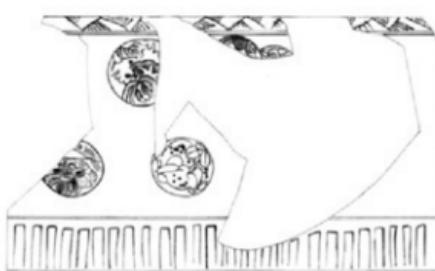
420



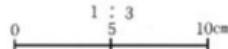
421



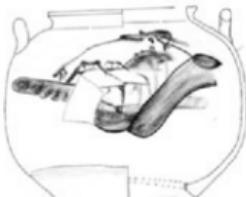
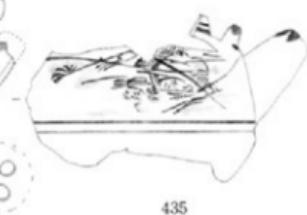
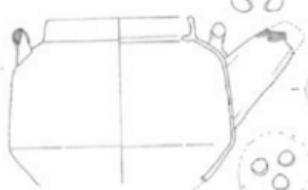
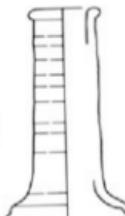
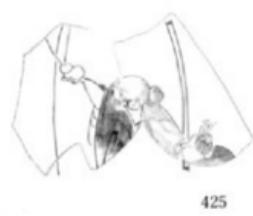
423



424

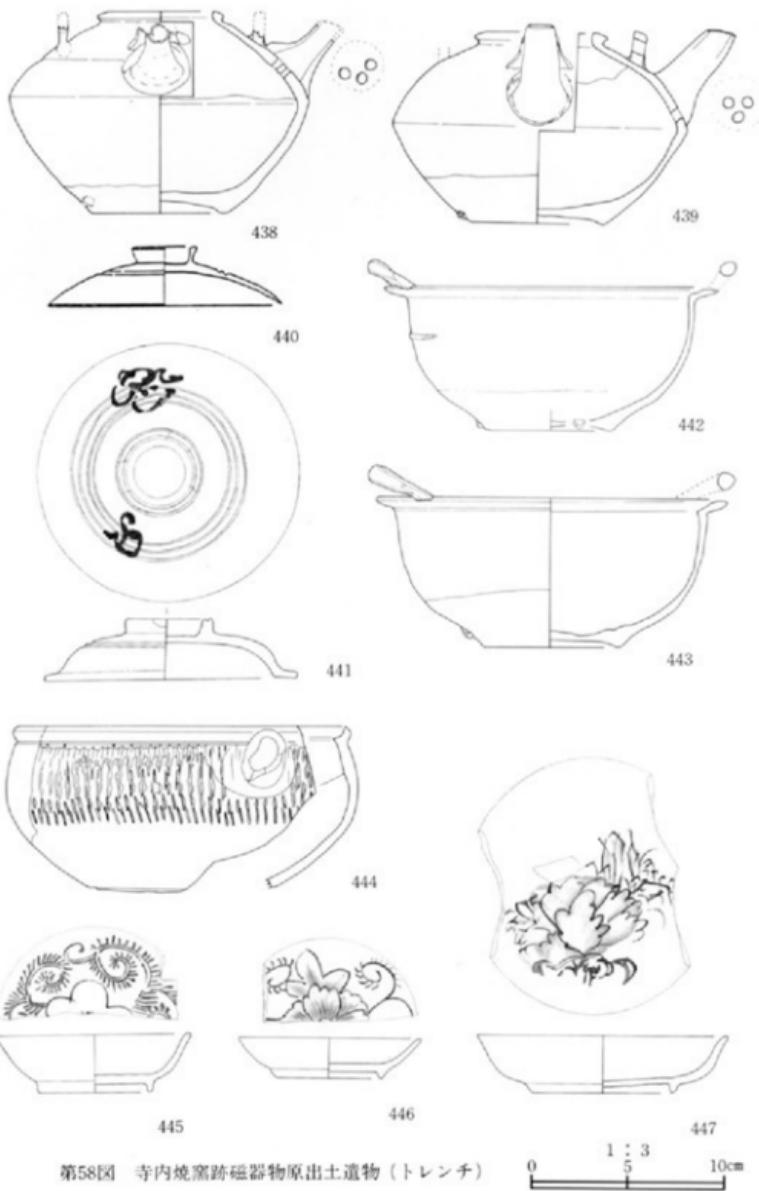


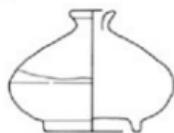
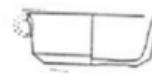
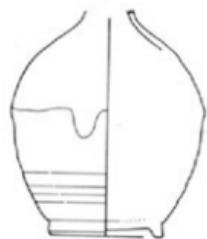
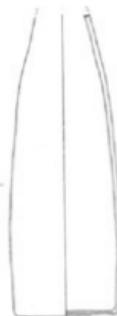
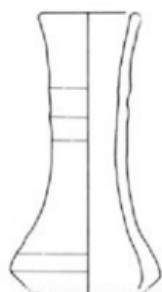
第56図 寺内焼窯跡磁器物原出土遺物（トレンチ）



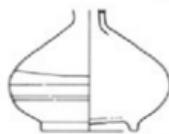
0 1 : 3 10cm

第57図 寺内焼窯跡磁器物原出土遺物（トレンチ）

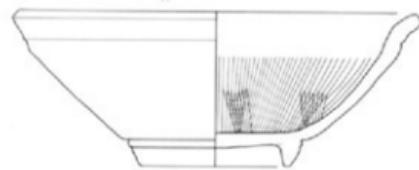




454



456

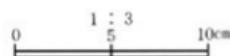


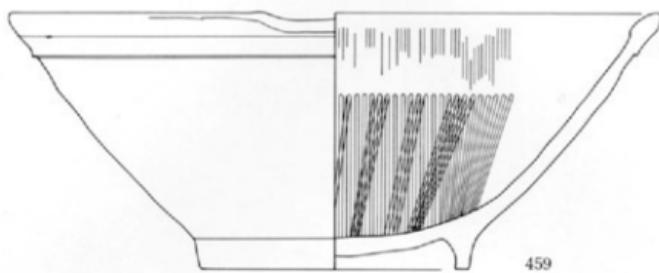
457



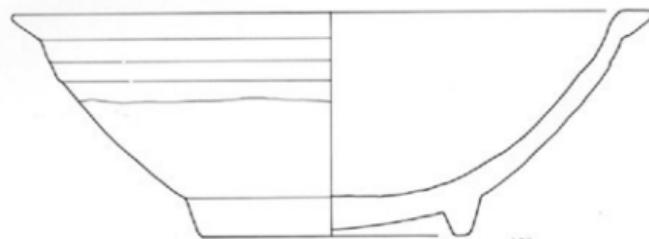
458

第59図 寺内焼窯跡磁器物原出土遺物（トレンチ）

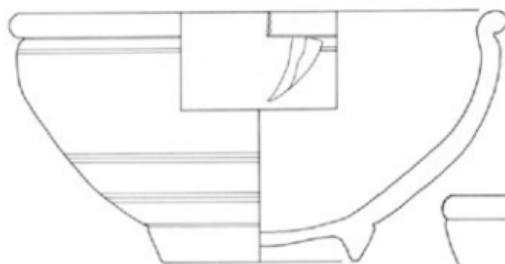




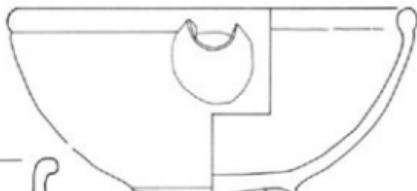
459



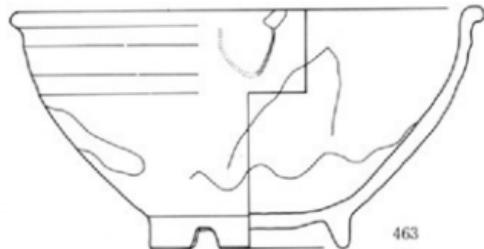
460



461



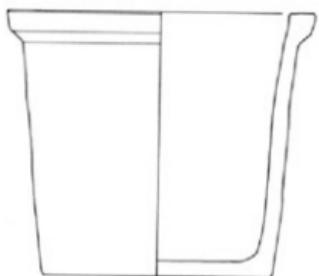
462



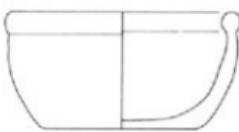
463

1 : 3
0 5 10cm

第60図 寺内焼窯跡磁器物原出土遺物（トレンチ）



464 1/6



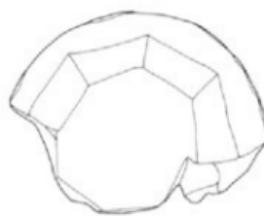
465



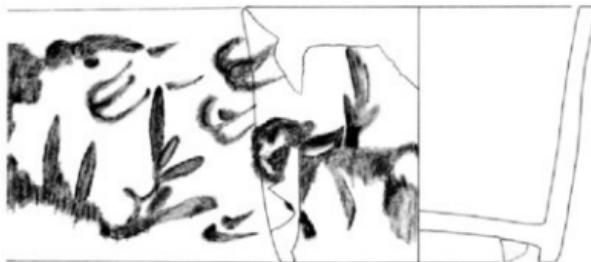
466



467



468



469

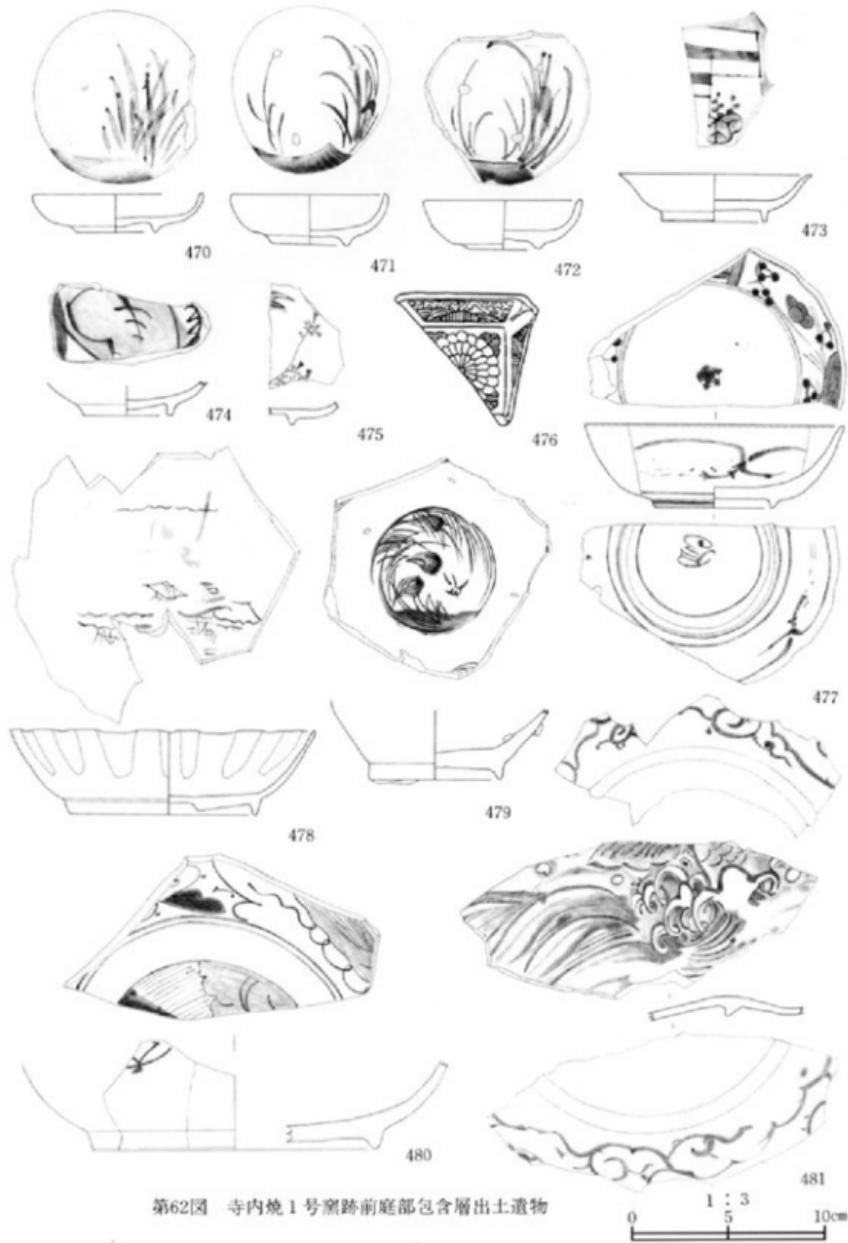
1 : 3

10cm

第61図 寺内焼窯跡磁器物原出土遺物（トレンチ）

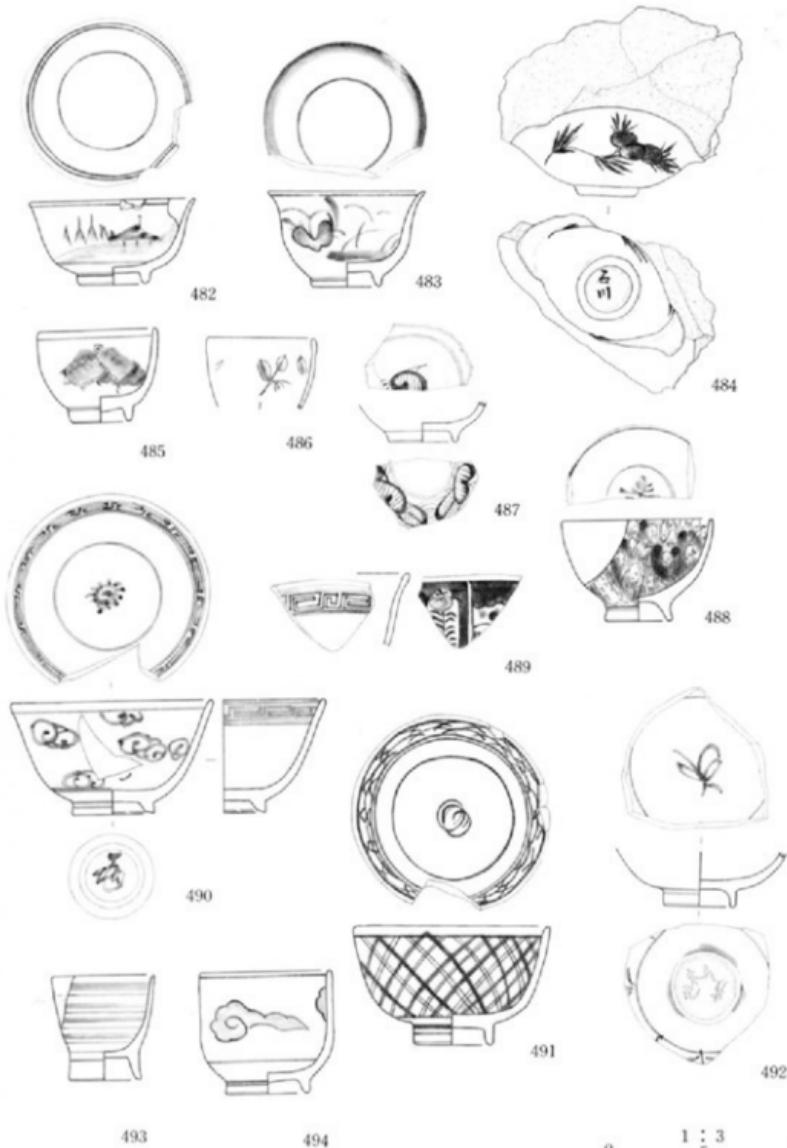
0

5

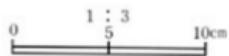


第62図 寺内焼1号窯跡前庭部包含層出土遺物

0 1 : 3 5 10cm

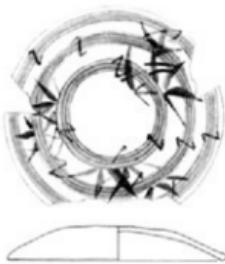


第63图 寺内烧1号窑跨前庭部包含层出土遗物

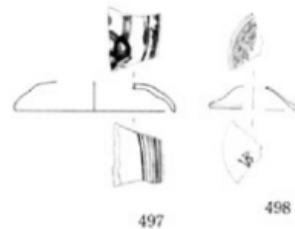




495

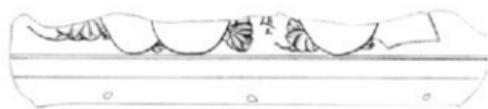


496

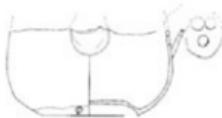


497

498



499



500



501



502



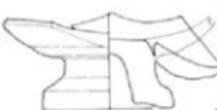
503



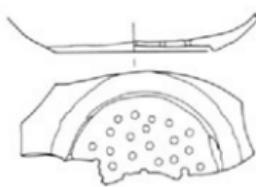
505



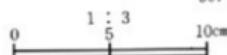
504



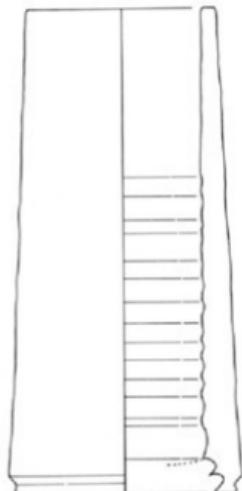
506



507



第64図 寺内焼1号窯跡前部包含層出土遺物



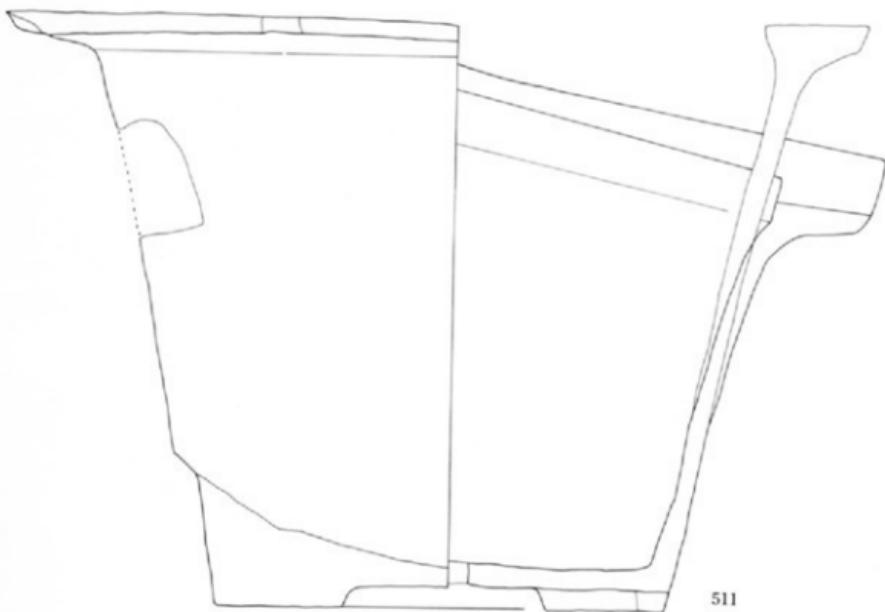
508



509



510

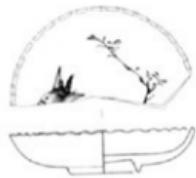


511

1 : 3

0 5 10cm

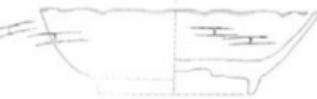
第65図 寺内焼1号窯跡前庭部包含層出土遺物



512



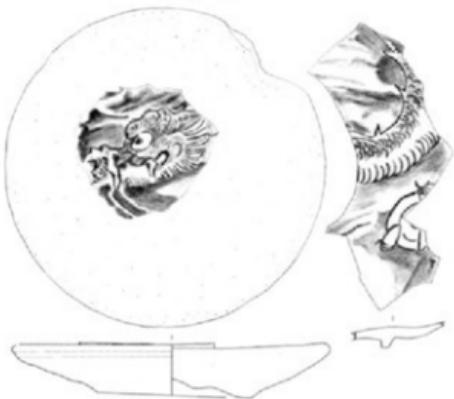
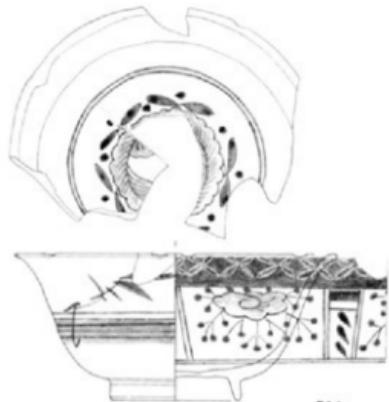
513



515



516

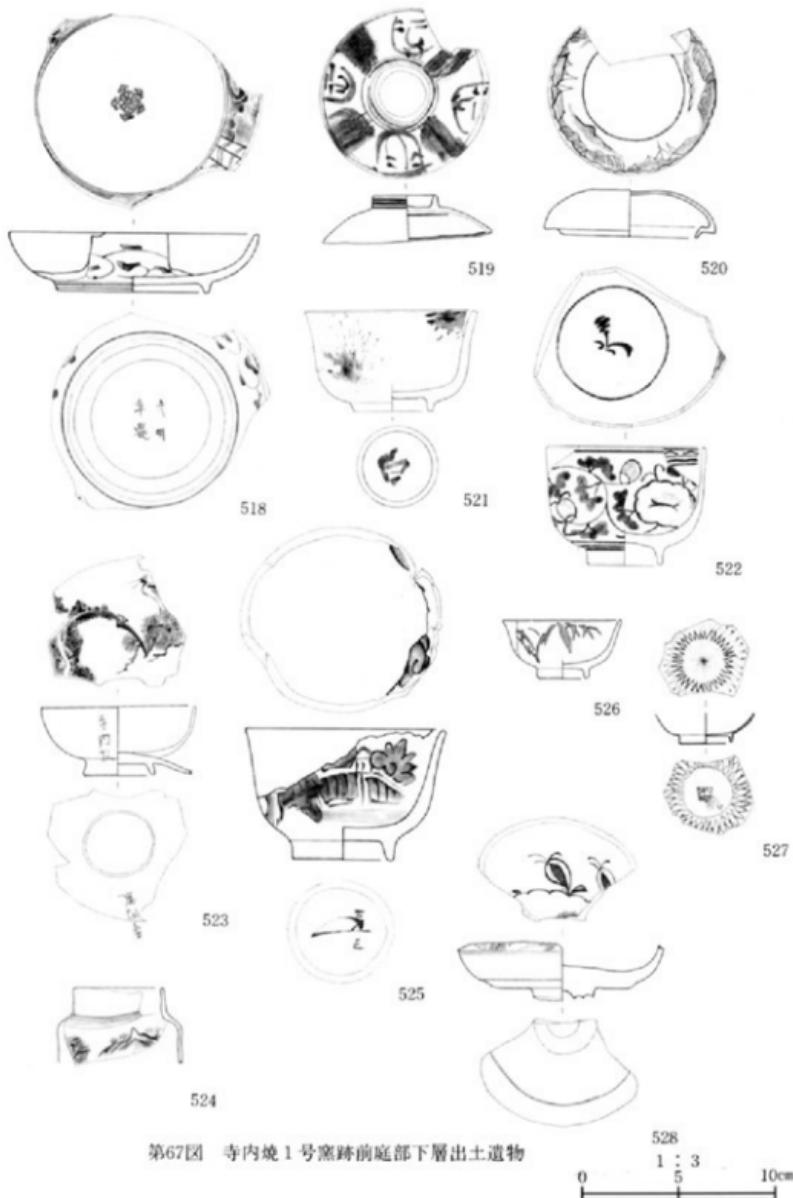


517

1 : 3

0 5 10cm

第66図 寺内焼 1号窯跡前庭部下層出土遺物



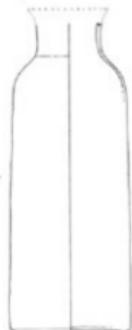
第67図 寺内焼 1号窯跡前庭部下層出土遺物



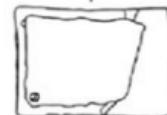
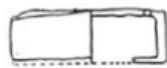
529



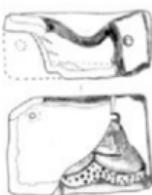
530



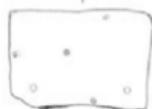
531



535



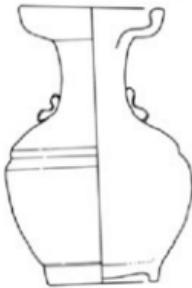
536



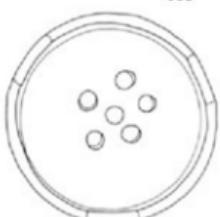
532



533



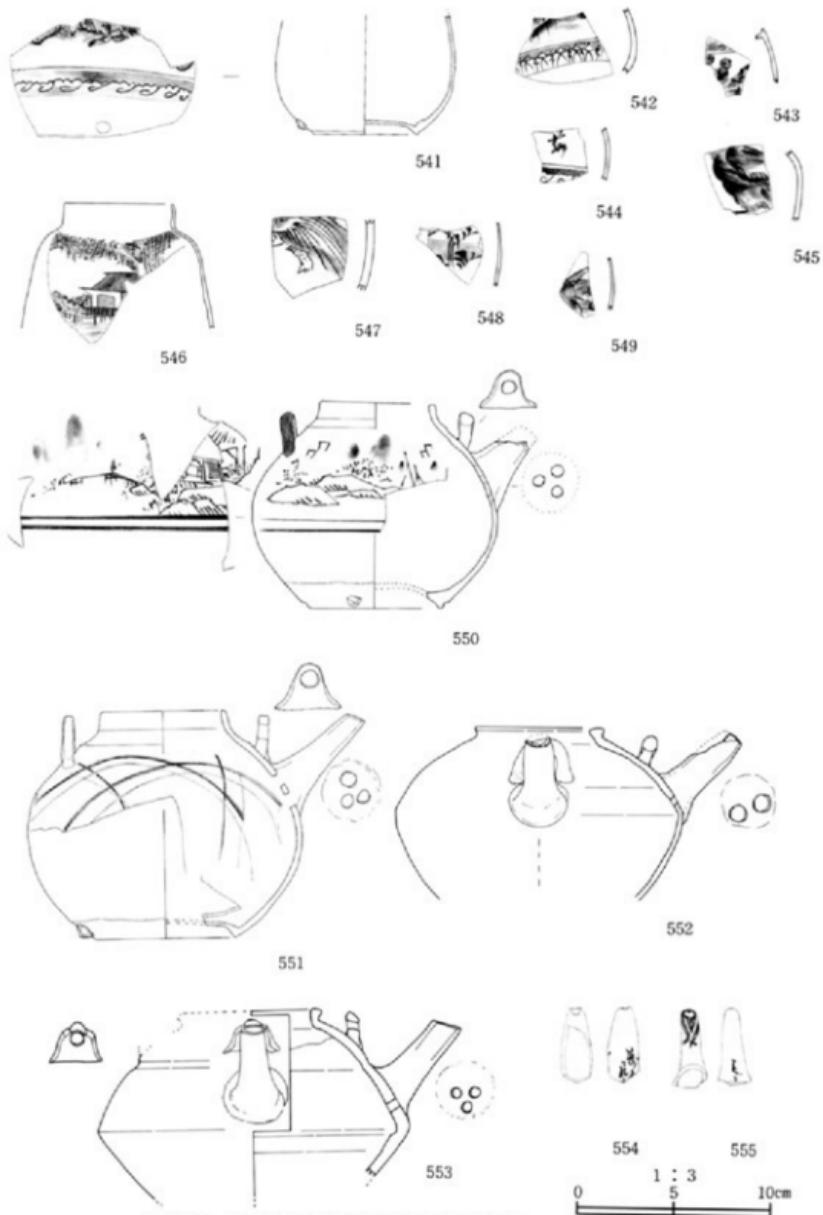
534



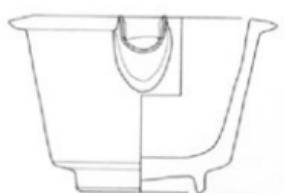
540

第68図 寺内焼1号窯跡前庭部下層出土遺物

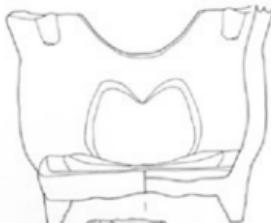
0 1 : 3
5 10cm



第69図 寺内焼1号窯跡前庭部下層出土遺物



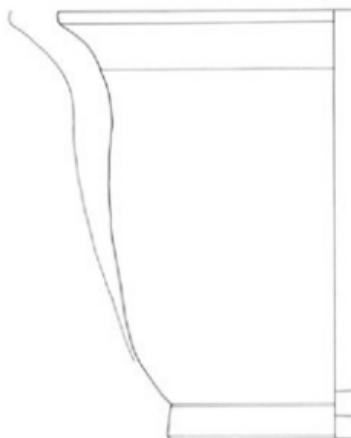
556



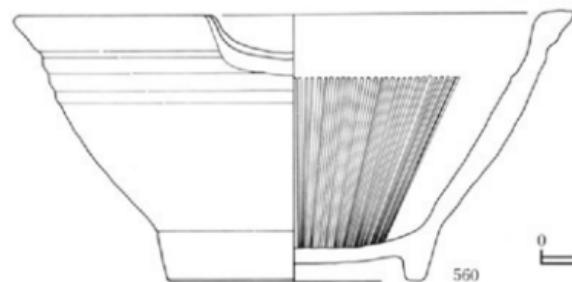
557



558



559



1 : 3
0 5 10cm

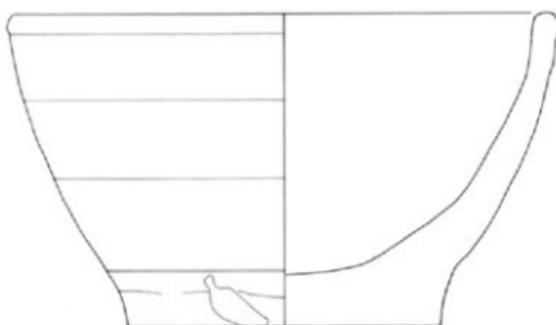
第70図 寺内焼 1号窯跡前庭部下層出土遺物



561

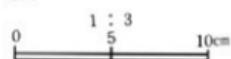


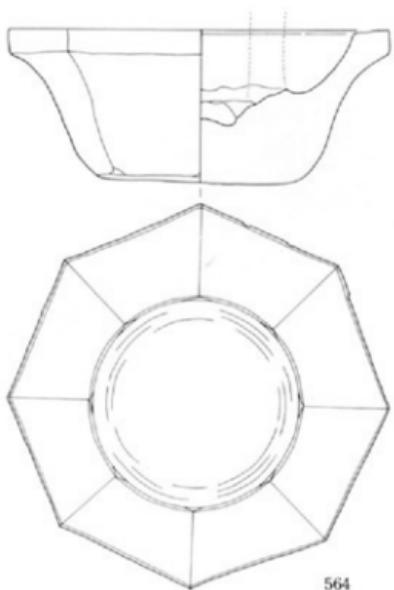
562



563

第71図 寺内焼 1号窯跡前庭部下層出土遺物

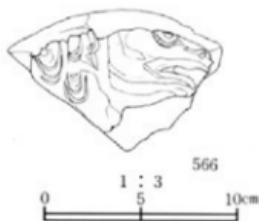




564



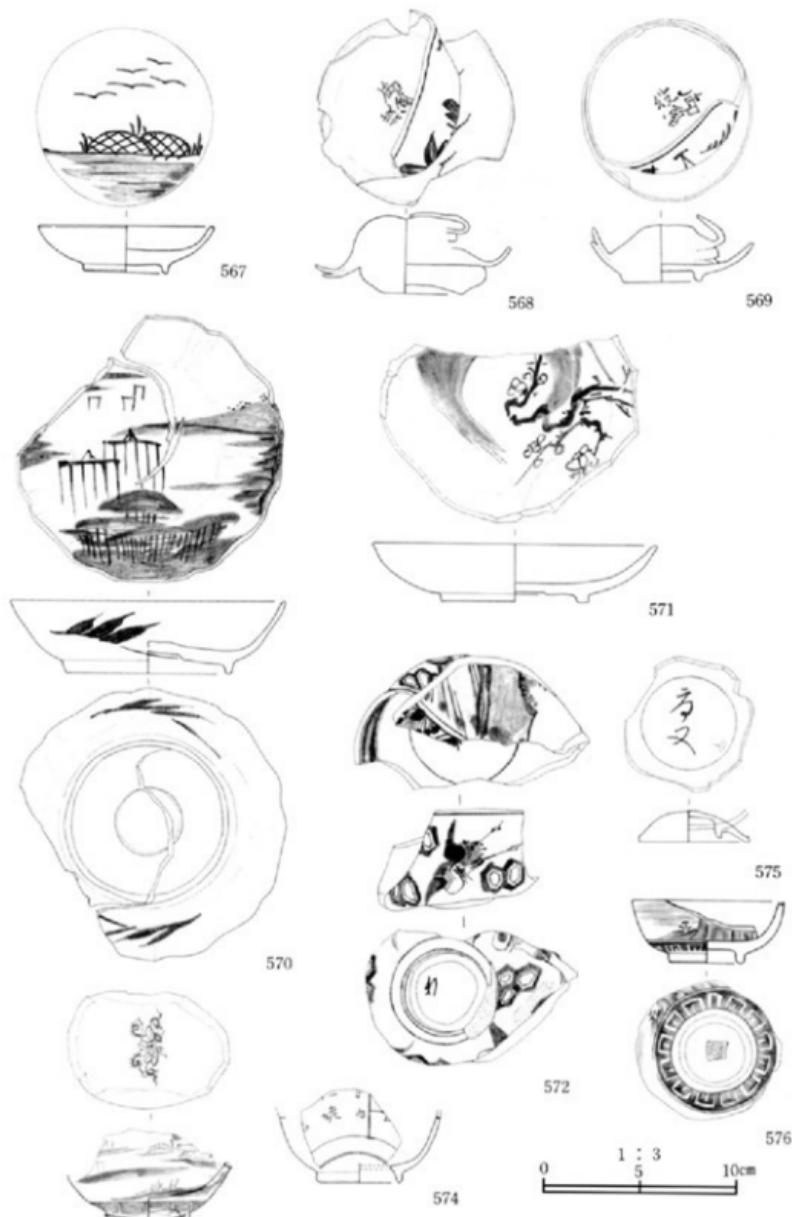
565



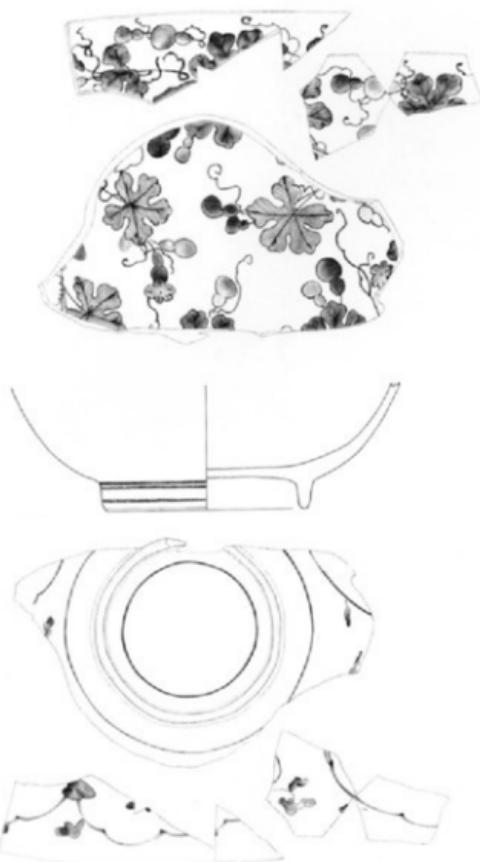
566

0 1 : 3 5 10cm

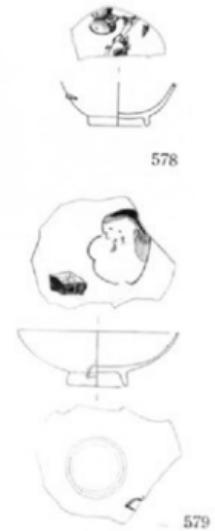
第72図 寺内焼1号窯跡前庭部下層出土遺物



第73図 寺内焼窯跡陶器物原出土遺物



577



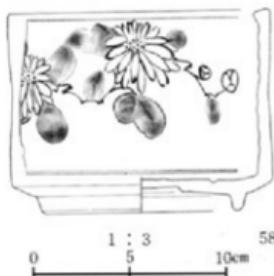
578



580



581



582

0 1 : 3 5 10cm

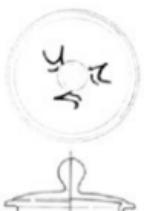
第74図 寺内焼窯跡陶器物原出土遺物



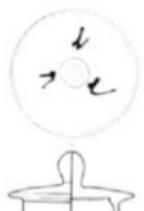
583



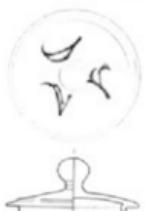
584



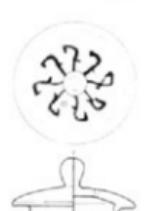
585



586



587



588



589



590



591



592



593



594



595



596



597



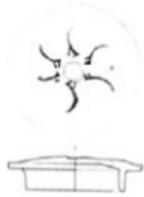
598



599



600



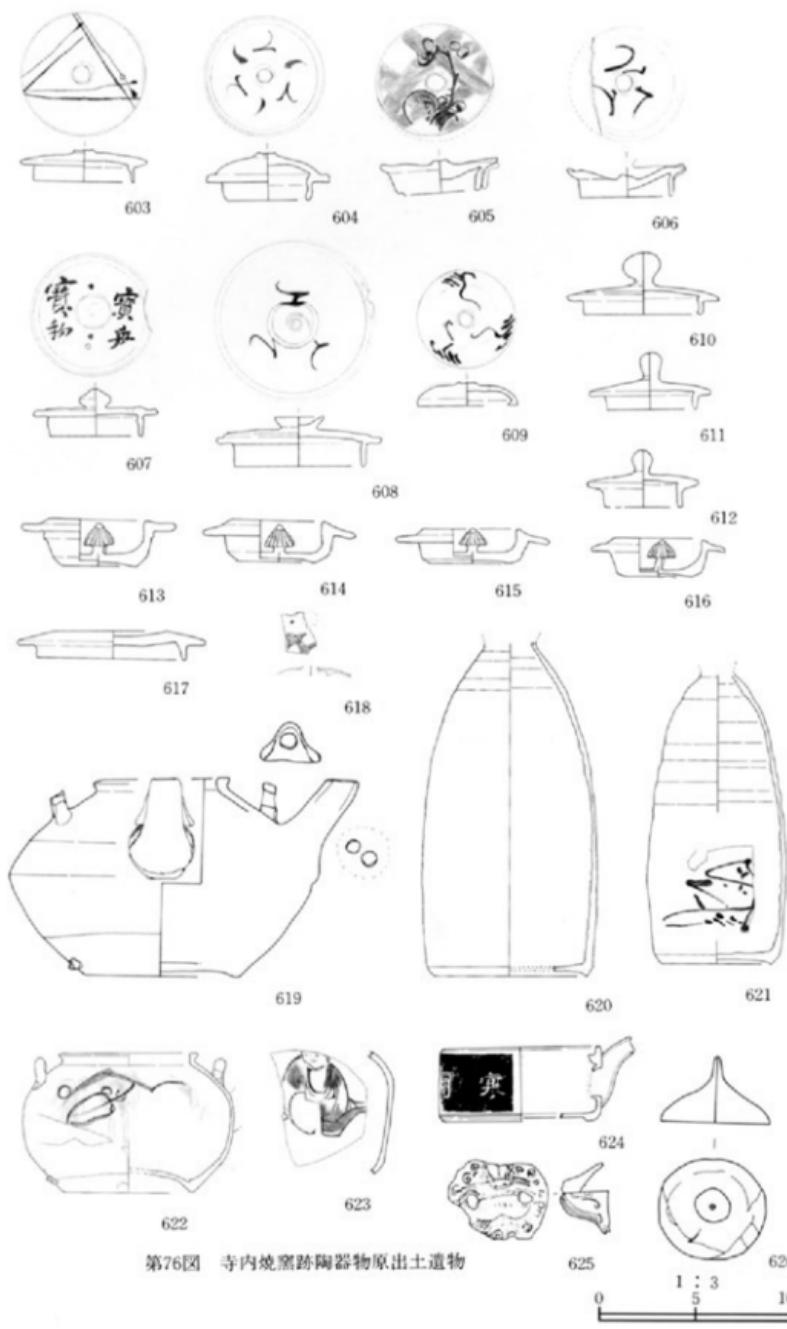
601

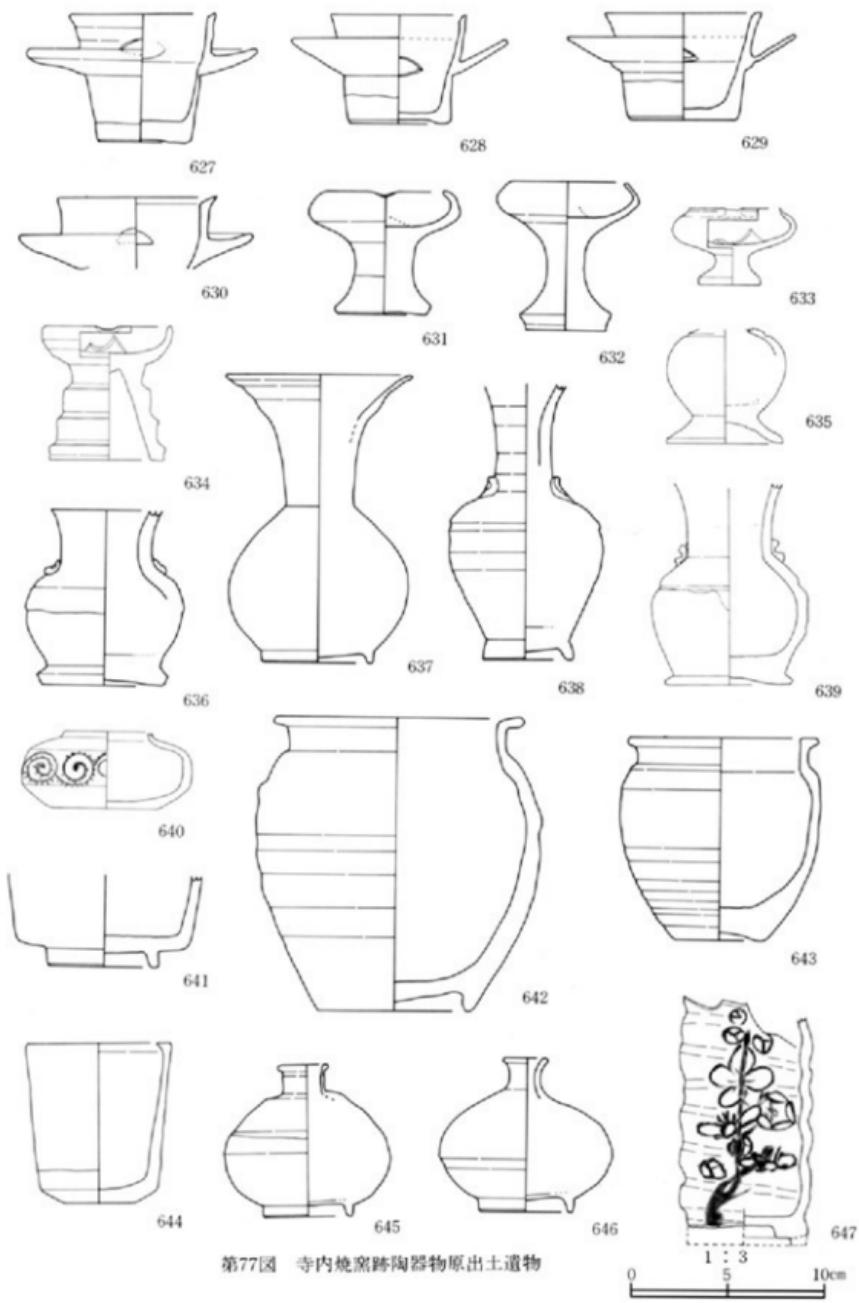


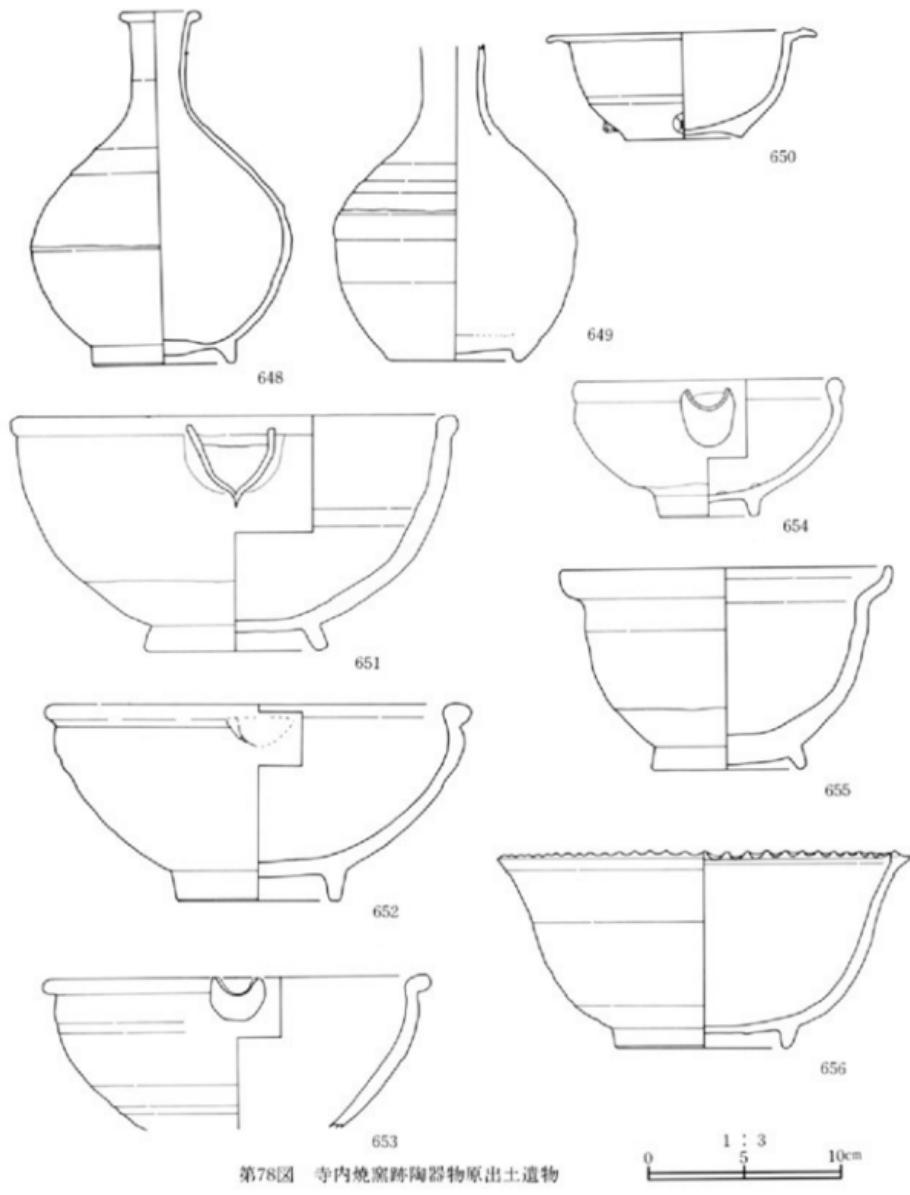
602

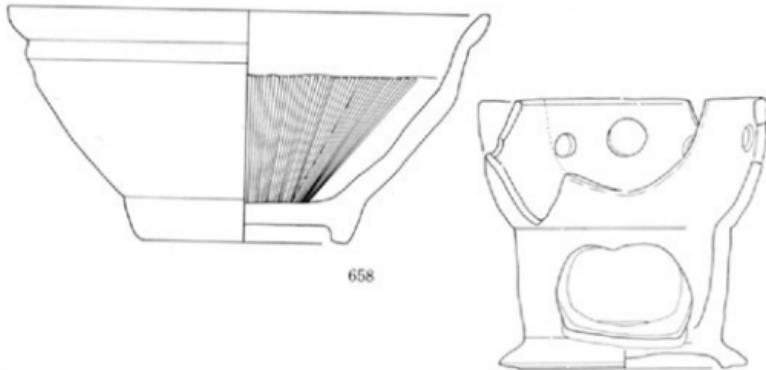
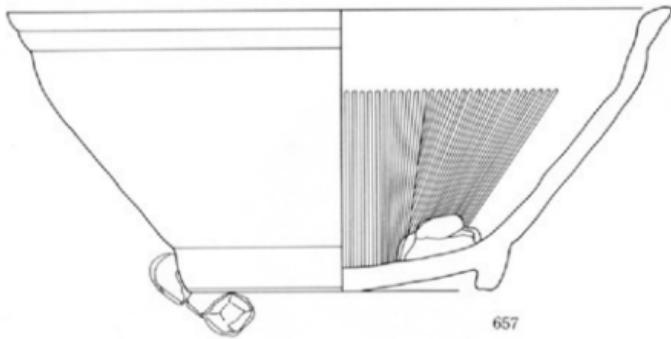
第75図 寺内焼窯跡陶器物原出土遺物



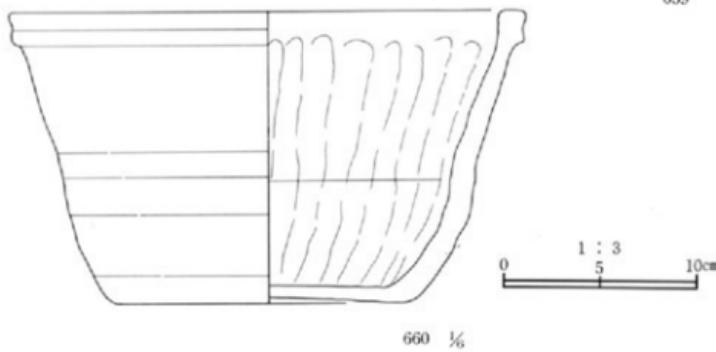




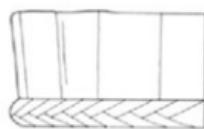




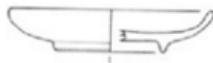
659



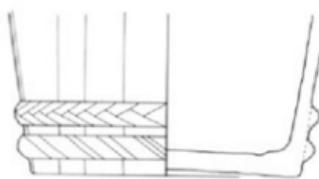
第79図 寺内焼窯跡陶器物原出土遺物



661 1/6



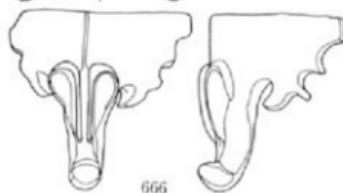
大木



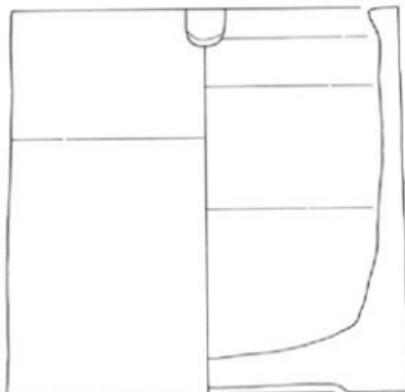
662 1/6



665



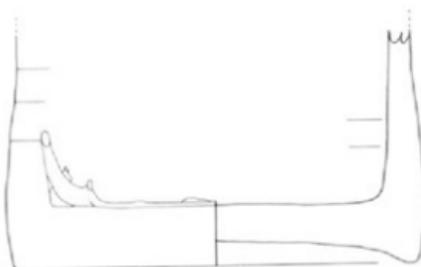
666



663



667

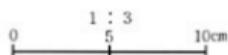


664



668

第80図 寺内焼窯跡陶器物原出土遺物





669

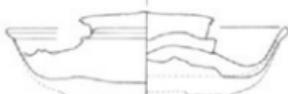
670



673



671



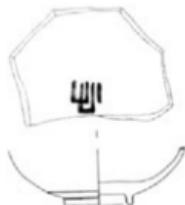
672



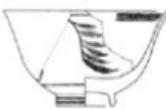
674



675



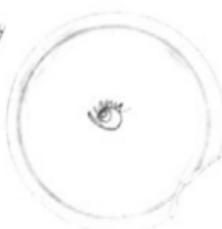
676



677



678



679

0 1 : 3 5 10cm

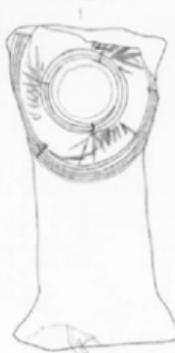
第81図 寺内焼 S A 006土留め板組束包含層出土遺物



680



681



682



683



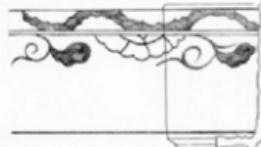
684



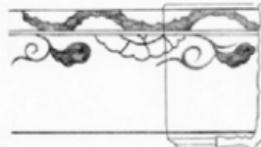
685



686



687

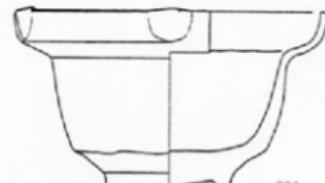


688



690

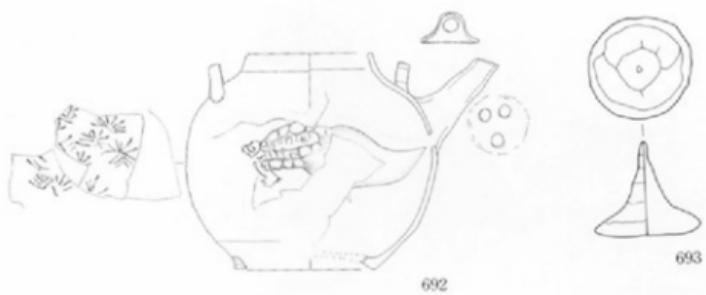
689



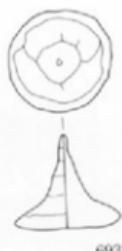
691

0 1 : 3 5 10cm

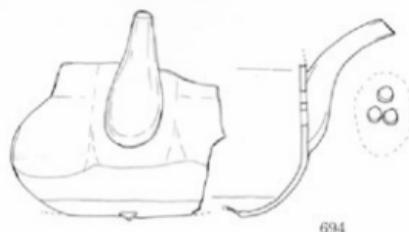
第82図 寺内焼 S A 006土留め板組束包含層出土遺物



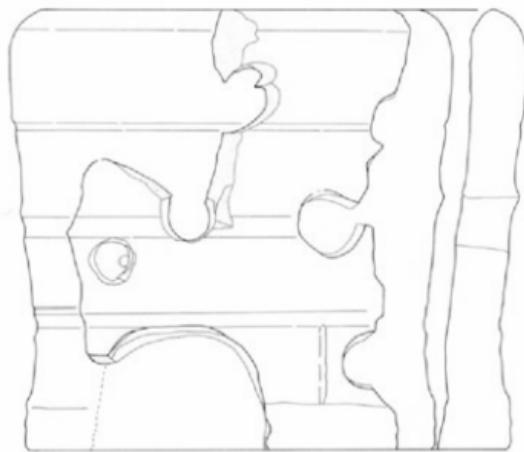
692



693

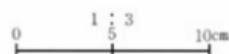


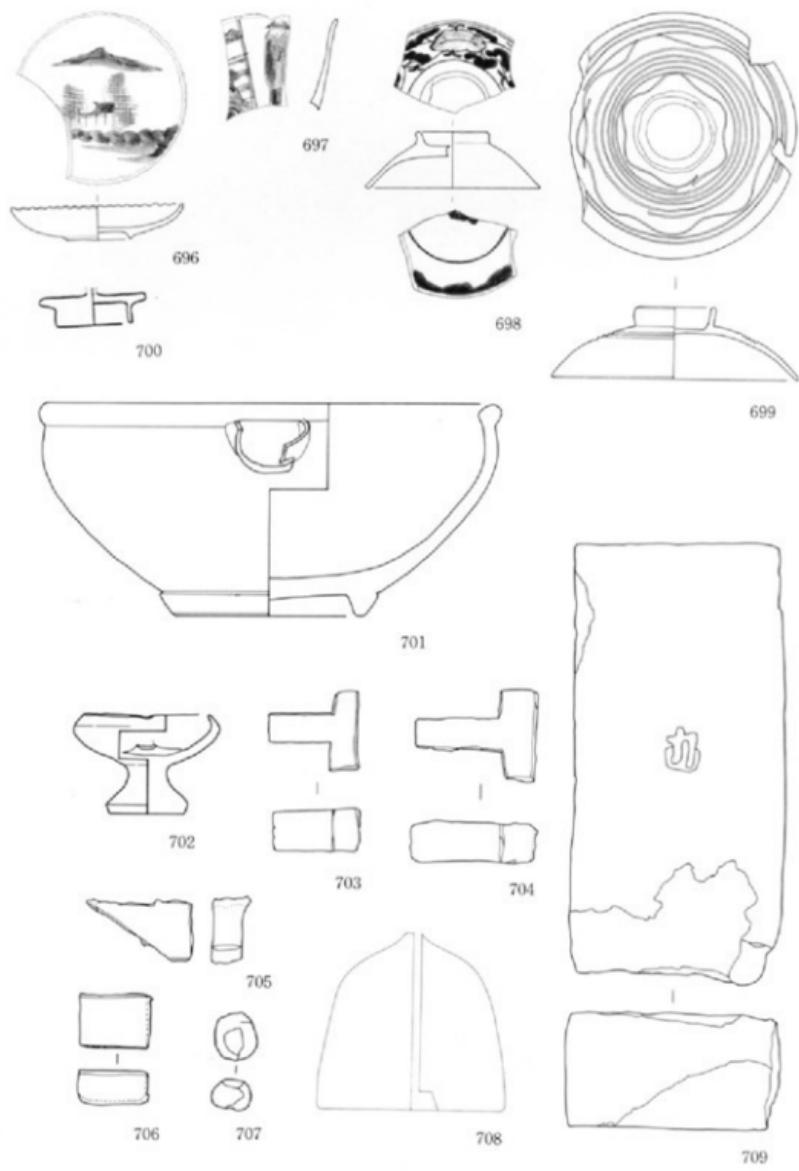
694



695

第83図 寺内焼 S A 006土留め板組束包含層出土遺物



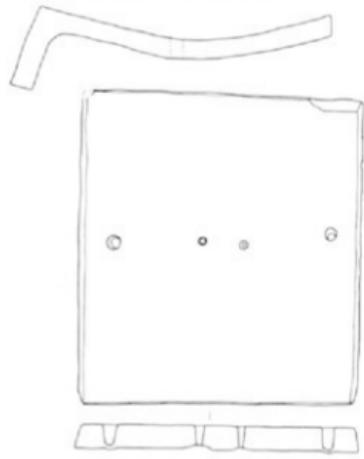


第84図 寺内焼 S D005溝跡出土遺物
寺内焼 3号煉瓦窯跡出土遺物

0 1 : 3
5 10cm



710



711



712



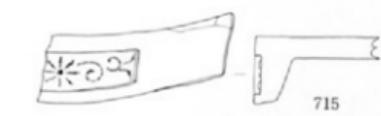
713



714

第85図 寺内焼 2号瓦窯跡出土遺物

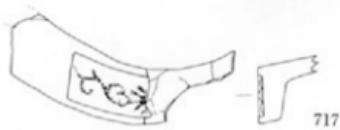
0 1 : 5 10 20cm



715



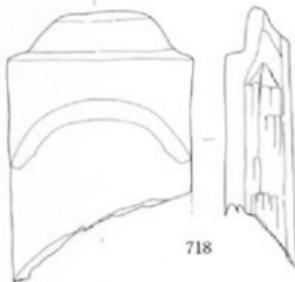
716



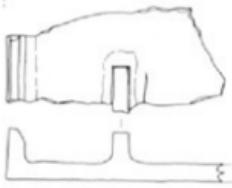
717



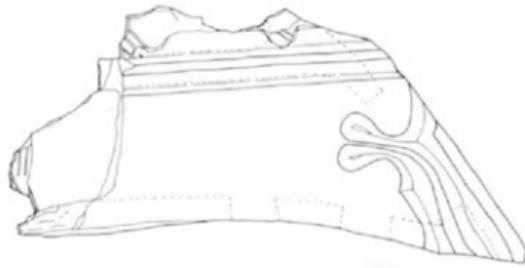
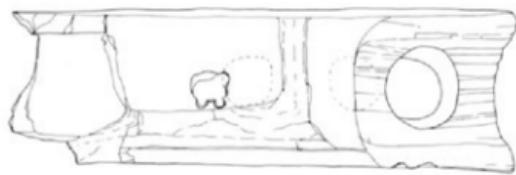
719



718



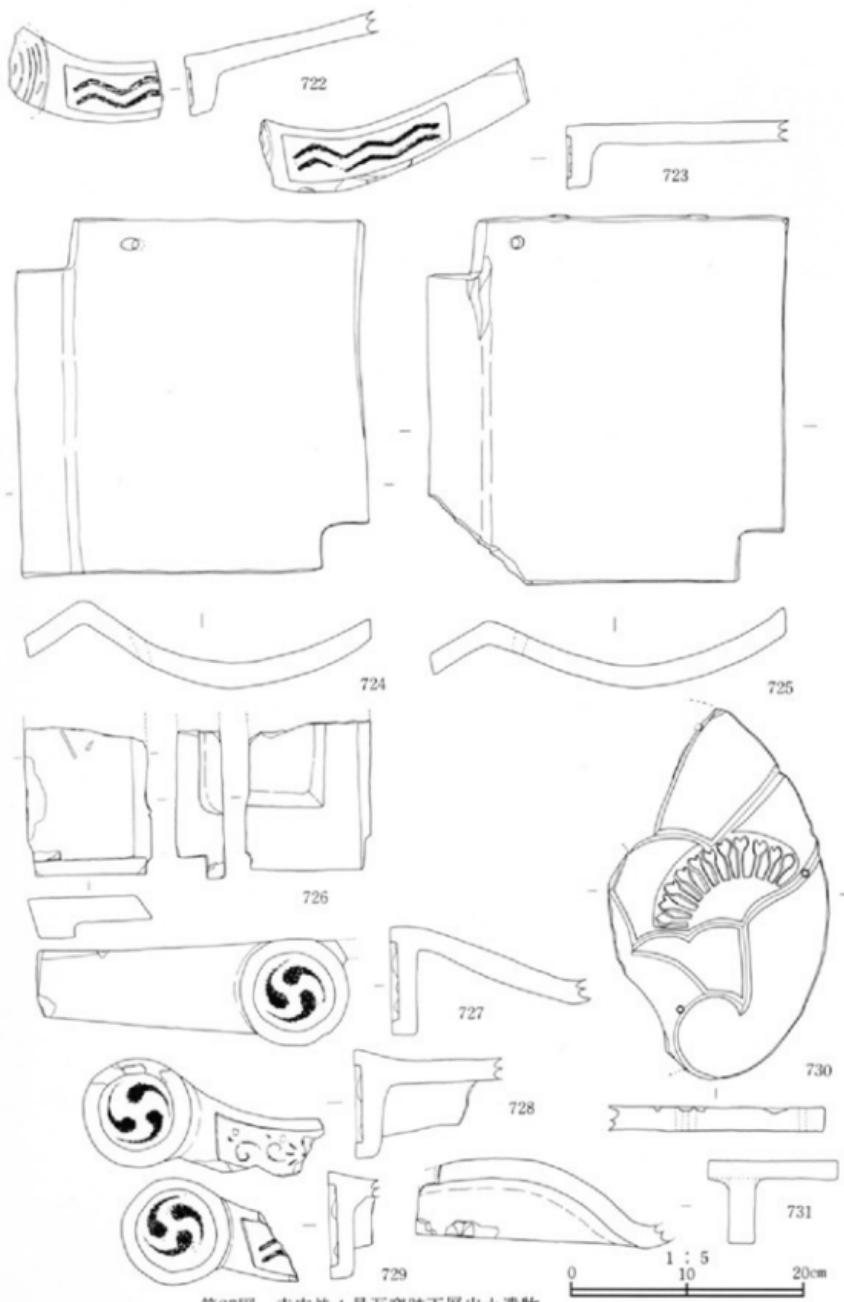
720



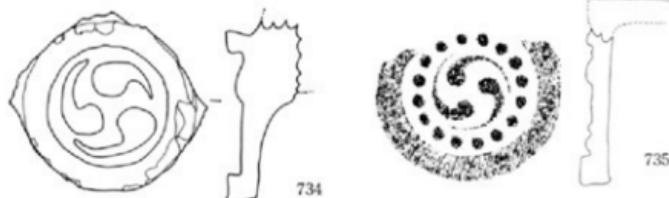
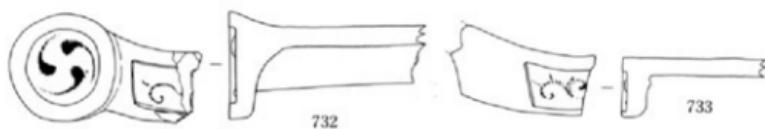
721

0 1 : 5 10 20cm

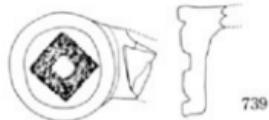
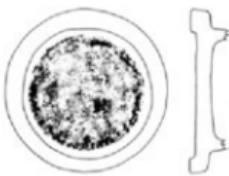
第86図 寺内焼4号瓦窯跡出土遺物



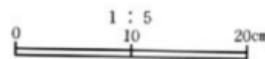
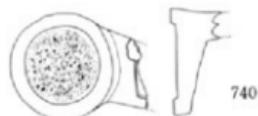
第87图 寺内烧4号瓦窑下层出土遗物



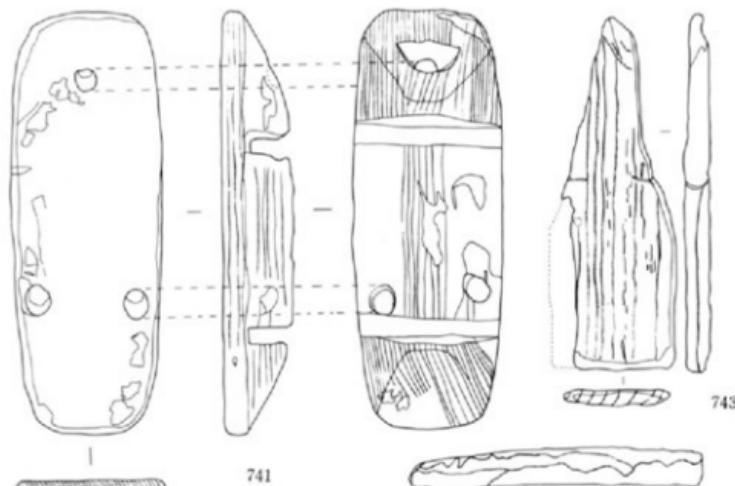
735



737

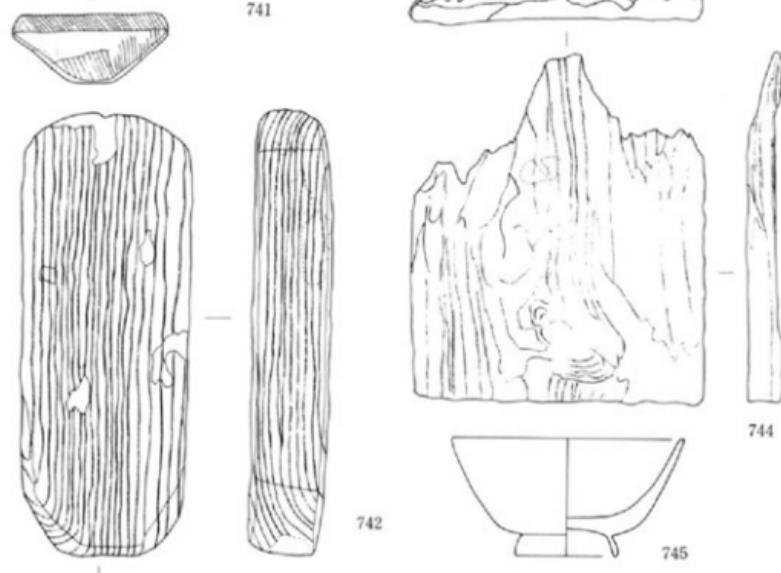


第88図 寺内焼窯跡磁器物原東側出土遺物及び表面採集遺物



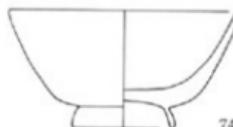
741

743

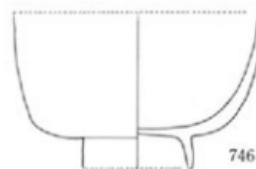


742

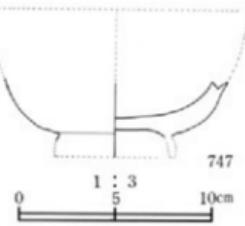
744



745



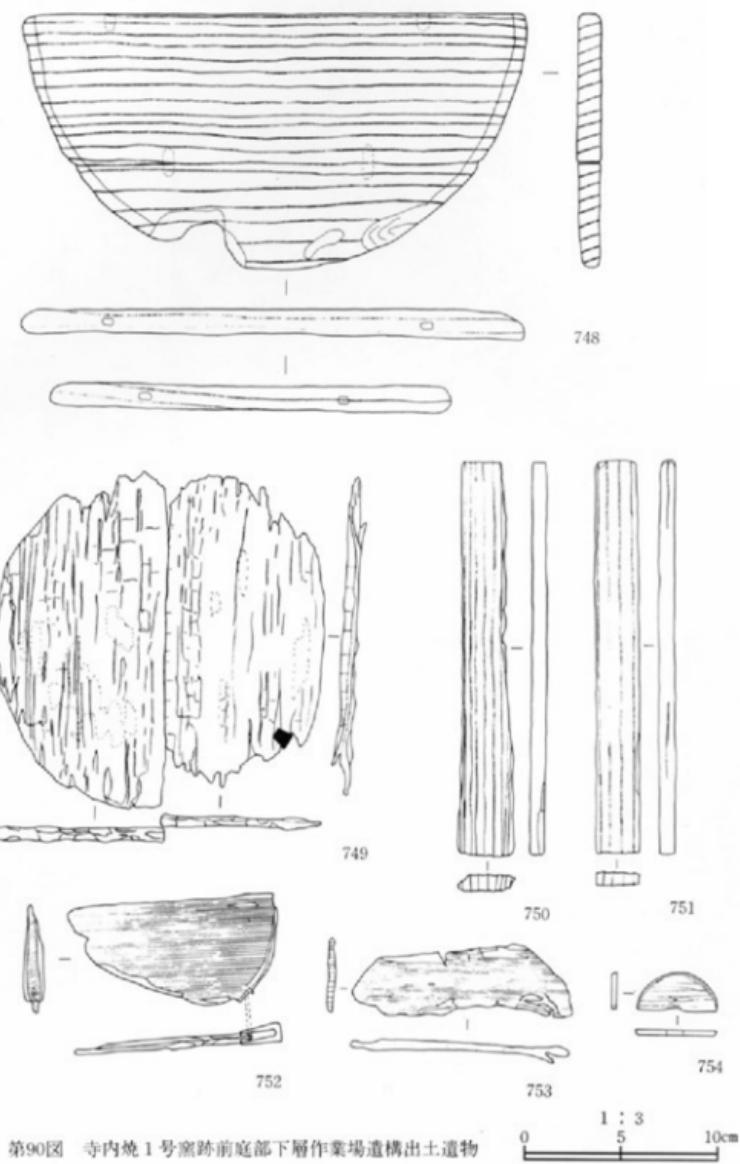
746



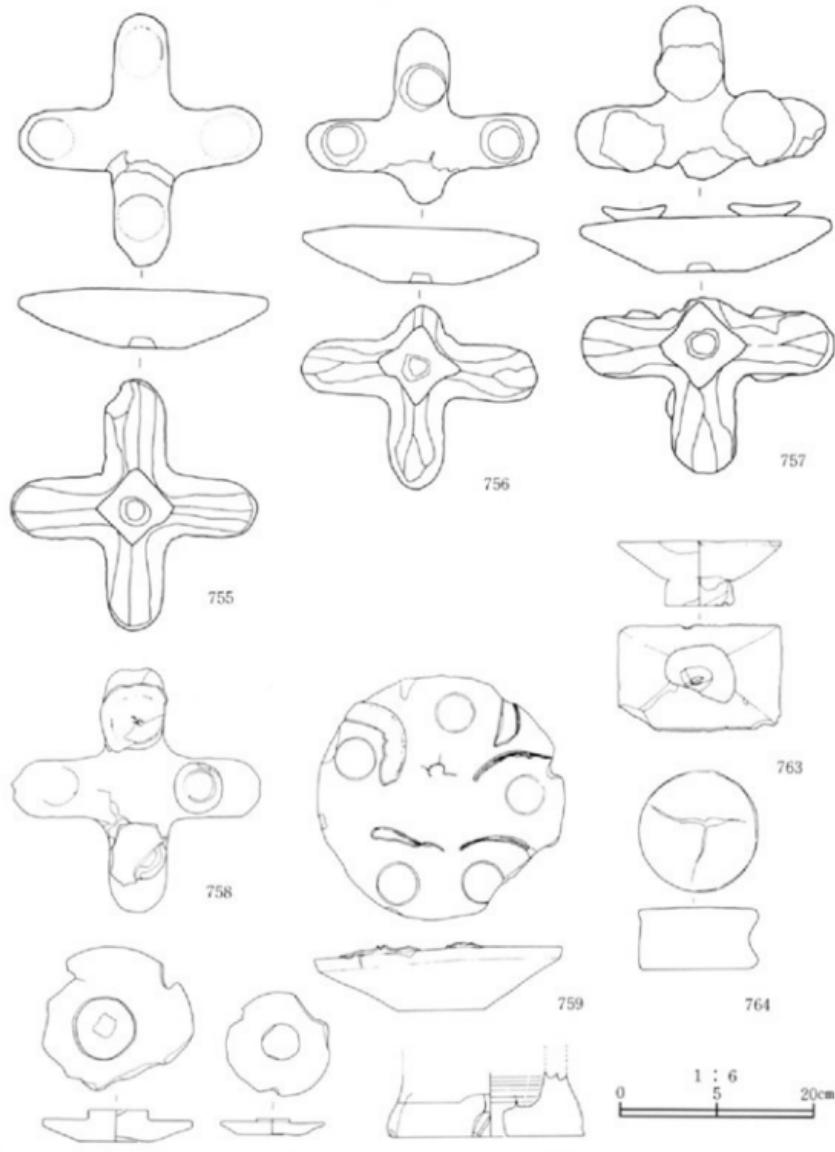
747

0 1 : 3 5 10cm

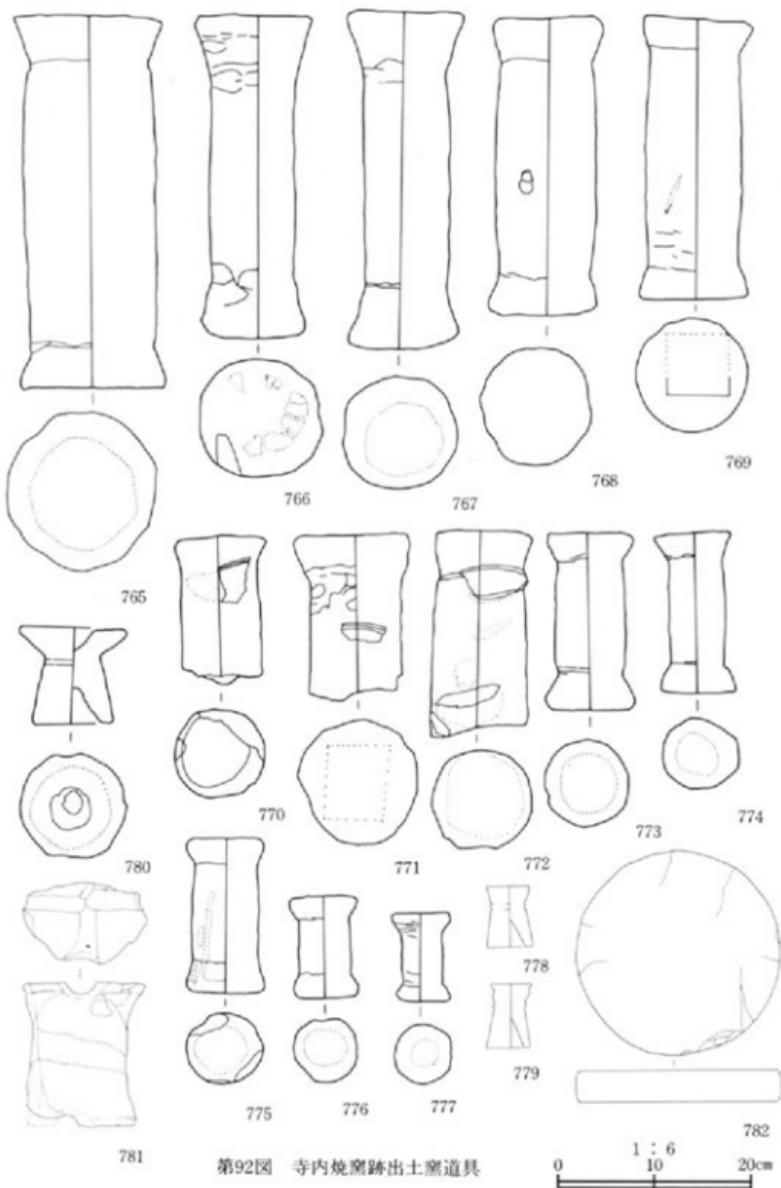
第89図 寺内焼1号窑跡前庭部下層作業場遺構出土遺物



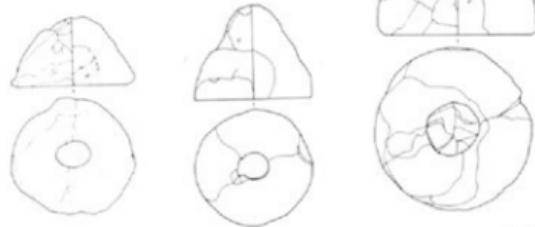
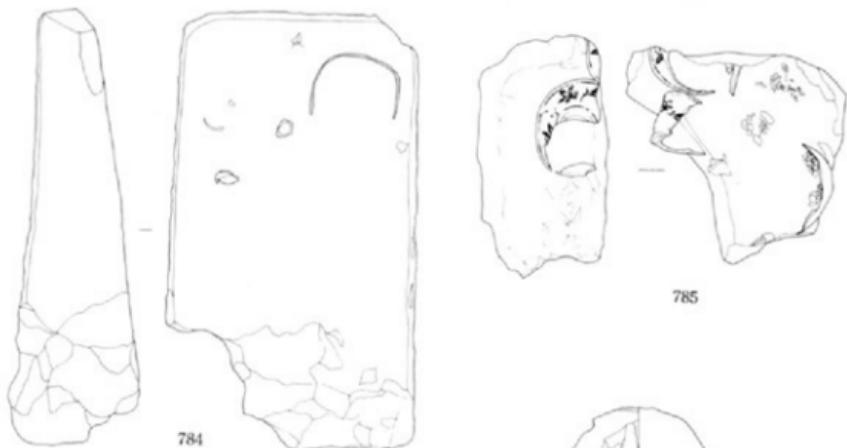
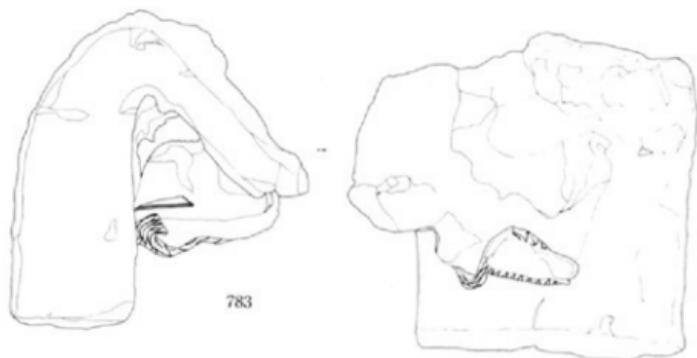
第90圖 寺內燒 1號窯跡前庭部下層作業場遺構出土遺物



第91図 寺内焼窯跡出土窯道具



第92図 寺内焼窯跡出土窯道具



第93図 寺内焼窯跡出土窯道具

1 : 6
0 10 20cm



第94図 寺内焼窯跡出土窯道具

IV 考 察

(1) 寺内焼窯跡の沿革について

寺内焼は、天明7年(1787)仙北郡角館町白岩焼の菅沢山窯が、現秋田市寺内に移転、創業したのがはじまりであると言われている。

菅沢山窯は、白岩瀬戸山の二代目儀三郎記による『磁器山永曆』(註1)によれば、安永9年(1780)に瀬戸山取立方の宮崎善四郎等によって創業された。しかし天明7年、菅沢山窯は操業不振を理由に寺内村に移転されることになるが、この間の移転の経過、理由及び操業不振の原因等については詳細は不明である。

寺内窯の創業にあたっては、前述の菅沢山窯で修業した小田野兎毛、前年京都で船師治兵衛に入門し京焼、金釜、楽焼等の修業を積んで帰郷した初代儀三郎が指導にあたっている。当初は、儀三郎を始め菅沢山の陶工が寺内窯と往来し、現地指導を行っていたようであるが、数年後には技術も上達したとみえ、一人立の傾向が認められる。しかし、それは今までのように八歩の師礼の差出し、盆、暮の年間のあいさつもなくなったということで「寺内山甚我假之致方」という評価を得たようである。

『大成陶誌』(註2)によれば文化7年(1810)には、「秋田郡寺内村、桜田周八其業を継ぎ、其孫要太、今猶営業す、明治十八年なり。」とあり、寺内瀬戸山の権利は小田野家から桜田周八に移り、明治十八年頃まで操業していたらしいことがわかる。また「八丁夜話」の文政9年(1826)には「小田野兎毛、隠居喜斎をして(後略)」とあり(註3)、小田野兎毛は隠居し、喜斎と号していたと考えられることから、文化7年の小田野家から桜田家の移管は、兎毛の高令によるものであろうか。小田野兎毛は土分ながら菅沢山で製陶の技術を修得し、製作分野のみならず瓦技術の導入、経営面等久保田藩にとつて多大な働きをしている。兎毛は81歳で生涯を閉じているが、秋田市旭北栄町鱗勝院の墓碑がその功績を物語っている。

文化、文政、天保年間に東北各地の窯場を修業、技術を伝えた陶工に湧井弥兵衛がいる。山形県新庄東山焼窯元に伝わる新庄東山焼資料(註4)によれば、弥兵衛は文政11年(1828)に寺内窯に籍をおき、後に花巻で棟梁となる桜田才治、切米焼の棟梁長谷川利吉、村松の棟梁寅吉等の弟子を育てている。弥兵衛は、天保年間後半には弘前に流れ、その後新庄東山で窯を開き、東山焼の創始者となっている。弥兵衛の存在は寺内焼の磁器に大きな影響を与



小田野兎毛の墓石（鱗勝院）

えたものと考えられるが、このことについては後述する。なお、花巻で棟梁になったと伝えられる桜田才治については、寺内の桜田家の墓所の中に「桜田財治」銘の墓石があり、才治=財治ではないかという説もある（註5）。

安政2年（1855）、前出の『磁器山水暦』によれば、下田忠右衛門が「太白焼」を創始したとあり、これが寺内の磁器生産の開始と考えられていた。しかし、このことについては各種文書の研究並びに寺内焼伝世品の検討から、やや疑問視されてきていたが、本発掘調査で出土した紀年銘のある磁器によって創始年代がこれまでの説より遡ることが判明した。

太白焼の創始者として伝えられる下田忠右衛門は自らは製陶をすることなく白岩瀬戸山、寺内太白方としても窯業経営に力を注いだ人物である。

しかし、文久3年（1863）2月には、「謙治」という人物に寺内瀬戸山の経営が移った。その間の経緯は明らかではないが、一説によれば当時下降ぎみの寺内窯を陶工として技術的に優れた「謙治」を採用することによって、再興を計ったとも考えられている。しかし、そのため職を失った忠右衛門は、自分は白岩で瀬戸焼を始めたが、太白焼創業にあたって全財産を使い果たしてしまったという理由を上げ、藩に百両の借金を頼っている。「謙治」については、寺内窯の名陶工「道三」と考えられているが、これについては別項（3）で述べる。

明治2年（1869）に藩が忠右衛門にたいして出した、寺内窯を返すについて「謙治」の負債200両も支払うように、それができなければ土焼方の桜田氏に年賦で渡す旨の文書に当惑した忠右衛門は、嘆願書を佐竹北家の土青柳掃部に提出している。この時点では忠右衛門は単なる白岩前郷村住人となっている。この結果については、資料が残っていないので明らかではないが、その後の太白方の記録がないことから土焼方の桜田氏に移管され、同時に磁器生産もその後まもなく終わりをつけたものと考えられる。

寺内窯最後の陶工は、桜田要太と考えられる。しかし明治12年（1879）には窯業の不振から窯場の一部を寺内焼の手伝い人と伝えられる池田氏に売却しており、その「地券」と「地所永代充渡書」が残っている（註6）。翌明治13年には土崎湊米蔵の新築に伴う屋根瓦等請が県土木課営繕掛からあり、要太がそれを請負っていることから、寺内窯には陶器生産の土焼方、磁器生産の太白方の他に瓦座の存在もあきらかになったと同時に明治13年には瓦窯についてはなお操業中であることが確認される。調査地からは、4基瓦窯が検出され、重複も認められることから、かなり長期に渡って操業されたものと考えられる。なお、藩内における瓦生産については、前出の「八丁夜話」文政9年（1826）に寺内・新藤田両座の瓦窯の存在が知られている。

市内佐々木善三郎氏調べの戸籍によれば最後の土焼方・桜田要太は明治18年9月6日に秋田で没している。尚桜田家は、明治25年に窯場の土地を売却し、同32年に北海道に渡っている。

明治13年に県土木課営繕掛から土崎湊米蔵の新築に伴う屋根瓦の発注がなされているが、それにたいし6月に「先般被仰付候瓦之義ハ、細工人病氣ニ付、即今扱兼候ニ付、恐縮ナガラ御申訳仕候

也」(句読点は筆者)と職人の病気を理由に製瓦の断り状を提出し、同7月に再度請負っている。しかしこの時点では、要太はすでに晩年に近く自らは製瓦に携わっていないものと考えられるし、職人の数も僅かであることを前文が物語っている。また前述したように明治12年に窯場の一部を売却しており、経営状態も悪化していることを示している。恐らくこの瓦普請を最後に、明治14、5年頃には90年余りに及ぶ寺内窯の火を閉じたものと考えられる。

(2) 磁器生産の創始と終焉年代について

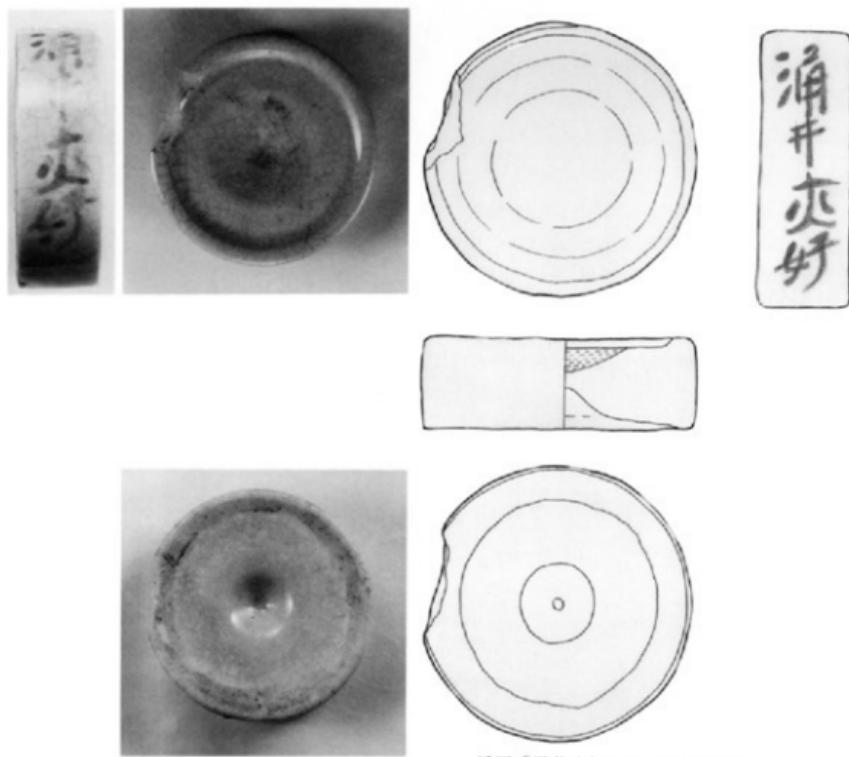
寺内瀬戸山では、磁器生産も行われていた。いわゆる「太白焼」であり、その起源は『磁器山水略』によれば、安政2年(1855)下田忠右衛門が創始者ということで通説化されていた。もっともこれらを考えるには文献史料によったものであり、寺内焼とされる伝世品の中には安政2年を遡る名陶工道三作の「道三……嘉永元年……」銘の磁器壺等があることから磁器創始年代については疑問の声もあった。

しかし、この度の発掘調査結果や史料の再検討によって新たな展開がみられている。

第53図に示した磁器製火鉢は口唇部に浮帶による雷文、体部に呉須で花唐草文の繪付けを施したもので磁器物原層から出土している。注目するのは体部外面に呉須書きされている「天保子ノ年 大白方秋田東吉」である。この銘文については、陶工と思われる秋田東吉自らが書いたものと考えられるが、高台内裏銘の吉祥句や「大明成化年製」等作品を誇張するための中国写しとは異なる性格のもので、作品にたいする銘文と解されるものである。これからすれば、天保子ノ年は天保11年(1840)にあたり、前述の安政2年をあきらかに遡るものである。

東山焼創始者、湧井弥兵衛の「履歴書」(註7)によれば、弥兵衛は文政11年(1828)に山形平清水の窯場から「久保田藩寺内村瀬戸場エ召抱ヒラレ…」、また、「天保十年中寺内村瀬戸場ニ於テ肥前国松津都在田村産瀬戸戸直太郎ニ就キ唐津流丸窯ノ法ヲ皆伝セリ」とある。後者にある在田村は有田村であり磁器発生の地である。肥前国の陶工直太郎が寺内窯に居る理由については明確ではないが、前出の新庄東山焼資料によれば「奥州森岡ニ於テ石焼ノ國產ヲ開カレ、九州肥前唐津ヨリ數多ノ職人(中略)多分ハ秋田エ参り、同寺内ノ國產ニテ石焼ヲ開カント欲シ」とあり、森岡=盛岡で肥前陶工を抱えて石焼=磁器創始を試みたが失敗し、帰る国を失った陶工達が隣国である秋田寺内窯に流れてきたというものであり、直太郎もその一人と記している。この資料の全面的信用性についての問題はあるが、盛岡から離れた磁器技術を保有する肥前の陶工が、流れついた寺内窯でその技術を伝播することは十分考えられる。この時期については、寺内の西来院に伝わる過去帳が一つの参考になろう。過去帳には寺内窯の陶工と考えられる数人の名前があり、その中に「天保八年十二月九日肥前国人也瀬戸山住ス本田直太郎子供」とある。この本田直太郎は、前述の湧井弥兵衛の「履歴書」にみられる直太郎と考えて間違いないであろう。これからすれば寺内窯の磁器生産は天保8年まで遡り得る可能性が強い。さらに小野正人氏によれば(註8)、盛岡藩窯八幡山陰焼の日誌に伝

えられるところによると、八幡山陰焼は天保の大飢饉等によって、天保5年には解散し各所に散つていったとしている。この一団が寺内窯に流れてきたことは前出の資料にもあることから、磁器生産の開始を天保5年まで遡らせることが可能である。



挿図「涌井直好」銘 ロクロ軸受

ところで小野氏は前出の東山焼資料にある、弥兵衛が文政11年寺内窯で新瀬戸山を開いた、と、あるのは磁器窯ではないかと考察されている。寺内窯の陶器については、既に技術が確立しており「新瀬戸山を開く」と言う記述はしない、というのをその一つの根拠とし、寺内窯の磁器生産は天保初年以前の可能性を述べている。しかし、この時期に弥兵衛と肥前の陶工との接触を示す資料はない。磁器生産は、陶器生産から自然発生的に生まれる性質の産物ではないし、東山焼資料はその性質上、創始者の業績を誇張する部分のあることも否定できない。したがって現時点では、天保5年から同8年頃に磁器生産が開始されたと考えるのが妥当であろう。

ところで、涌井弥兵衛の寺内窯における逗留については前出の史料にたよるしかなかったが、こ

の度の発掘調査地から遺物として証明できる資料が発見された。残念ながら出土層位は明らかではないが、挿図の如き直径4.7cm、厚さ1.6cmの淡黄色の磁器製で上面、下面が円錐状に凹み、一方は細かい擦痕の使用痕跡が認められ、側面に「涌井直好」銘の呉須書きのあるロクロ軸受(註9)が発見されている。「画軸譜・東山由来・松井秀房記」(註10)によれば、「涌井直好ぬし者、俗に弥瓶とよひて、…」とあり、直好=弥瓶=弥兵衛であることが理解される。史料の信用度の問題は残るが、弥兵衛所有のロクロ軸受が磁器製であることからも、天保11年までの寺内在住期間に磁器生産が開始されたことは疑いのないところである。

発掘調査によって検出された磁器の物原は、わずか一ヶ所である。しかも後述するように出土染め付け類は、文様及び器形的にそれほど大きな相違は認められず、また、磁器層の厚さ、広がりからしても長期間の操業とは考えられない。また周辺の包含層や作業場施設遺構等から出土する遺物に、肥前産と考えられる磁器類が含まれている。これらの多くは焼離ぎが認められることから、貴重品として扱われたものと考えられ、その一部は絵付けの際の手本としても活用された可能性も否定できない。写真による鑑定であり、断定はできないが大部分は、1800~1860年に相当するようである(註11)。

寺内窯で磁器生産が行われたのは、わずか30年余りである。本調査地の南約100mほどの地点にも磁器窯の存在することが知られている。未発掘であるが、これまで採集された皿類を実見したところによれば、ほとんどの見込が蛇ノ目釉ハギで、呉須もくすんだ色調を呈し、今回出土した磁器類とは大きな相違が認められる。これらのことから、この両者は同時操業というよりは時期的に相違するものと考えられる。そして寺内窯で磁器生産が開始された時期に近い「天保子ノ年」銘の出土磁器を考えるならば、本調査地の磁器生産が開始され、その後安政年間から元治年間頃に南に移転したことが想定される。そして、太白方が謙治から桜田要太に移管され、間もなく磁器生産も終わりを告げたものと考えられる。

安政年間から元治年間と言えば、安政2年「磁器山永署」によれば下田忠兵門が寺内窯で太白焼を開始したという記録がある。この史料は寺内窯における磁器生産の開始と誤解されてきたが、前述のような新たな窯の造営という可能性も否定できない。また文久3年は、太白焼が下田忠兵門から謙治に移管された時期でもあり、寺内窯の磁器生産に大きな動きのあった時期にあたる。今後は窯の変遷も合わせた検討が必要であろう。

寺内窯における磁器生産が、わずか30年余りでその幕を閉じたことについては、種々の要因があるが、その一つには原料の問題があげられる。寺内周辺には磁石は産出せず、記録によれば湯沢市松岡、また伝世品の盃洗銘によれば北秋田郡阿仁町姥川原の磁石を用いた記録がある。しかし、いずれも50~80km以上の遠隔地であり、原料の仕入れには大きな負担があったものと考えられる。燃料についても同様のことが言えよう。登窯の焼成には多量の燃料を必要とする上、陶器窯、瓦窯も操業しており、これらに供給する燃料の確保は、一丘陵のみでは到底まかなえる量ではないと考

えられる。そして、最も重要なことは、幕末以降肥前、瀬戸を始め一大生産地から多量に入って来る陶磁器類の存在であり、経済基盤の弱い地方窯に取っては決定的な要因になったものと考えられる。

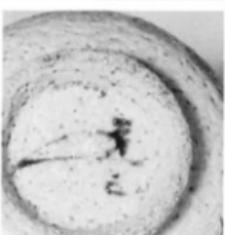
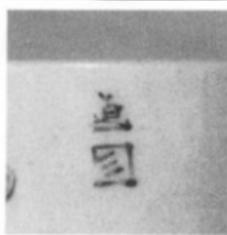
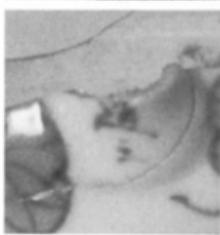
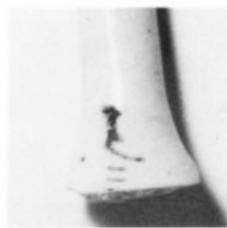
(3) 陶工「道三」について

「道三」は、寺内焼隆盛期の名工で長庚亭、寿楽軒、尾形、秋田等の号を名乗ったと言われ、発掘調査においてもこれらの銘がある茶碗、皿、盃等が出土した他、盃の内面に官女と詩句を呉須書きし、それに「仁儀堂 道□」とあることから仁儀堂道三と名乗ったとも思われる。また、伝世品として蓋裏に「秋田道三自画瀬戸入製之嘉永元年十月」銘の染め付け壺（註12）、「道三製自画」銘の上絵五彩水注（註13）の県指定2点と、染め付け土風呂の市指定（註14）1点の他、未指定でありながら名品と言われる道三銘の作品がいくつか現存している。

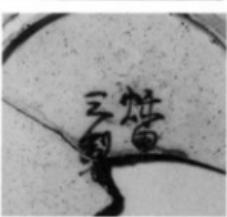
これほどの名品を残している道三であるが、その経歴については謎に包まれ、わずかに文献史料をたよりにその一端が紹介されているに過ぎない。

ここで、郷土史家升屋旭水が大正5年前後に著した道三に関する好史料が3点（註15）あるのであげておく。なお升屋旭水は慶応元年に生まれ、大正10年に没している（註16）。一つは『羽陰諸家人名録』で「寿楽軒道三（竹内）角館の人名は謙治寺内村ニ窯を開けて楽焼を製し栗田口道八の門人なり号を寿楽軒と称せり。陶画に巧なり嘉永頃」とある。『羽陰諸家人名録』については下書きと思われる原稿も最近発見されている。同じく旭水の著書『旭水叢書』巻一、二合冊には「楽焼道三 道三ハ栗田口道入の同門なり道三画の巧なり陶術ニ劣れり道入ハ陶術の巧なるも画の劣れり多くハ道入の焼きたるものへ道三画をかきたると云ふ道三は角館の人竹内謙治と云ふ寺内の窯を開きしハ文久慶応の頃なるべし」。さらに『備忘錄』には「栗田口道入ノ兄弟子ナリ道三ハ画ヲ能クシ陶術ニ巧ナラズ道入ハ陶術ニ巧ナリ道三ハ角館ノ人竹内謙治ト云フ寺内ニ窯ヲ開ク明治初年ノ人」とある。これからすれば、道三は角館生まれで本名を竹内謙治と言い、京焼の高橋（栗田口）道八=仁阿弥道八の門弟で、製陶技術よりも絵が得意だったということになる。

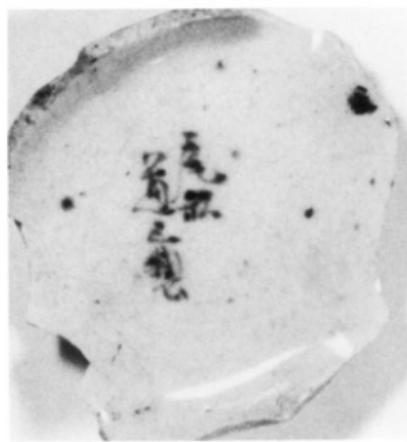
これらの3点の史料は、ほぼ内容が似通っており、同一史料をもとに何回か書き直されたものと考えられる。特に、後者の2点は最後の年号が若干異なるだけでその中身はほとんど同じといってよい。道入については、他の史料がある。実見した市内在住の福島彬人氏によれば秋田焼の頭で旭水日記の大正9年4月24日の中に、「師匠道入ハ栗田口ノ人啓治ト称ス明治二十三年七十二歳ニテ秋田ニ來テ奥田氏ニ教エタリ（自楽亭ノ号アリ）」とあるという。道入から教えを受けた「奥田氏」は奥田永蔵（号は道遊）で秋田焼の創始者である。文中の「明治二十三年七十二歳ニテ秋田」については日記という性格、また旭水自身が積極的に活動した25才頃の出来事であり、かなり信憑性の高いものと考えて良いであろう。上記した奥田永蔵が、秋田焼と称したのは明治26年のことであり、この点では道入との関係は一致する。しかし、『旭水叢書』並びに『備忘錄』にある「道入の製陶



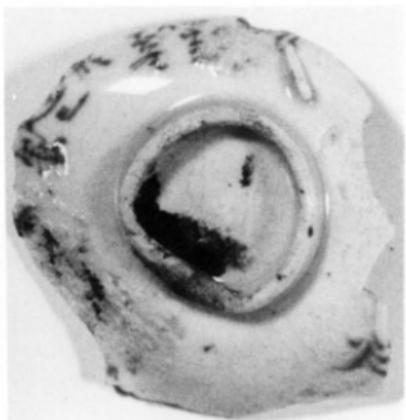
□
樂
軒



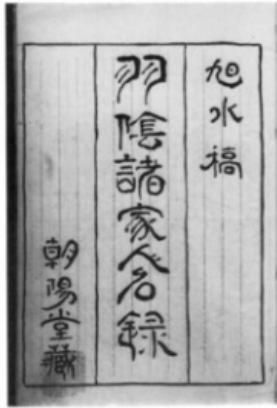
寺内焼窯跡出土「道三」銘



「尾形道三製」銘



「口保十三口暮冬口形道三製」



上・升屋旭水著「羽陰諸家人名錄」

したものに道三が絵付けをした」という記述については、道入と道三との共存関係については年代的に誤差が生じることになる。むしろ『羽陰諸家人名録』の「陶画に巧なり」（傍点筆者）、すなわち製陶も絵付けも巧みであったと理解するのが自然であろう。発掘調査による道三鉢の陶磁器は、数10点程出土しているがいずれも胎土が良質で器肉は薄く、細筆を駆使した繊細な絵付けの物が多く、他の染め付け磁器類とは一味異なる作風である。仮りに二人の合作であったとするならば、ある程度の作品にたいしては、第45図の395のように「細工□□」、「絵師永八」等の銘文が記されるのではないだろうか。

道三が京で修業をしたという記録は、他には見当らない。市内在住の郷土史家、佐々木善三郎氏の話を紹介しておく。佐々木氏は長年の間道三の調査をされ、その経歴についても佐竹北家の土竹内外衛が道三ではないかと考えておられる。そこで前出の『羽陰諸家人名録』にある「高橋道八の門人」に疑問を抱き、現高橋道八窯元に過去の門下生の存否について問い合わせたことがある、とのことであった。筆者も高橋道八氏からの手紙を拝見させて頂いたがそれによると、現存する家伝の資料には「竹内謙治」なる門下生の名前は無いとのことであった。ちなみに京焼二代目道八の長男は幼名が道三で、三代目道八を継いだのは天保13年(1842)のことである。京で実際に修業を重ねたかどうかは別にして、当代名声の高い師の門下生あるいは縁故を名乗ることがあってもそれはほど不思議ではないと考えられる。

道三=謙治とすると、寺内窯に関連する2点の文書がある。一つは、白岩の下田文書で「乍恐書附を以、奉歎願候」で始まる下田忠衛門の嘆願書である。文久3年に下田忠衛門の太白方が下田から謙治に、明治2年にはさらに謙治から土焼方の桜田氏に移管されたが、この間の藩の処置にたいしての不満が記されている。もう一つは、藩の家老を務めた川井家の「安政子七月」で始まる文書で、謙治が自立山を築いたことが記されている。文頭の年号と干支にズレが認められるものの、謙治が寺内窯を維持するために仙北、松岡から土石等原料を入手していること、年間の窯入れ回数等が記載されている興味深い文書である。。しかし、この文書が記された年代については不明であるし、文頭部分の年号と干支にズレについても干支をとれば、嘉永5年か、元治元年ということになろうし、年号をとれば、安政年間の出来事ということになろう。安政年間と言えば、2年に下田忠衛門が寺内で太白焼を始めた年にあたる。

ここでは、資料及びその信憑性については言及できないが、少なくとも道三と考えられる人物=謙治が寺内窯に關係していたことが明らかである。

道三の最も新しい作品として、「明治十四巳三月寿楽道三七十一才」銘の楽焼（註17）がある。この時点では、別項(2)で述べたように寺内窯は瓦窯を残すだけで、すでに陶磁器類の生産はなされていないものと考えられる。一説によれば、寺内から約500m南に位置する八橋で楽焼を行っていたと考えられている。幕末頃の八橋界隈は、八橋焼と称する低火度主体の土風炉等の焼成窯があり、一方では寺、神社、茶店等の集まつた風流な地であったことがその要因としてあげられてい

る。また「尾形道三」銘の楽焼茶碗は絵付け、体部の詩句の内容が道三晩年の枯れた味が出ているとして八橋の頃の作品と見られている。しかし今回の発掘調査では、第50図375のように体部に「天保13年 尾形道三製」、見込に「尾形道三製」と呉須書きされた磁器製茶碗も磁器物原から出土しており、すでに以前から「尾形」を号していたことが判明している。時期、作者は不定ながら、調査地区内採集遺物のうち、第41図268、第46図337のように、明らかに楽焼風のものが出土しており、同地区でも楽焼を製作していた可能性も指摘できよう。

(4) 物原出土の磁器について

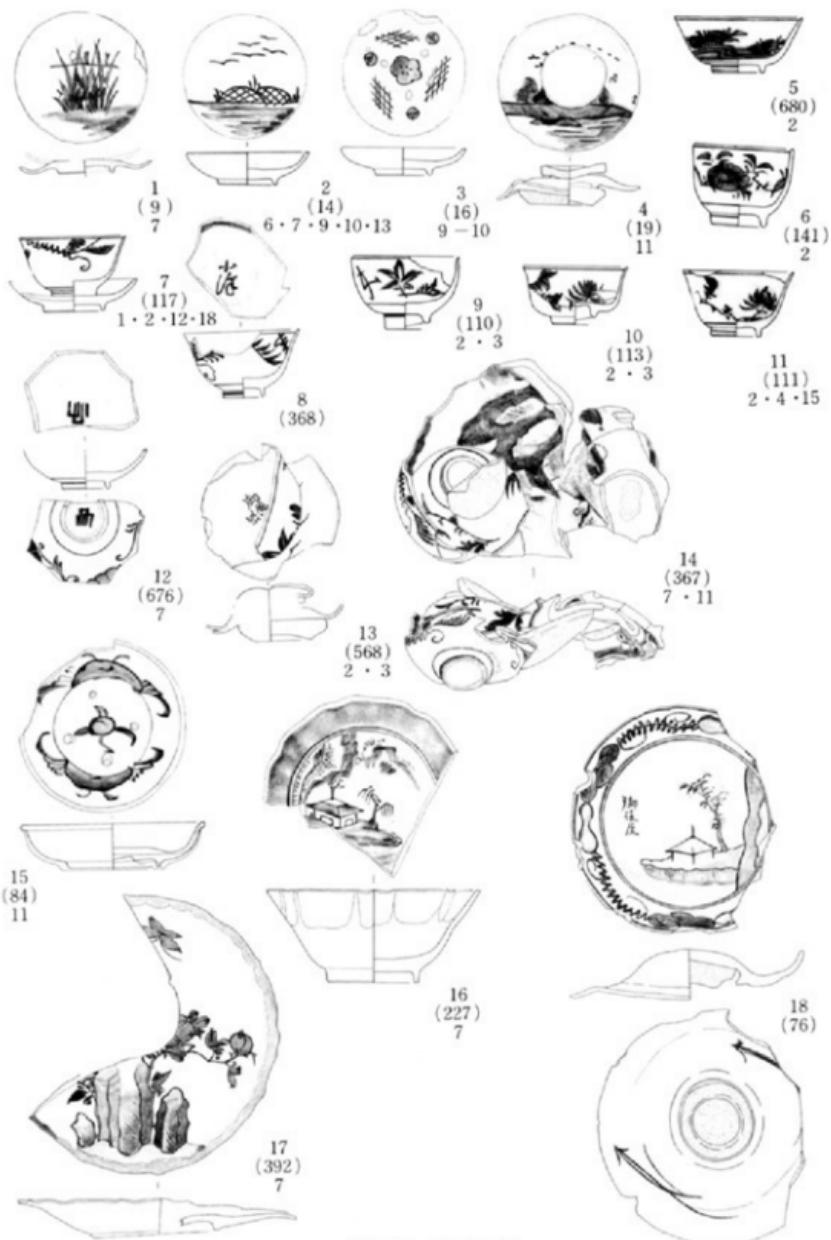
本調査では、陶器焼成用と考えられる登り窯一基のみで、明確な磁器窯は検出されていない。しかし、陶器窯の北側約40m程の位置で多量の磁器が検出され、その状況から磁器窯に伴う物原と考えられた。

寺内焼については、これまでいくつかの伝世品が紹介されているのみで、その器種、染め付け等の絵柄、そしてそれらの変遷については発掘調査もなされていないことからはほとんど手がつけられていなかつた。そこでここでは、本調査で検出された磁器物原によってその一端でも明らかにしてみたい。

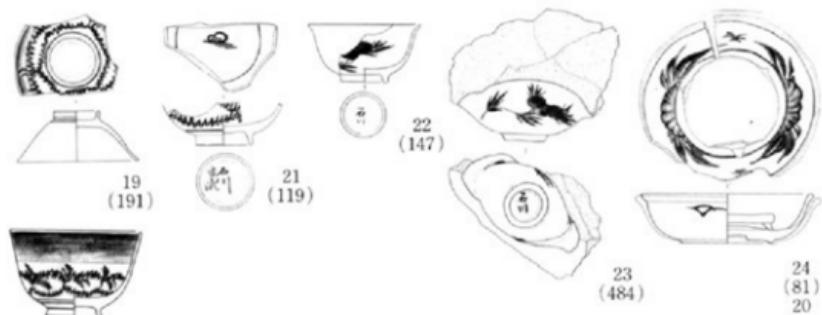
磁器物原及び周辺からは、多量の磁器と少量の陶器、瓦が出土している。特に磁器類は物原の性質上、磁器あるいは窯道具との熔着したものが多数認められる。そこで、物原とその周辺出土の熔着遺物の比較検討によつて、一窯当たりの磁器の組成と焼成量について考えてみたい。周辺出土遺物としたもの多くは、重機によって削平された廃土から採集されたものであるが、熔着遺物を対象としたものであり、この作業には差し支えないものと考える。

第95、96図は、それぞれ熔着関係にある磁器を表示したものである。上段番号は本図の番号、中断の（ ）内は、本文図面番号、下段は、本図内の熔着関係を示している。また下段番号のないものは、蓋あるいは身等に伴う、同文の器種をあげたもので、同時焼成と考えられるものである。

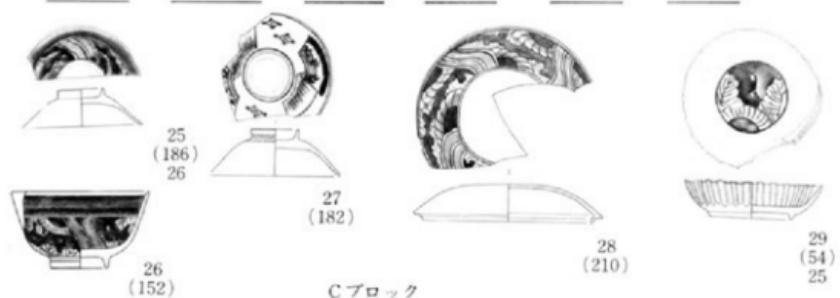
第95図は、Aブロックとしたもので18~20を除きそれが熔着関係にあることから、同時かぎわめて短期間に窯詰めされたものと考えられる。中でも2は、他の器種との熔着がもっとも多い。1~4は、見込に三足の焼台F I類（第94図805~810）を、その上に6、7、9、10の茶碗を乗せたもので7、13の如くである。皿は、焼台D類（第94図793~796）に乗り、4の如くである。採集された皿類の大部分は1~3で、これらのはほとんどは焼台の足が皿見込に、茶碗の高台が焼台に熔着したものと考えられる。また2と7のヘタレ、熔着は、両者の器表面に無数の細かいガス抜けによると思われる気泡穴と軽石状の重量しかないことから、焼成時の過剰温度か磁石土の不適格によるものと考えられる。この状況は7と17にも認められる。18は他の器種と直接熔着関係ではないが、13の「御役屋」銘の茶碗が多く出土することから、同銘丸皿も同時焼成の可能性を指摘できる。14は7、



第95図 A ブロック



B ブロック



C ブロック



D ブロック



E ブロック

第96図

IIと山水の丸皿（中）が焼台A、D II類とともに熔着したものである。

第96図はBブロック19~24、Cブロック25~30、Dブロック31~34、Eブロック35~37である。ブロック内でそれが熔着関係にあるもの、またそれらと同文様の対と考えられる蓋、身である。Bブロックの22、23は他との熔着関係はないが高台内の「石川」銘があることから同時焼成の可能性を指摘できる。Cブロックは、国示しなかったが27と同文様の飯茶碗と30の熔着が確認されている。Dブロックは30と32の熔着が認められるが、33も32と同様に区画内に山水文を配するなど同要素が認められる。Eブロックは、それぞれに熔着が認められる。

このようにAブロックを除いて、熔着関係はあまり多く認められないが、各ブロックとも多少の特徴は見出せるようである。Aブロックは、小皿類と草花文を中心とした茶碗それに藩供給の「御役屋」銘の茶碗、皿（中）と佐竹公の裏紋である源氏香紋「花散る里」の茶碗を主に焼成している。しかし熔着量が多いということは、裏返せば技術的には未熟さが目立つブロックと言えよう。B、Cブロックはつなぎ蔓草文の飯茶碗とそれに伴う蓋の多いブロックである。またBブロック20とCブロック26の飯茶碗は、ともに外面口縁部にはほぼ同幅のグラデーション帯をもうける点に共通点が認められる。D、Eブロックは、飯茶碗と蓋、皿に筆文を多用する点で共通する。

各ブロックにみられる共通性は、必ずしも同時焼成を示すものではないにしても、時間的にはきわめて近いものと考えられる。しかしその新旧関係については不明である。

（5）瓦窯及び出土瓦について

瓦窯は、3地区で計4基検出されている。形態的には、2号窯の平面形が長辺が直線的な長楕円形を呈するのにたいし、他の4、5、6号窯は船型を呈する。また構造的には、いずれもロストルを有し、2号窯は煉瓦を主体にし上部は瓦を積み上げている。4、5号窯は壁面構築に瓦を積み隙間はスサ入り粘土で埋め、6号窯は瓦を主体に積み、部分的に長方形の煉瓦、円柱状の焼台を転用材として用いている。これらは天井部が破壊されており、全体の構造は把握できないが、前後2ヶ所の焚口を有する平窯である。

5、6号窯は重複しており、6号窯が古い。また5号窯の窯底は2枚あり、作り替えが認められ、4号窯は5、6号窯の瓦物原上に構築されている。これら遺構の重複状況、位置関係から次ぎのような新旧関係が考えられる。

最初に6号窯が、その後同位置で5号窯が構築され一度作り替えが行われる。これらの物原は地形的に低い東緩斜面に広がっている。4号窯は、これら5、6号窯物原上に構築されている。2号窯については、遺構の重複等が認められず断定できないが、他の3基とは形態的に大きな変化があり、また構造的に裏込め等を施し焼成時の熱効率を十分に考慮されるなど、形態、構造的に進んだものであり、これらの中では最も新しい時期と考えられる。しかしこれらの構築時期及び操業期間については不明である。

出土瓦は、還元焰焼成によるいぶし瓦と酸化鉄（紅柄）溶液を塗布し酸化焰焼成を施した赤瓦で、いずれも棟瓦である。5、6号窯物原の瓦はいぶし、赤瓦両者認められるが、量的にはいぶし瓦が圧倒的に多い。窯床面出土としては、2号窯焚口付近からの712が1点で他の大部分は埋め土、壁材でありいぶし、赤瓦両者が認められる。検出した中では、いぶしと赤瓦を焼分けている窯は認められない。

軒桟瓦の瓦頭は、平瓦部が唐草文、波（山形）文の2種類で、後者はいぶし、赤瓦の両方が認められるが、前者は赤瓦のみである。また丸瓦部はほとんどが三巴であるが、中に金、松字、釘抜き紋、無紋のものも認められる。平瓦部と丸瓦部の文様の組合せは、軒桟瓦の絶対数が少なく明らかではないが、三巴と唐草文の組合せが最も多い。唐草文は、4つの異なる范が認められる。

藩内で瓦生産が開始された時期は不明であるが、前出の「八丁夜話」の文政9年（1826）によれば、「（前略）寺内・新藤田の内一坐止置るの外なしと申之（中略）先年岡見徳平（財用奉行）小田野兎毛、隠居喜斎をして越前より職人及び其品をはしめて取寄しときは、大木屋、北の丸の足軽番所を離せて試たり。（後略）」とある。すなわち文政9年以前に小田野兎毛等によって越前より職人と瓦を招き城内に瓦葺きを試したこと、また、瓦生産の瓦座が寺内・新藤田の2ヶ所にあったことが記されている。小田野兎毛は、角館白岩から寺内に窯を築くにあたって多大な功績を残していることは考察（1）ですべて述べた。さらに後段に「（前略）喜斎の配意にて国製の隨一となれり。国益又許多なり。今さかんに両坐にて製す。」とあり、一時は両座で盛んに瓦生産を行っていた様子が理解される。もちろんこの大部分は久保田城において使用されたものと考えられる。

この時点では焼かれていた瓦が、いぶし瓦か赤瓦かは、あきらかでないがいぶし瓦については、系統的に古く問題はないと思う。また赤瓦についても越前ではすでに17世紀代にその系譜が認められている（註20）、岩手県においても18世紀初頭には赤瓦の生産が行なわれていることから（註21）、藩内の両座においても頭から両者の瓦が焼成されていたことが考えられる。

このように文政9年以前、寺内窯の瓦座において越前瓦師の指導のもとに瓦生産が行われていたことがわかるが、さらに「八丁夜話」における記事の傍証資料として、いぶし瓦であるが紀年銘の入った鬼瓦がある。秋田市土崎の升屋薬局に伝わるもので「文政七甲申歳五月於新藤田山御瓦坐造之 越前國敦賀郡杉津村之人 辻伊助」とあり、文政7年の作であること、新藤田に瓦座があったこと、越前國瓦師辻伊助の造瓦であることが理解される。詳細については後日改めて別項で述べてみたいと考えている。



土崎 漆御蔵屋根瓦

しかし、この度の発掘調査で出土した

瓦については、年代を決定づける資料は認められない。ただそれを示唆するものとして4号窯の第86図715、717の唐草文と同范瓦が葺かれた幕末から明治にかけて建築された4棟の「湊御蔵」、それに平成元年に発掘調査が実施された久保田城の一画の御隅櫓出土軒桟瓦がある(註18)。御蔵は雄物川河口の現土崎の港町にあり、これまで宝曆年間の建築と考えられていたが、その後の調査研究(註19)により、最も古い板蔵が江戸後・末期、土蔵1棟が江戸末期、最も新しい土蔵2棟が明治13年であることが判明している。18世紀末に荻津勝孝によって描かれたといわれる『秋田街道絵巻』によれば、当時の御蔵は石葺き屋根であり、瓦は認められないことから、少なくとも19世紀以降に葺かれた瓦と考えられる。このうち4号窯の唐草文と同范瓦が葺かれているのは、明治13年建築の土蔵2棟である。この時の瓦が寺内瓦窯製品であることは、秋田県庁書庫に保存されている、寺内瓦最後の陶工である桜田要太が屋根瓦普請を請け負った際の請負書が証明している。しかし当然のことながら、これらの屋根は後世における差し替えが行われており、新旧入り混じって葺かれているのが現状で、どれが明治13年時の主流瓦であるのか不明である。久保田城御隅櫓跡の1号土壌出土の瓦は717と同范の唐草文軒桟瓦である。

調査結果によれば1号土壌は、江戸末期から明治期とされ、御隅櫓については文献史料から明治11年～明治13年の間に解体されたと考えられている。

これらのことから、寺内4号瓦窯の下限は明治13年頃であることが理解される。寺内瓦窯の上限が文政9年を越ることは前述の「八丁夜話」や紀年銘のある鬼瓦等の存在で傍証されるが、これまで検出されている窯および瓦については文政年間に越るものは認められず、さらに下降するものと考えられる。

註1. 渡辺爲吉『白岩瀬戸山』(復刻版)昭和54年

註2. 註1と同じ。

註3. 井上隆明・相沢清治「八丁夜話」『新秋田叢書』第2期・第1巻 昭和47年

註4. 大友義助「新庄東山焼について」『山形県立博物館研究報告』第3号 昭和50年他による。

註5. 秋田市在住、佐々木善三郎氏の説。

註6. 本資料は、池田家とゆかりのある秋田市寺内の土田家に保存されている。

註7. 註4と同じ。

註8. 小野正人『秋田陶芸夜話』昭和54年

註9. この資料は、大潟村在住の石原氏が採集したものである。

註10. 註4と同じ。

註11. 佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二氏に写真による鑑定を依頼したものである。

註12. 秋田市在住、安藤五百枝氏蔵。

註13. 秋田市在住、佐々木善三郎氏蔵。

- 註14. 秋田市在住、花岡泰雲氏蔵。
- 註15. 『羽陰諸家人名録』上、下、続編、『旭水叢書』全16冊、『備忘録』の資料は、秋田市の升屋家に保存されている。
- 註16. 秋田魁新報社『秋田人名大事典』昭和49年
- 註17. 秋田市立千秋美術館蔵。
- 註18. 秋田市教育委員会『久保田城跡』平成元年
- 註19. 池田憲和「旧秋田藩湊御蔵について」『出羽路』第93号 昭和63年
- 註20. 久保智康「近世中～後期 越前における赤瓦の生産」『福井考古学会会誌』第7号 平成元年
- 註21. 紫波町教育委員会『川原毛瓦窯址現地説明会資料』 平成元年



上 寺内燒窯跡出土皿
下 寺内燒窯跡出土飯茶碗蓋



上 寺内焼窯跡出土皿
下 寺内焼窯跡出土大皿



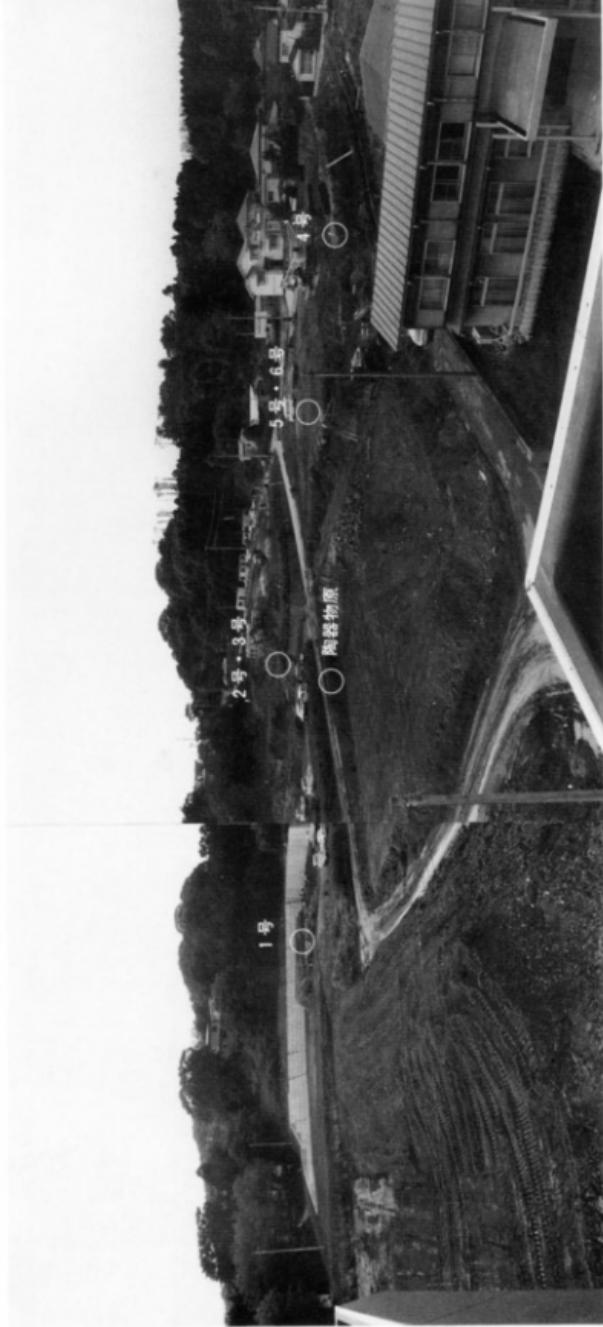
上 寺内焼窯跡出土皿・蓋（搬入品）

下 寺内焼窯跡出土皿（搬入品）



上 「道三」銘茶碗・蓋
下 「道三」銘蓋・茶碗・土瓶

図版 1 調査地全景（南東から）





圖版 2 1號黑路、窯前平場全景（南東方向）



図版3 上. 1号窯跡(東から)
下. 断ち割り状況(南東から)



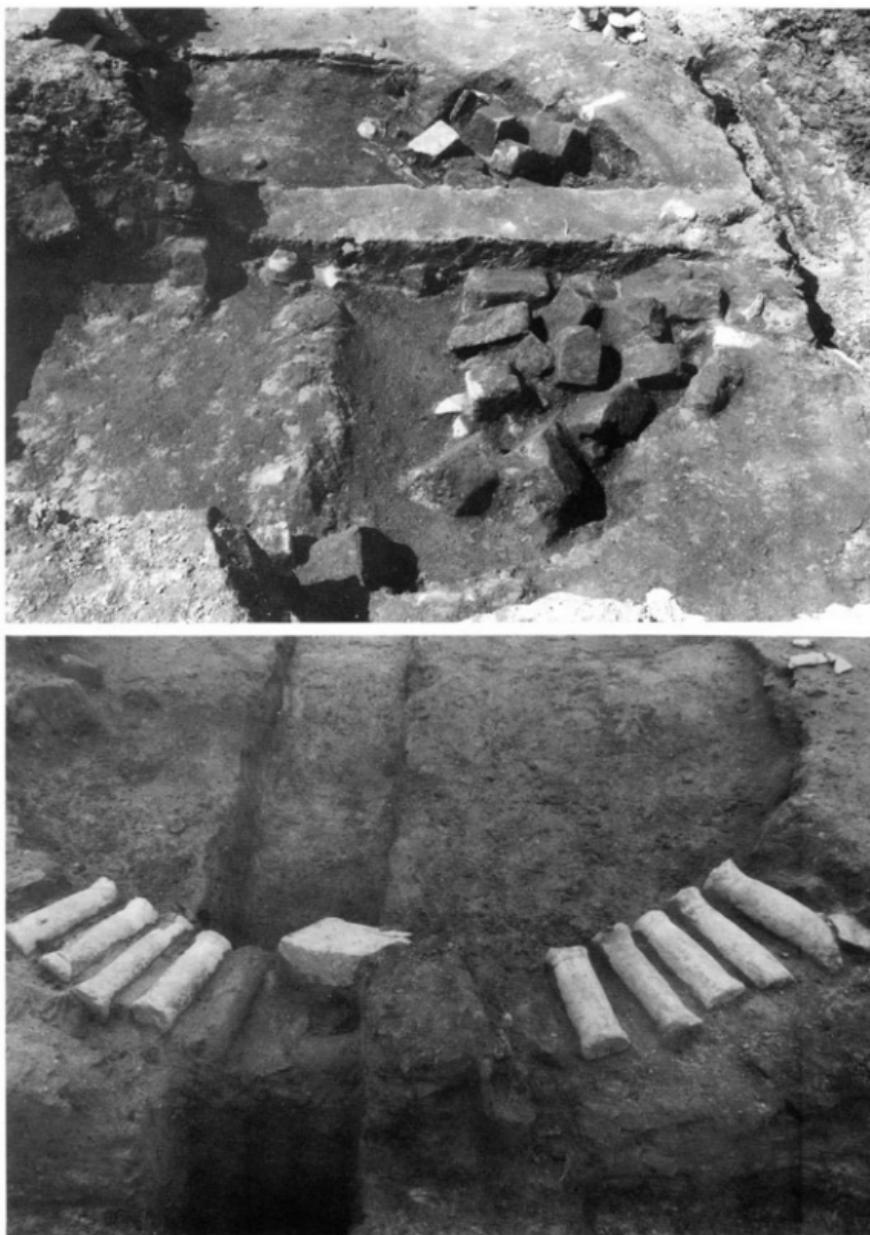
図版4 上. 1号窯跡燃焼室奥壁・通焰孔部分（東から）
下. 1号窯跡・第1焼成室奥壁・通焰孔部分（北東から）



図版5 上. 1号窯跡焚口および窯壁状況（北西から）
下. 1号窯跡・第2焼成室と「火床」（北から）



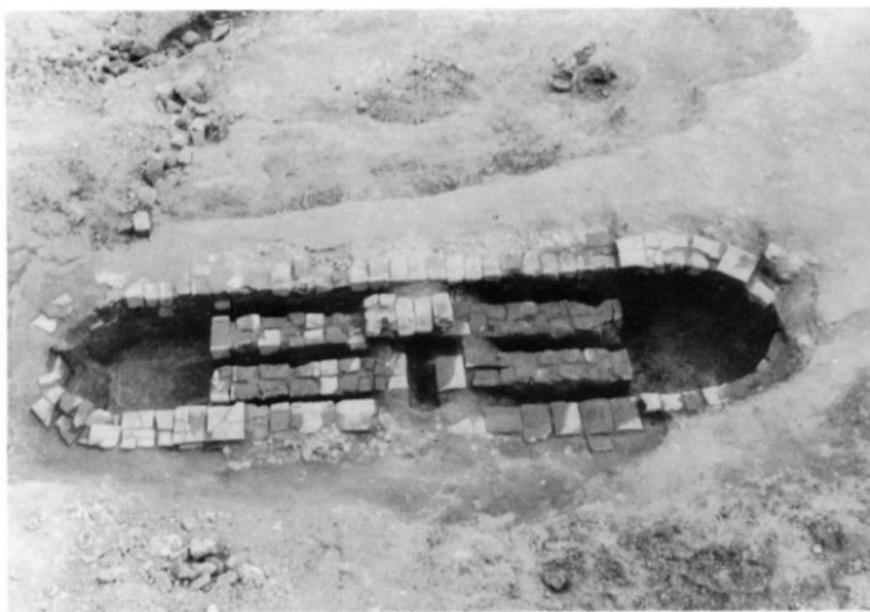
図版 6 上。1号窯跡、第1焼成室と「火床」(北から)
下。1号窯跡、第2焼成室「火床」(北東から)



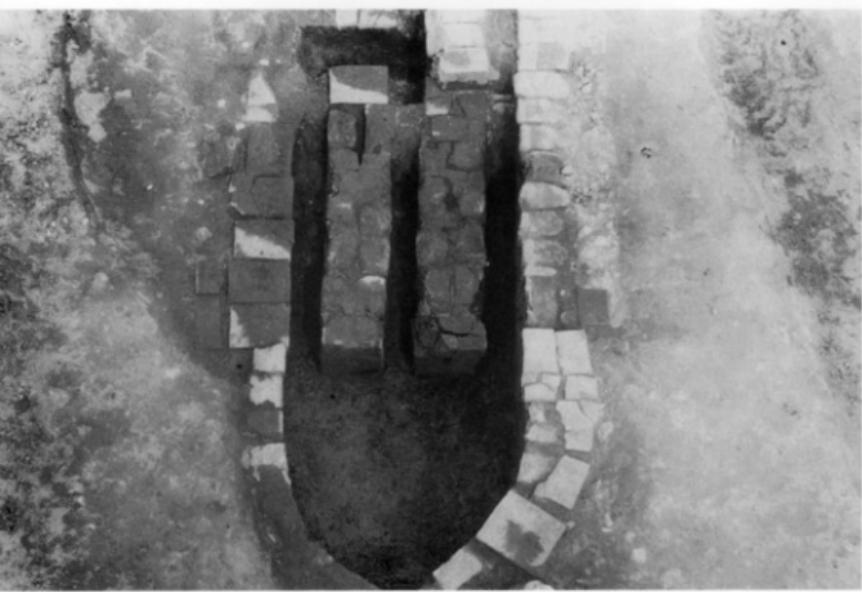
図版7 上. 1号窯跡燃焼室焚口付近（南から）
下. 1号窯跡焚口側窯壁使用焼台出土状況（東から）



図版 8 上. S B 002 挖立柱建物跡北東隅柱道存状況（南から）
下. 磁器物原トレンチ土層断面（北東から）



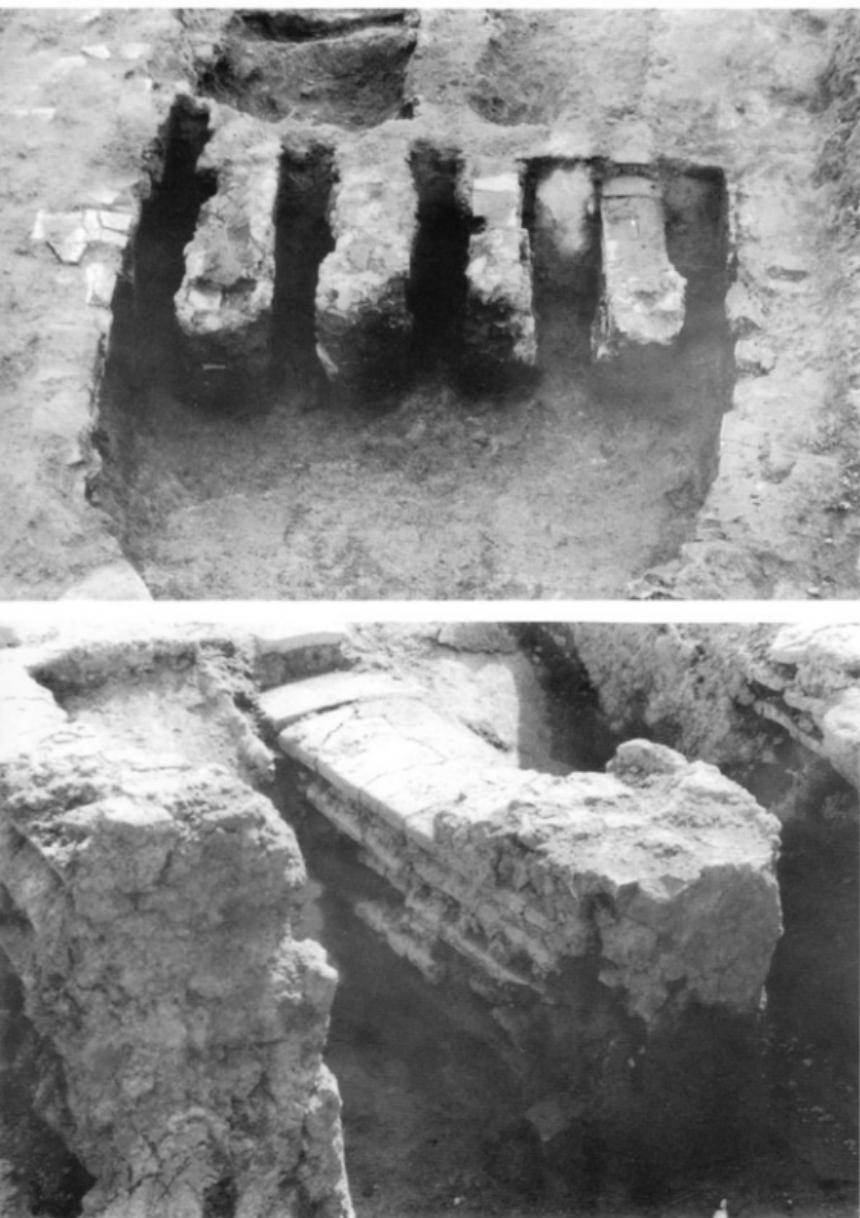
図版9 上. 2号窯跡（北から）
下. 2号窯跡東燃焼部から通焰溝部分（東から）



図版10 上. 2号窯跡西燃焼部から焼成部（西から）
下. 2号窯跡東燃焼部焚口（西から）



図版11 上. 4号窯跡（北から）
下. 4号窯跡北通焰溝部分（西から）



図版12 上. 4号窯跡北燃焼部から通焰溝部分（北から）
下. 4号窯跡北通焰溝部分（北から）



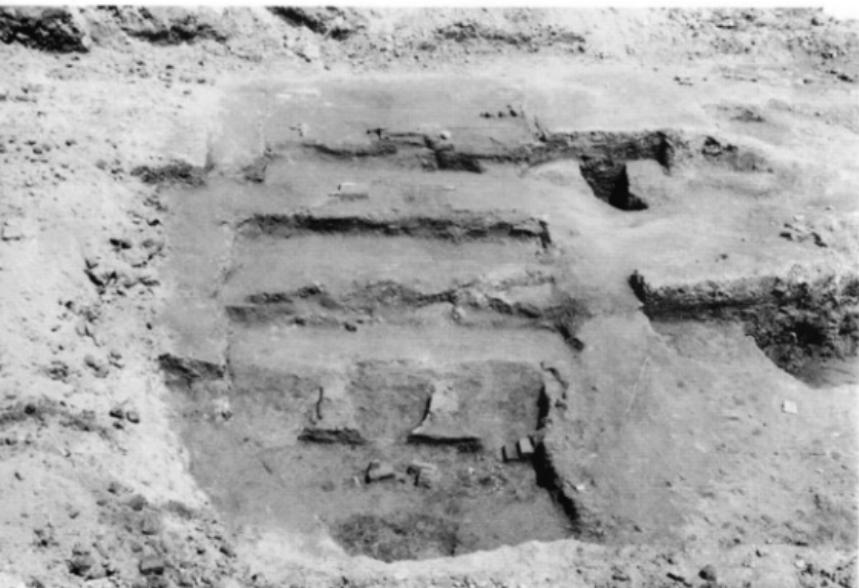
図版13 上. 4号窯跡北燃焼部東窯壁（西から）
下. S B001掘立柱建物跡柱・瓦物原検出状況（東から）



図版14 上. 5号窑跡、6号窑跡（南から）
下. 6号窑跡（西から）



図版15 上. 5号窯跡（西から）
下. 6号窯跡東燃焼部北窯壁（南から）



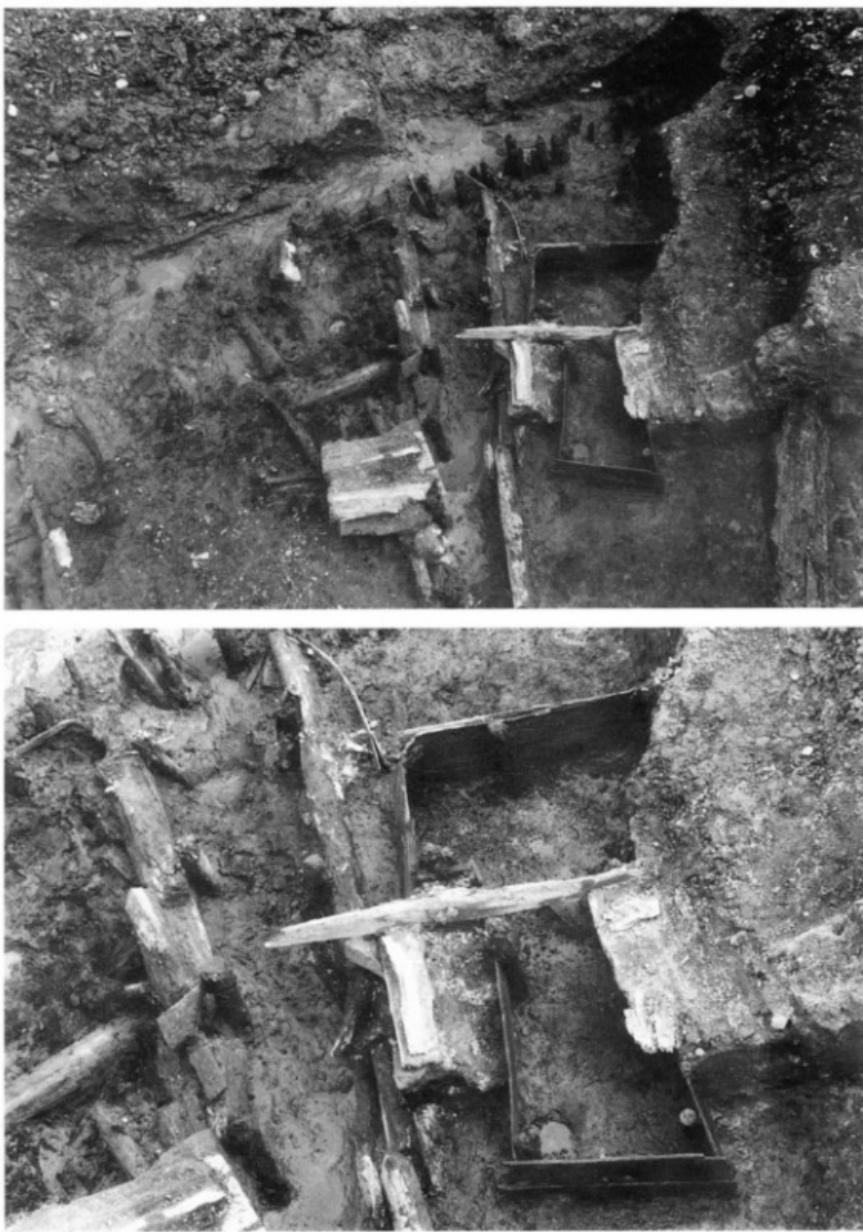
図版16 上. 3号窯跡（南から）
下. 3号窯跡（西から）



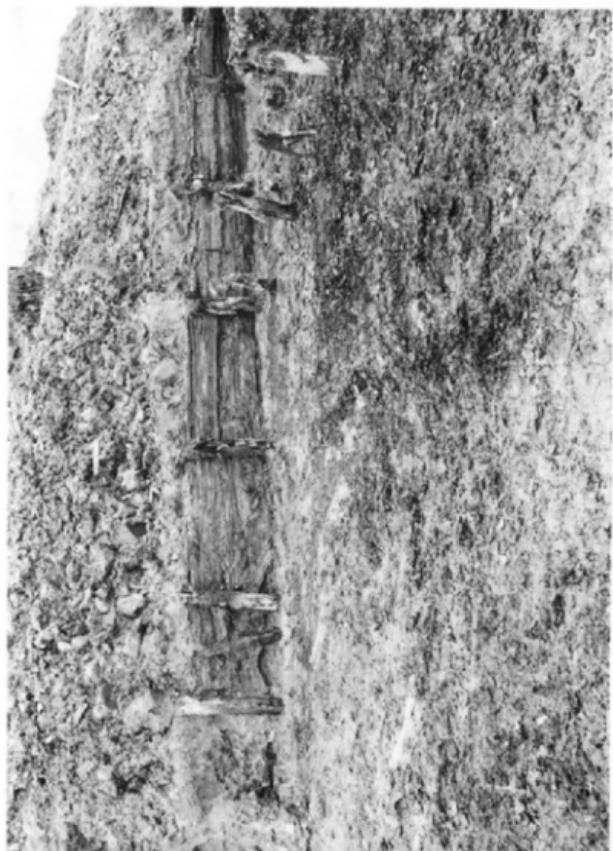
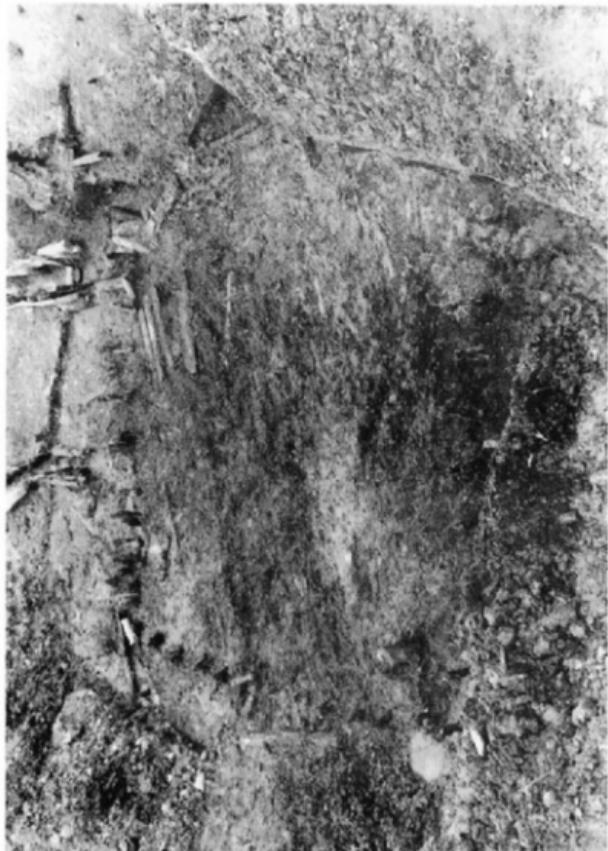
図版17 上. 3号窯跡第1焼成室付近床面断ち割り（東から）
下. 3号窯跡第3焼成室床面断ち割り（東から）



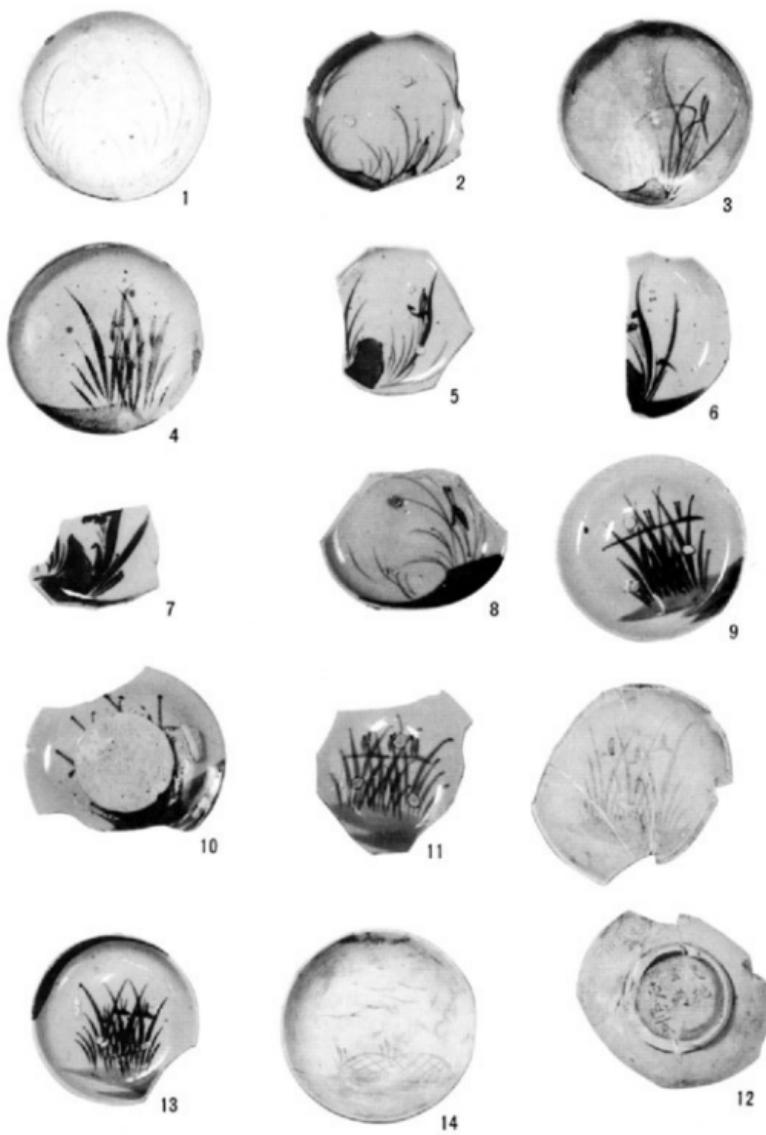
図版18 上. 窯前平場遺構検出状況（南から）
下. S X003貯水槽、S D004排水溝（東から）



図版19 上. S X003貯水槽、S D 004排水溝、S A 008杭列（北から）
下. S X003貯水槽（北から）



図版20 上, S A 007 土留め杭列 (北から)
下, S A 006 土留め板組 (東から)



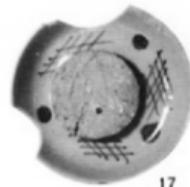
图版21 表面采集造物



15



16



17



18



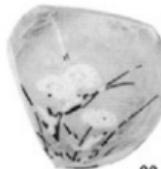
19



20



21



22



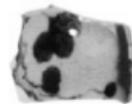
23



24



25

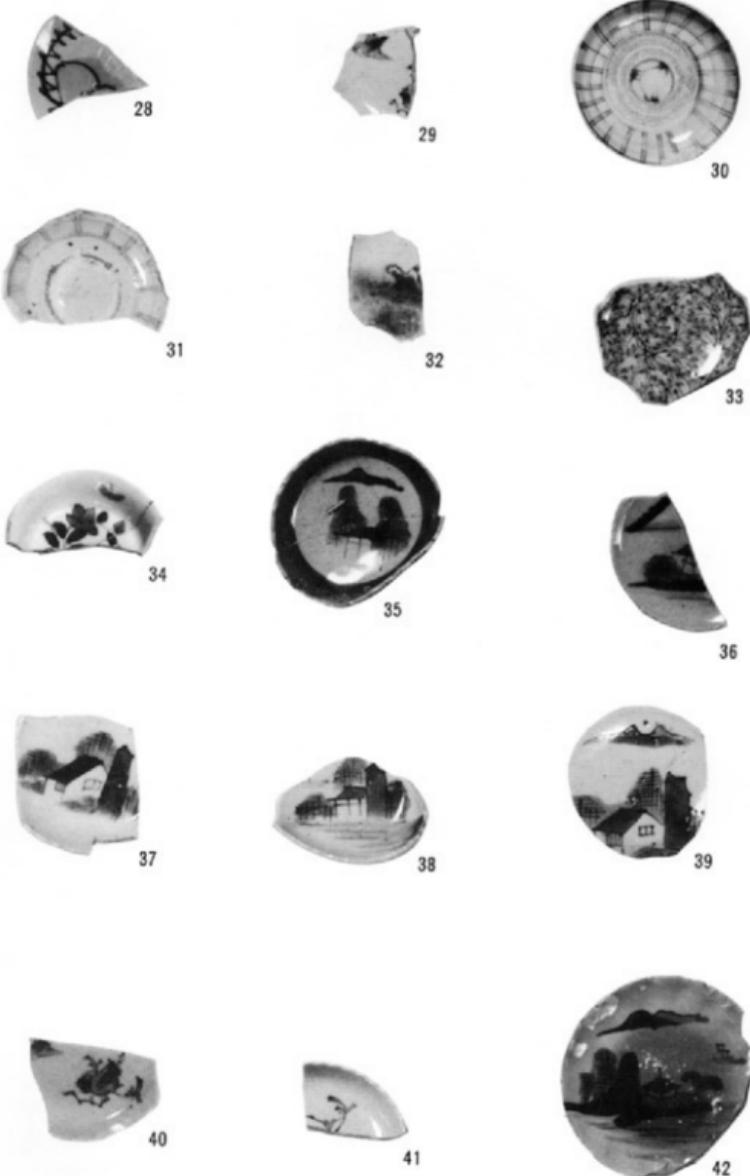


26



27

图版22 表面采集遗物



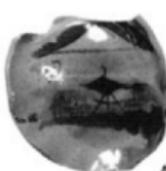
図版23 表面採集遺物



43



44



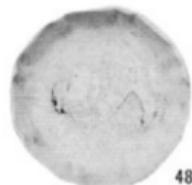
45



46



47



48



49



50



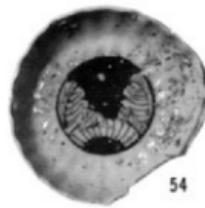
51



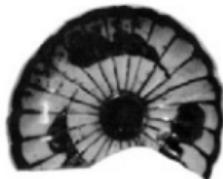
52



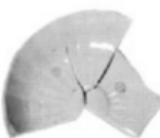
53



54



55



56



57

図版24 表面採集遺物



58



59



60



61



62



64



65



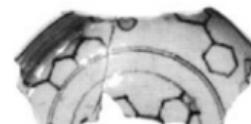
66



67



68



69



65

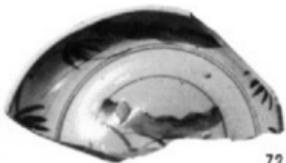
图版25 表面采集遗物



70



71



72



74

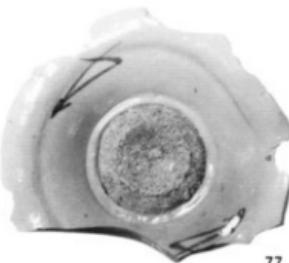
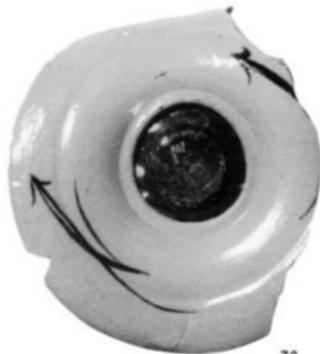


73



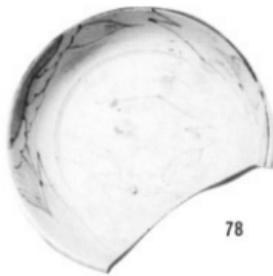
75

图版26 表面采集遗物



76

77



78

79

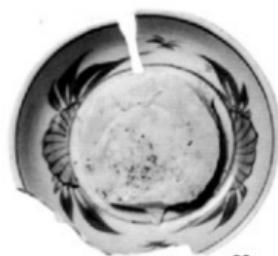
図版27 表面採集遺物



80



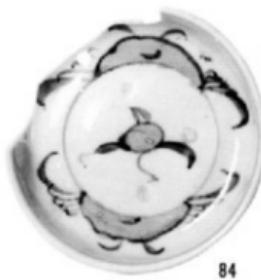
81



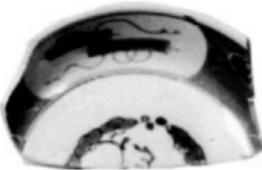
82



83



84

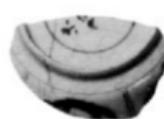


85

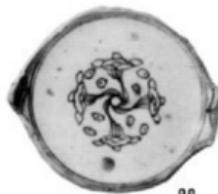
図版28 表面採集遺物



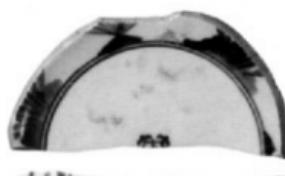
86



87



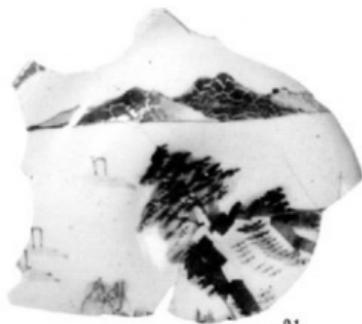
88



89



90

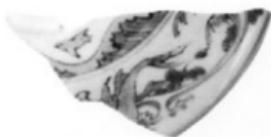


91



92

図版29 表面採集遺物



93



94

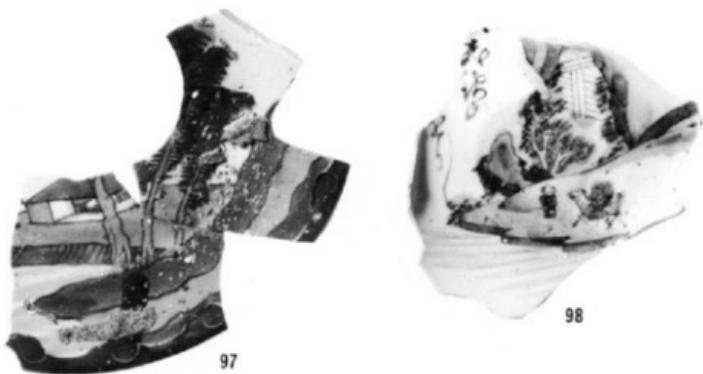


95



96

图版30 表面采集遗物



97

98



99

100



101

102

図版31 表面採集遺物



103



図版32 表面採集遺物



104



105



106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



118



119

圖版33 表面採集遺物



120



122



123



124



125



126



127



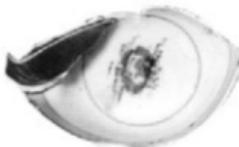
128



129



130



131

図版34 表面採集遺物



132



133



134



135



136



137



138



139



140



141



142



143



144



145



146



147



148



149

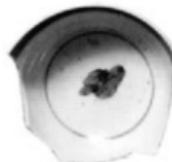
图版35 表面采集遗物



150



151



152



153



154



155



156



157



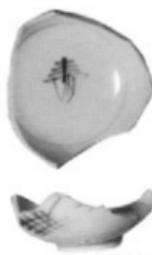
158



159



160



161



162



163



164



165



166



167



168



169



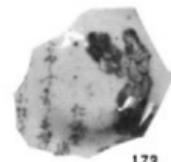
170



171



172



173



174



175



176



177



178

図版37 表面採集遺物



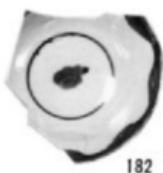
179



180



181



182



183



184



185



186



187

図版38 表面採集遺物



188



189



190



191



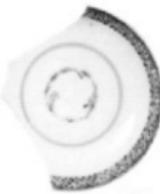
192



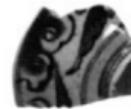
193



194



195



196

图版39 表面采集遗物



197



198



199



200



202



203



204



205



201



206



207



208



209



210



211



212



213



214

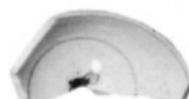
図版40 表面採集遺物



215



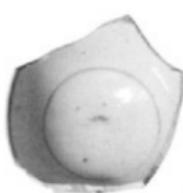
216



217



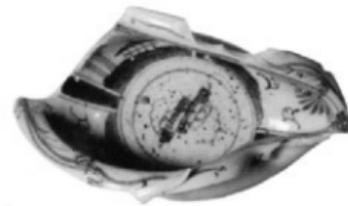
218



219



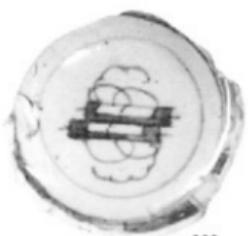
220



221



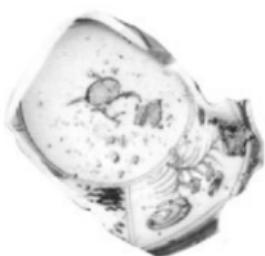
222



223



224



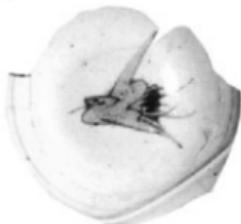
225



226



227



229



230



228



232



231



234



233



235



236



237



238



239



240



241



242



243



244



245



246



247



248



249



250



251



252



253



254



255



256

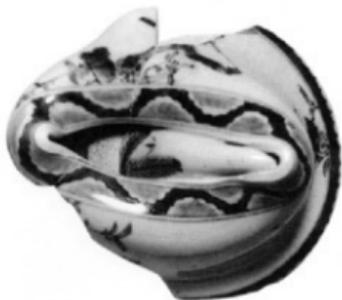


257



258

图版44 表面采集遗物



259



260



261



262



263



264



265



266



267



268



269

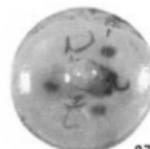
图版45 表面采集遗物



270



271



272



273



274



275



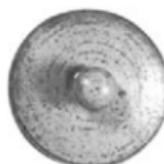
276



278



279



277



281



283



284



285



282



286



287



288



289



290



291

図版46 表面採集遺物



292



293



294



296



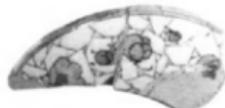
297



298



295



300



299



301



302



303



305



308



304



306

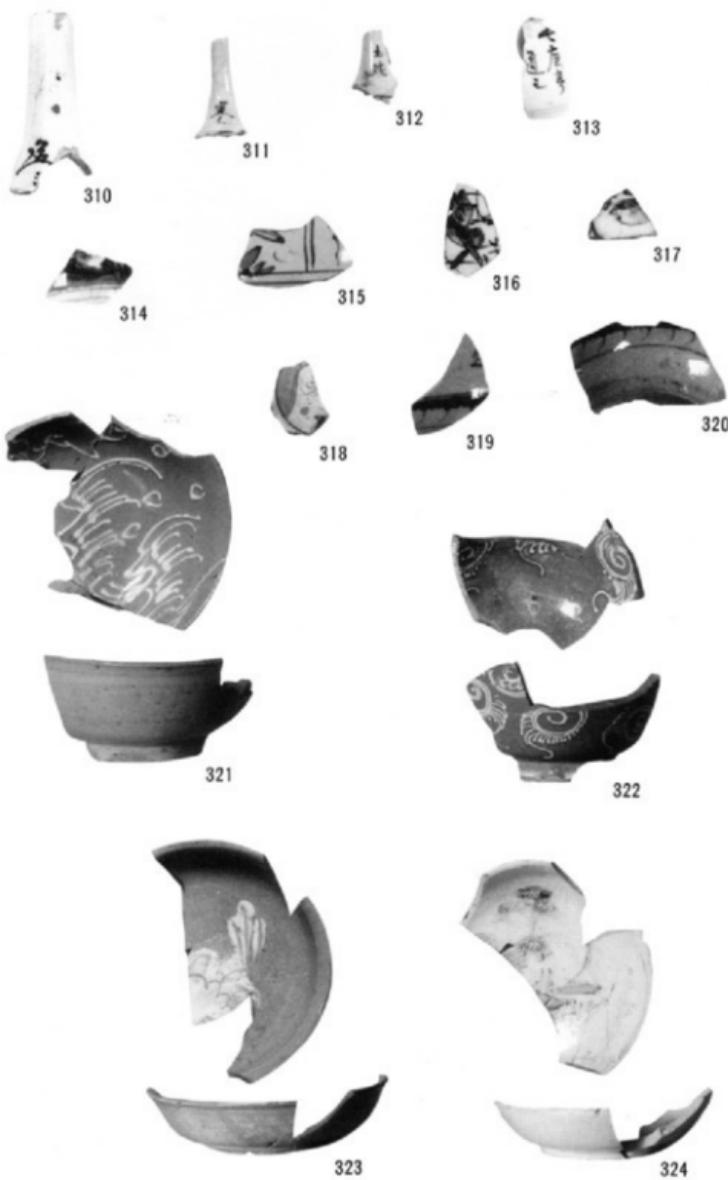


307



309

図版47 表面採集遺物



图版48 表面采集遗物



325



326



327



328



329



330



331



332



333



334



335

圖版49 表面採集遺物



336



337



338



339



340



341



342



343



344



345



346



347



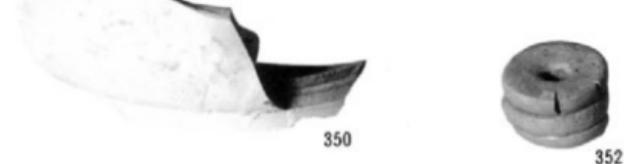
348



349



351



350



352



353



354

図版51 表面採集遺物



355



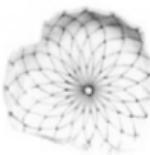
356



357



358



359



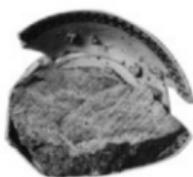
360



361



362



363



364

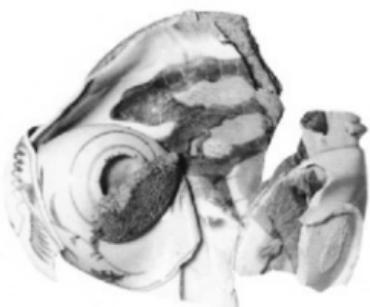


365



366

図版52 磁器物原（トレンチ内）出土遺物



368

369



370



371

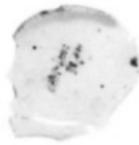


372



373

374



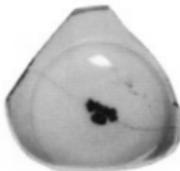
375

376

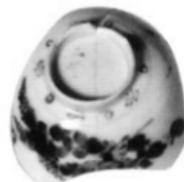
図版53 磁器物原（トレンチ内）出土遺物



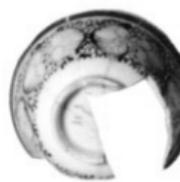
377



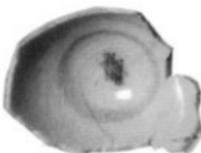
378



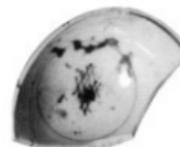
379



380



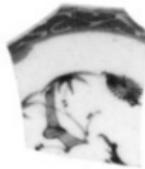
381



382



383



384



385



386

図版54 磁器物原（トレンチ内）出土遺物



387



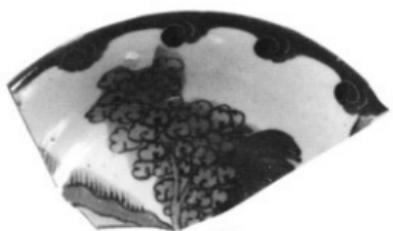
389



388



390



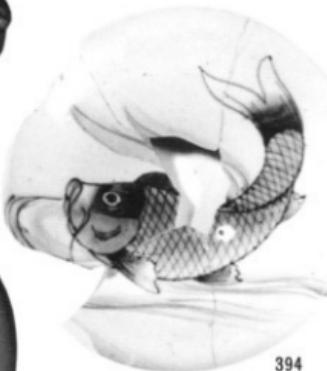
391



392

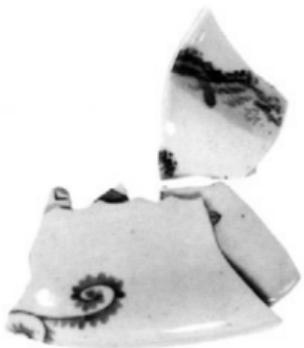
大白
天田
子

393



394

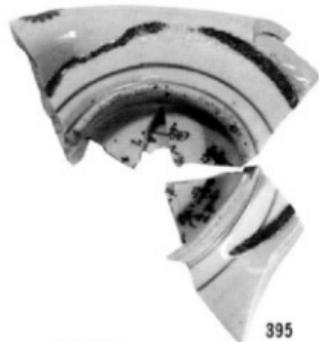
図版56 磁器物原（トレンチ内）出土遺物



395



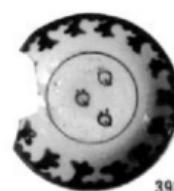
397



398



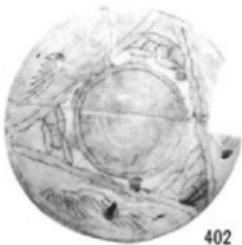
399



400



図版57 磁器物原（トレンチ内）出土遺物



404



401



403



405



406



407



409



408



410



411



412

図版58 磁器物原（トレンチ内）出土遺物



413



414



415



416



417



418



419



420



421



422



423



424

図版59 磁器物原（トレンチ内）出土遺物



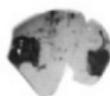
425



426



427



428



430



429



431



432



433



434



435



436



437

図版60 磁器物原（トレンチ内）出土遺物



438



439



440



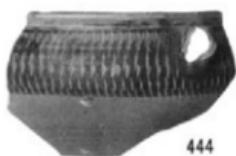
442



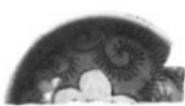
441



443



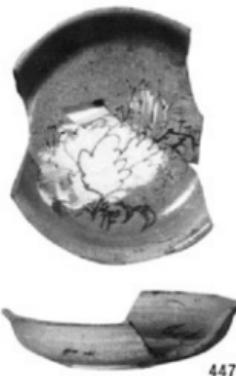
444



445



446



447

図版61 磁器物原（トレンチ内）出土遺物



448



449



450



451



452



454



453



455



456



457



458

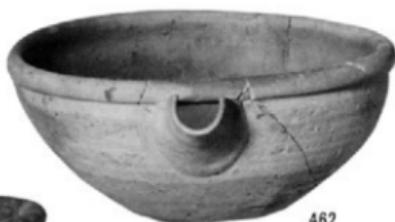
図版62 磁器物原（トレンチ内）出土遺物



459



460



462



461



463

図版63 磁器物原（トレンチ内）出土遺物



464



465



466



467



468



469

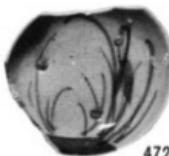
図版64 磁器物原（トレンチ内）出土遺物



470



471



472



473



474



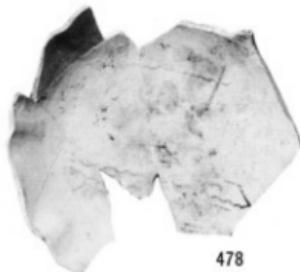
475



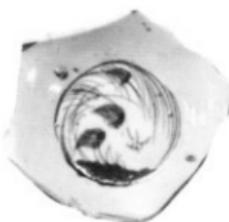
476



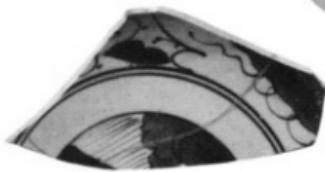
477



478



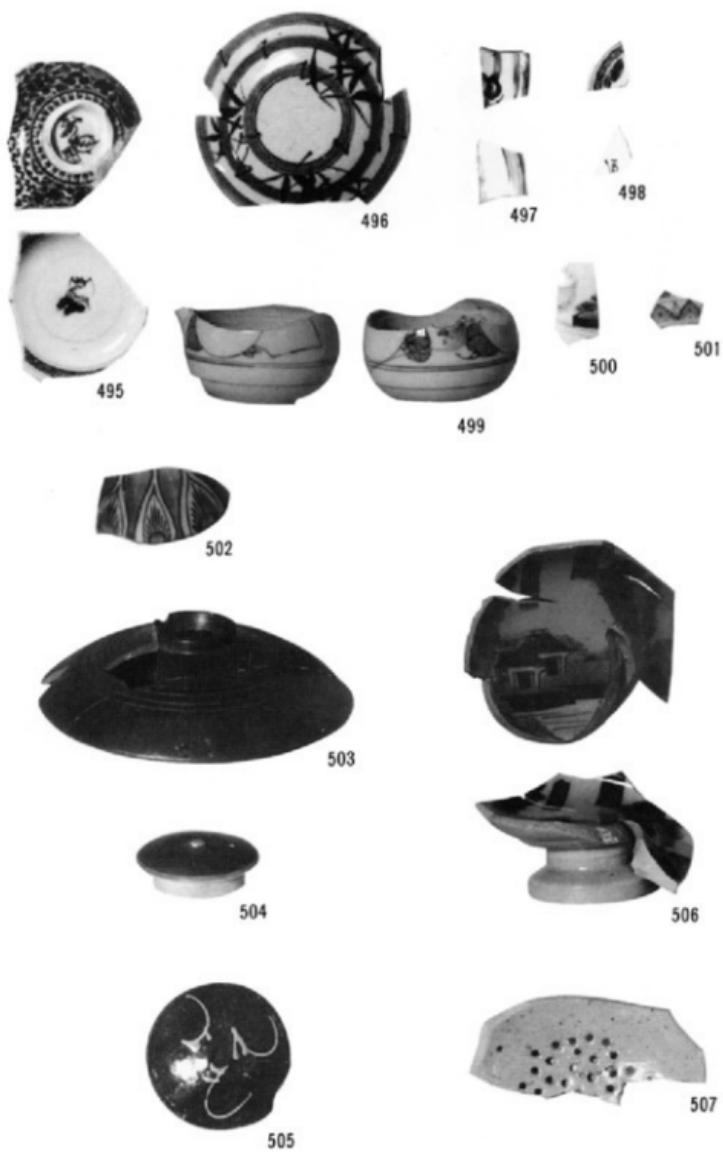
479



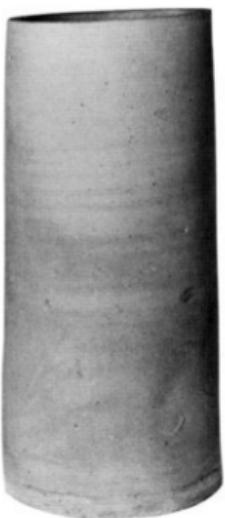
481

圖版65 1號窯跡前庭部包含層





图版67 1号窑址前庭部包含层



508



509



510



511

図版68 1号窯跡前庭部包含層



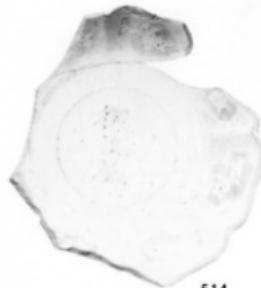
512



513



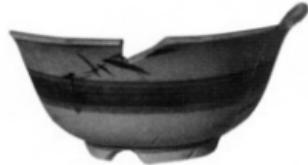
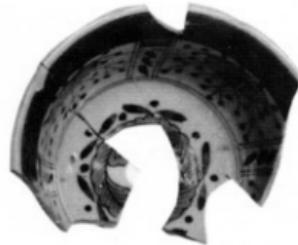
515



514



517

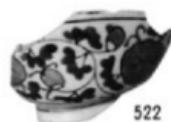


516

图版69 1号窑址前庭部下层出土遗物



521



522



523



523



524



524



525



525



526



526



527



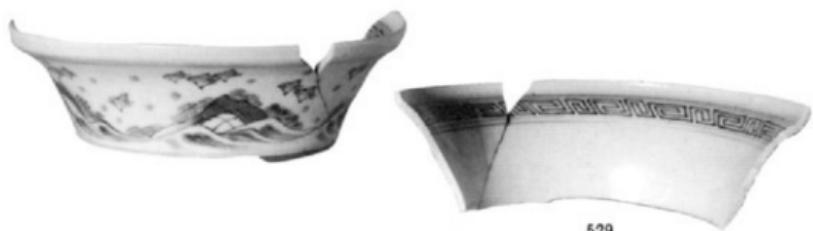
527



528

528

図版70 1号窯跡前庭部下層出土遺物



529



530



531



532



533



534



535



536



537



538



539

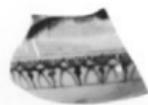


540

图版71 1号窑址前庭部下层出土遗物



541



542



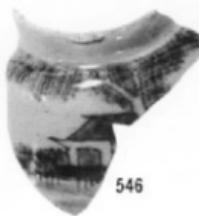
543



544



545



546



547



548



549



550



552



551



553



554



555

圖版72 1號窯跨前庭部下層出土遺物



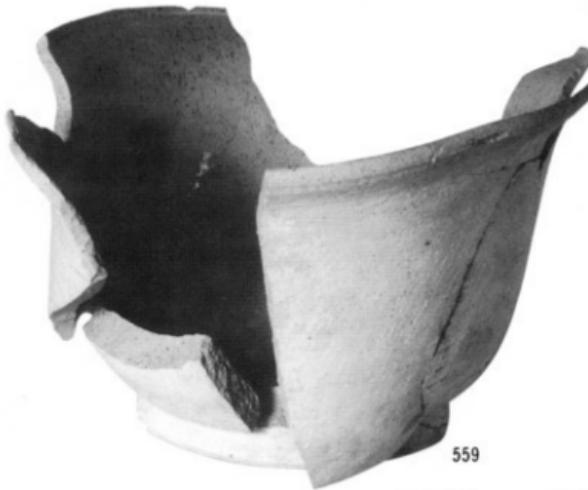
556



558



557



559



560

图版73 1号窑址前庭部下层出土遗物



561



562



564



563



565



566

图版74 1号窑址前庭部下层出土遗物



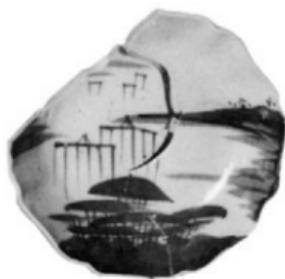
567



568



569



570



571



572



573



574



576



圖版75 陶器物原層出土遺物



577



578



579



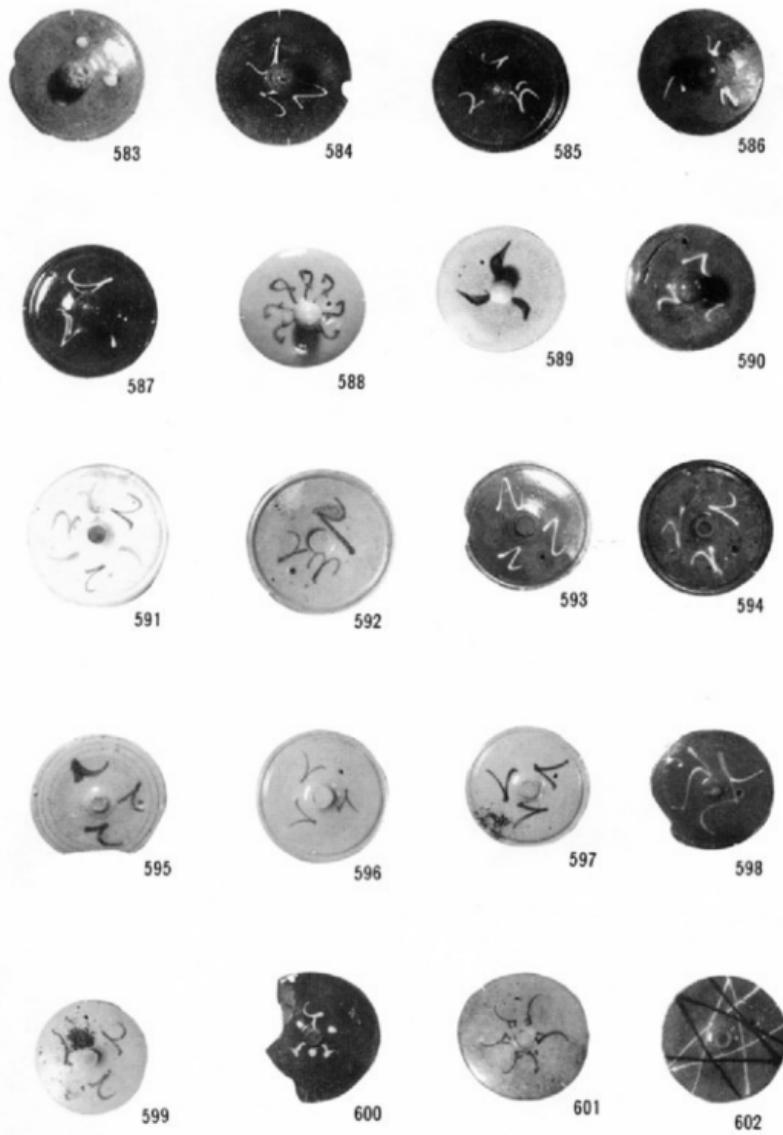
580

581



581

图版76 陶器物原层出土遗物



圖版77 陶器物原層出土遺物



603



604



605



606



607



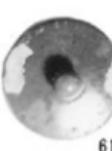
608



609



610



611



612



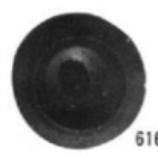
613



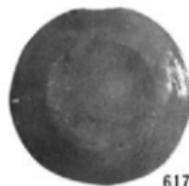
614



615



616



617



618



619



620



621



624



623



625



626

図版78 陶器物原層出土遺物



图版79 陶器物原层出土遗物



648



649



650



651



654



652



655



653

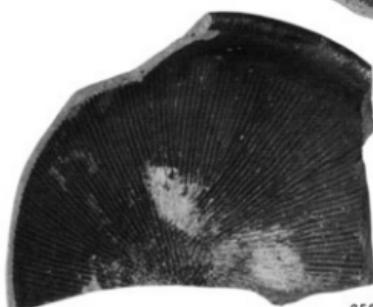


656

图版80 陶器物原层出土遗物



657



658



659



660

图版81 陶器物原层出土遗物



661



665



666



662



663



668



667



664



図版82 陶器物原層出土遺物



669



670



671



672



673



674



675



676



677



678



679



図版83 S A 006土留め板組東包含層出土遺物



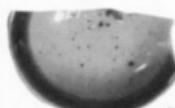
680



681



682



683



684



688



685



687



686



689

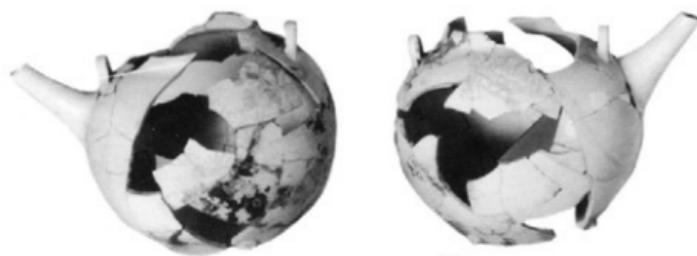


690



691

図版84 S A006土留め板組東包含層出土遺物



692



693



694



695



696



697



698

図版85 S A 006土留め板組東包含層出土遺物



図版86 S A006土留め板組東包含層出土遺物
3号煉瓦窯跡出土遺物（702～709）



710



711



712



713



714

图版87 2号瓦窑出土遗物



715



716



718



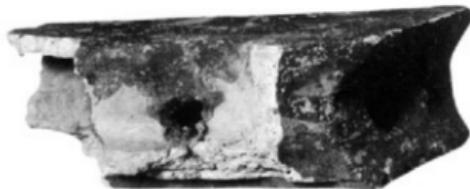
717



719



720

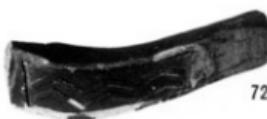


721

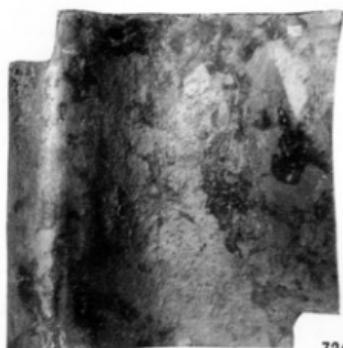
图版88 4号瓦窑跡出土遺物



722



723



724



725



726



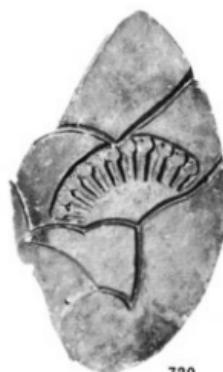
727



728



729



730



731

图版89 4号瓦窑蹲下瓦屑



732



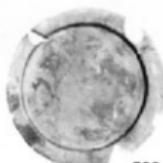
733



734



735



738



736



739



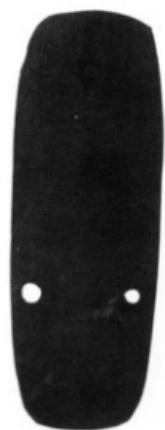
737



740

図版90 磁器物原トレンチ東側包含層出土瓦

表面採集瓦



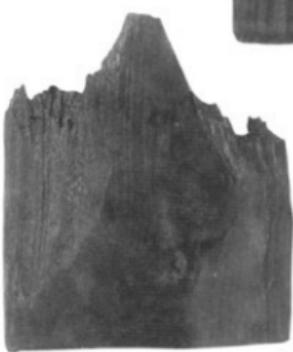
741



742



743



744



745

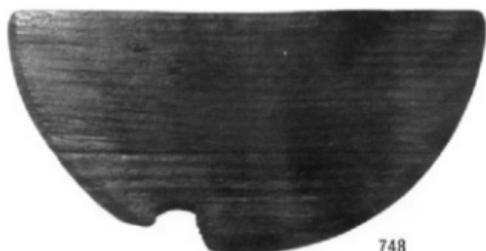


746

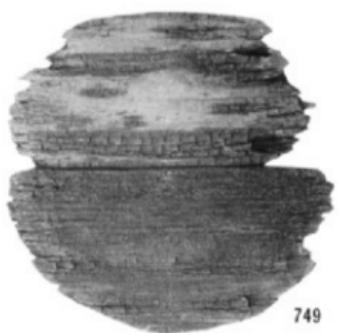


747

圖版91 1號窯前庭部下層作業場施設出土木製品



748



749



750



751



752



753



754

図版92 1号窯前庭部下層作業場施設出土木製品



755



756



757



758



759



760

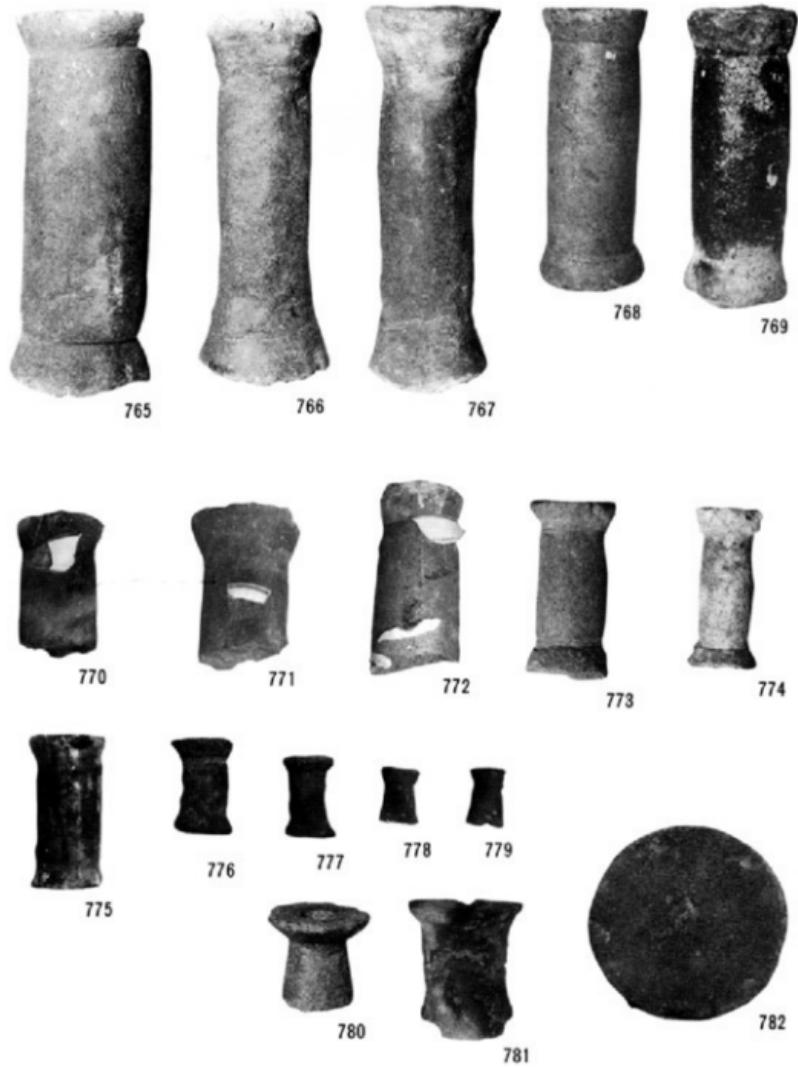


762



761

图版93 窑道具



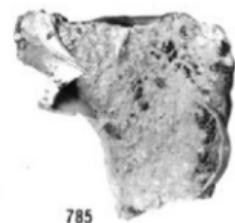
圖版94 窯道具



783



784



785



786

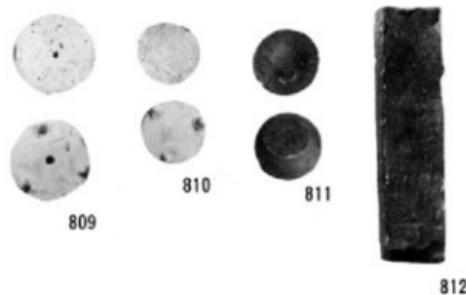
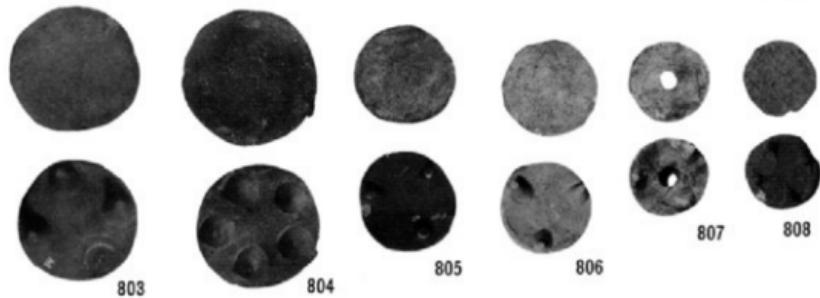
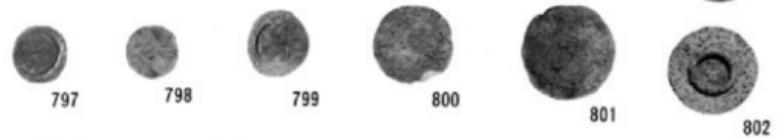
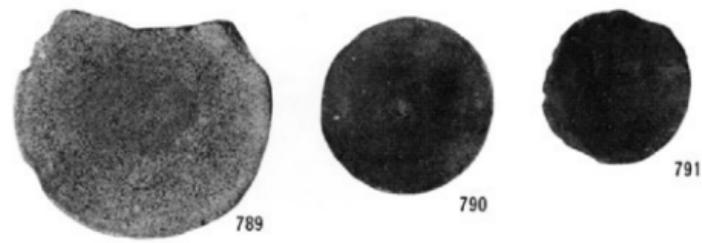


787



788

图版95 窑道具



图版96 窑道具



発行 平成3年3月30日

秋田市教育委員会

印刷 秋田マイクロ写真印刷(株)